

ドキュメンタリー映画製作が地域社会に与える 影響に関する研究

- 近江八幡市島町を対象として -

溝江 麻衣子

環境計画学科環境社会計画専攻において学士(環境科学)の学位授与の資格の
一部として滋賀県立大学環境科学部に提出した研究報告書

2007 年度

承認

指導教員

ドキュメンタリー映画製作が地域社会に与える影響に関する研究
- 近江八幡市島町を対象として -

1. 本研究の背景

滋賀県近江八幡市島町において、2006 年から島町において「ひょうたんから KO-MA（以下 KO-MA と表記）」という団体が、島町独自の古式松明である「ホンガラ松明」再生と、それに携わる人々を中心としたドキュメンタリー映画撮影を 2006 年 6 月から 2007 年 6 月まで行った。

本研究では、民俗学的調査と映像人類学的分析方法を用いて、ドキュメンタリー映像撮影が島町住民と KO-MA メンバーをいかにつなぐかについて考察し、映像を用いた地域社会に対するアプローチの参考になることを意図している。

2. 研究の目的と意義

2-1 本研究の目的

本研究では、近江八幡市島町におけるひょうたんから KO-MA によるドキュメンタリー映画の撮影過程を明らかにし、ドキュメンタリー撮影内容がどのようにシナリオに反映されているかを明らかにする。

2-2 本研究の意義

島町におけるドキュメンタリー映画撮影の過程と、シナリオに反映される内容を明らかにすることで、今後地域社会をテーマとしたドキュメンタリー映像作成に関する知見に寄与することである。

3. 島町の概要

3-1 島町の風土と歴史

島町は、滋賀県近江八幡市の北部に位置する人口 256 人（男:117、女:139）の農業地域である。現在の湖岸道路と渡合橋が整備されるまでは水路に囲まれた地域であり、琵琶湖に浮かぶ島のように見えたことからこの名がついた。

3-2 松明祭について

近江八幡市のそれぞれの市町村に松明祭があり、作られる松明もそれぞれ形や素材が異なっている。島町の松明祭では、ドンガラ松明と呼ばれる松明を、奥・山口・中・南・宮と呼ばれる組ごとに一基ずつ作り、若宮神社に奉納している。竹を 8 本シンに使い、周囲を葦で覆って作る。松明祭の一週間前の日曜日に半日程度で作られ、出来上がったドンガラ松明は軽トラックで若宮神社境内に運び込まれる。

3-3 ホンガラ松明について

ホンガラ松明とは、島町で 40 年以上前まで作られていた島町独自の様式の松明である。通常の松明は松明の外側から奉火するのに対し、ホンガラ松明は煙突状（図 1）で、松明の内部に火を入れる。火を入れた後、男衆で松明を持ち上げ、地面に叩きつ

近藤研究室 0412034 溝江麻衣子

けるという「ジツキ」と呼ばれる動作を行い、松明内部に空気を送り込む。それにより、炎は松明上部に向かい、松明の天辺から炎があがるという仕組みである。

かつては島町の青年団が有志で 2、3 本作っていた松明であったが、制作に時間がかかることと、材料が入手しづらくなった（竹・藁縄・藁束・菜種殻）ことにより、制作されなくなった。



図 1 ホンガラ松明のシン



図 2 ホンガラ松明

4. 島町におけるドキュメンタリー映画について

4-1 島町におけるドキュメンタリー映画の概要

監修を原一男、監督兼カメラマンを長岡野亜が務める、約 50 年ぶりにホンガラ松明が再現される手順を追うと共に、その活動に携わる「長老」達の、島町や後世への思いを中心として、シナリオが構成されている。更に、若い世代の思いや交流も描くことで、島町住民に「自分達の地域の魅力を再発見」してもらい、島町以外の人に対しては、地域での活動をはじめ「きっかけ」となることを狙いとしている。完成・上映は 2008 年 3 月 8 日を予定している。

4-2 ひょうたんから KO-MA について

滋賀県域の NPO 活動を支援する淡海ネットワークセンターが主催する「おうみ未来塾」において、地域の課題を解決するための多彩な人材が集まる「地域プロデューサー養成所」がある。そのうちの 7 人が集まって結成されたのが「ひょうたんから KO-MA」である（以下 KO-MA と表記）。主に滋賀県近江八幡市を舞台に「農をベースとした持続可能な組織を作ること」を目的に活動している。

5. ドキュメンタリー映画について

5-1 ドキュメンタリー映画の理論

ドキュメンタリーという名称は日本においては新しく「記録映画」と呼ばれる時代が長く続いていた。

「記録映画」は、自分を殺して記録に徹すること、より現実に近いということが評価されるものである。ニュース速報の映像やルポルタージュ（教育映画や文化映画も含む）においても、撮影者（もしくは編集者）の価値観と主張は、責任をもって表明されない。

鎌仲ひとみは、ドキュメンタリーの定義として「現実を創造的に再構成する映画手法」と述べている。そして、フィクションとの違いを「ドキュメンタリーにも演出は存在し、前提として作品を通して伝えたいものがある限りそこに意図は存在する。（中略）加えて制作者が現実に介入して、現実を変える場合も時にはありうる。」としている¹⁾。

また、最近では機材が小型化したことと、パソコンによる編集が容易になったことなどから、社会的テーマと少し距離を置いた演出の「私（ワタクシ）ドキュメンタリー」がジャンルを確立しようとしている。

手軽に日常を綴るということから、ウェブログと似ているので「ドキュメンタリーのブログ化」を懸念する声がある。

佐藤真は著書「ドキュメンタリー映画の地平」において、「ハンディで廉価なフィルムと機材の普及は、『小型映画』とも呼ばれる個人映画の一つのジャンルを作り出した。（中略）家族の記念撮影や旅の記録といったホームムービーの大半も、その映されている家族にしか意味がない、閉じた世界にとどまっている。」と述べた後、この双方の映画に欠落しているのは「『わがこと』を見つめる他者の眼差しである」としている。つまり、物事を一度自分の思いこみから切り離し、新しい視点で組み立て直すということがドキュメンタリーにおいて求められていることと言えそうである。

一般的にドキュメンタリーを撮影するためには、入念な準備調査と撮影対象との関係をいかに構築するかということが重要になる。

撮影対象との関係は、「穏やかで友好的」が最良というわけではない。原一男(1945-)のように、撮影対象を挑発するようにカメラを回すことで、原本人が「アクション・ドキュメンタリー」と名付ける強烈な作品を仕上げているものもある。

5-2 島町におけるドキュメンタリー映画の位置づけ

長岡氏（島町でのドキュメンタリー撮影における撮影兼監督）によると、島町におけるドキュメンタリー映画（以下島町ドキュメンタリーと表記）は、映画として特異な手法を使ってはいない。テーマとしても、「地域の問題を取り上げる」ということに関して、ドキュメンタリーとしては平凡な部類に入るとのことであった。

他のドキュメンタリーと異なる点は「撮影対象に向けても発信する」という点である。通常のドキュメンタリーの主張は、撮影対象から外部にのみベクトルが向いている。島町ドキュメンタリーは、島町

と同様な文化存続・継承の問題で悩んでいる外部地域に向けて発信することと同時に、「島町住民」に対して「島町にはホンガラ松明という素晴らしい文化がある」というメッセージを伝えることが目的とされている。そして、島町住民が改めて自分達の住んでいる地域を見直し、これから島町をどうしていくべきかを考えるためのツールになることが期待されている。

5-3 シナリオメモの役割

シナリオメモとは、島町ドキュメンタリーの台本のようなものである。KO-MA メンバーと長岡氏で目的とコンセプトを作り、藤田氏（KO-MA メンバー、メイン AD）と長岡氏が撮影を重ねる中で相談し肉付けし、長岡氏が最終案を仕上げた。



図3 シナリオメモ最終案概要

6. 調査と分析方法

6-1 調査概要

島町におけるドキュメンタリー撮影に、2007年1月29日から2007年6月13日まで、計20回参与観察を行った（表1）。KO-MAによる撮影は、2006年6月から行われている。

表1 撮影に参加した日時・場所・内容一覧

撮影日	撮影場所	撮影内容
2007年1月29日	島町内の竹林	ホンガラ松明用の竹刈り
	白玉町	蕎麦切りの様子
2007年2月17日	島町内福居さん宅	獅子舞
2007年3月11日	島町内松村さん宅	松村さん、福居さんへのインタビュー
	島町内櫻井さん宅	櫻井さんへのインタビュー
2007年3月12日	島町内村松さん宅	村松さん夫婦へのインタビュー
	島町内奥西さん宅	奥西さんへのインタビュー
2007年3月13日	島町内門野さん宅	門野さんへのインタビュー、ホンガラ松明の写真を見せて貰う
	島町内田谷さん宅	田谷さん夫婦へのインタビュー
2007年4月3日	権現山	権現山の祠へのお参り
		稚児託宣祭
2007年4月4日	島町内草の根広場	老人クラブのゲートボール
	白玉町	蕎麦を買いに行く様子
	近江八幡市内	島町以外の地域の松明撮影
2007年4月12日	島町内田谷さん宅	田谷さんへのインタビュー
	島町内	季節が分かるもの（菜の花やテントウムシなど）
2007年4月15日	島町内	ドンガラ松明組み立て、太鼓の飾り付け作業の様子
	島町内櫻井さん宅	櫻井さんへのインタビュー
	ひむれ八幡宮	八幡祭の様子
2007年4月17日	島町内若宮神社	松村さん、福居さんへのインタビュー
2007年4月20日	島町内	南さんを含め、女性へのインタビュー
	島町内若宮神社	ドンガラ、ホンガラ松明の姿
2007年4月21日	島町内自治会館	ナオライ（男衆が集まる宴会）
	島町内	太鼓の渡りとそれを見ている人の様子
	島町内若宮神社	松明祭（宵宮）、ホンガラ松明奉火
2007年4月22日	島町内	卯の刻参り
	島町内大嶋・奥津嶋神社	神事、御神輿
2007年5月8日	島町内	福居さんインタビュー
2007年5月15日	島町内福居さん宅	福居さんへのインタビュー
2007年5月30日	島町内	若者へのインタビュー
2007年6月5日	島町内	老人達へのインタビュー
2007年6月8日	×	天候不良により撮影中止
2007年6月10日	島町内福居さん宅	餅餅、ちまき作り撮影
2007年6月13日	島町内門野さん宅	門野さんへのインタビュー

また、長岡氏（監督兼カメラマン）、藤田氏、中川氏（KO-MA メンバー、島町在住）にヒアリングを行った。

更に、シナリオメモの変遷を明らかにし、撮影段階における KO-MA の趣旨を考察した。



図4 撮影する写真を見せてもらう長岡氏

6-2 KJ法を使った分析

6-2-1 分析方法

参与観察時に島町住民から得た言葉から、KJ法を行い、「恥ずかしさ」「不安」「疑問」「誇り」「感動」「期待」「諦め」「きっかけ」「演じる」「演出（シカケ）」「つなぎ」という11のキーワードを得た。撮影時、ヒアリング内容、シナリオメモの内容分類、考察を行った。

6-2-2 分析結果

- 「恥ずかしさ」...「カメラに撮られる」、映像が不特定な他者に晒されるということに対する感情である。自分（達）を客観的に見るきっかけになる。
- 「不安」... 島町におけるドキュメンタリーが成立するかどうか 松明祭においてホンガラ松明が成功するかどうかという二種類の不安に分けられる。はプロの介入などで解消し、はシナリオ内に取り入れ、後の感動的な松明の姿への準備とする。
- 「疑問」... 「なぜホンガラ松明が途絶えてしまったのか」「ホンガラ松明とはどういったものなのか」という、島町ドキュメンタリーの原点になる部分であった。KO-MAの介入が無ければ出てこなかった疑問であると考えられる。
- 「誇り」...ホンガラ松明以外にも、天智天皇の「ムベ」の話や島小学校の郷土教育の話など、住民もよく知らなかった話が老人達からきかれた。シナリオの随所に入れられている要素である。
- 「感動」...島町ドキュメンタリーにおいて重要なシーンとなる。ホンガラ松明の成功は当然であるが、長老たちが紹介した「ホンガラ松明のシンをくぐって遊んだ」話や「松明に飛び火したとき、よじのぼって必死に消火した」などのエピソードが再現されたかのような場面があった。生活が変わってもそこに住む人は変わらないとでも言うかのような、感動を生む場面である。
- 「期待」...長岡氏が丁寧に取材を重ねていたことを島町の人は見ており、「すごい作品ができる」と期待している。また、影響を持つ映画となるよう期待されてシナリオが組まれている。
- 「きっかけ」...今回の島町ドキュメンタリーがきっかけで、島町内における祭りが活発に

なることが、KO-MAの目的として挙げられている。シナリオメモに「きっかけ」が明示される箇所は無いが、シナリオに盛り込まれている内容はたくさんの「きっかけ」から生まれている。

- 「演じる」...「カメラの前」という非日常的な状態は、被写体となっている人にとって「いつもの自分」とは異なる自分を引き出させる。
- 「演出（シカケ）」...「若者達が自ら動く」よう自治会との会議を呼びかけるという演出（シカケ）をするのはプロデューサーであるKO-MAの役割だが、シナリオ内に紹介されるわけではない。
- 「つなぎ」...KO-MAのメンバーは中川氏以外外部の人間なので、中川氏のスムーズな仲介によって問題なく撮影が行えたということである。また、島町内に関しては自治会の集まりに若者を呼び、議論を交わすなど次への「つなぎ」となる場が設けられている。

7. 考察及び結論

7-1 島町ドキュメンタリーにおける考察

今回の島町におけるドキュメンタリー映画撮影は、「地域が動くきっかけ」となることが期待されて撮影されたものである。そのきっかけから、島町内の話し合いが生まれ、行政計画には実現できない「理想の島町」が出来ていくことが期待される。

しかし、ドキュメンタリー作品として捉えたときの限界も存在する。ドキュメンタリー作品は制作者の意図により構成されている（島町ドキュメンタリーにおいてはKO-MAの意図）。よって、意図に沿わない場面や、KO-MAが「演出」を施した場面が切り落とされていることを念頭に置く必要がある。

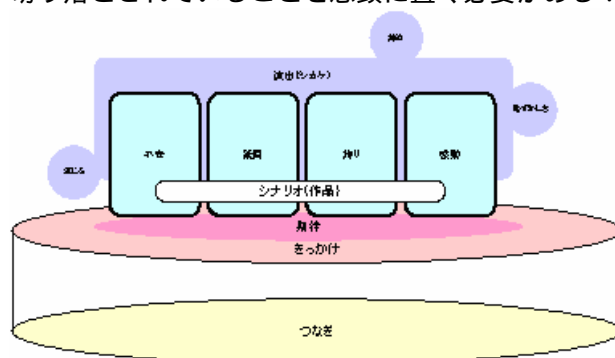


図5 シナリオが成立するための要素

7-2 今後地域をテーマにしたドキュメンタリー撮影における提案

7-2-1 作品（アート）として成立させるとのこと

作品（アート）として成立させるとことは、ドキュメンタリーの「日記化」を防ぐということである。ただ事実を「なんとなく」映し、他人に公開することは、現在流行している「ブログ」とポジションが変わらない。私的なブログを見る理由は、「そのブログに載せられている情報に興味・関心がある」場合を除けば、「知人の、自分の知らない一面を見た

い」というものがある²⁾。島町のドキュメンタリーにおいても、登場する人物を知る人々にとっては、「自分たちの知らない一面」を見られるということから、興味深く観てもらえるだろう。しかし、知人が見れば面白いが、第三者から見ると「何が言いたいかわからない」という状態になってしまう。私的なドキュメンタリーが映画作品として普遍性を持つためには、その私的な世界を見つめる他者としての視点が必要なのだ。作品として完成されたものにするためには、「不安」「疑問」「誇り」「感動」のように、観客が共感しやすい感情を盛り込むことが必要となってくる。これらの感情は、被写体とある程度信頼関係が成立していないと、「恥ずかしさ」「諦め（諦めのように思える発言は本心ではなく謙遜の場合が多い）が入ってきて上手く撮影できない可能性がある。

7-2-2 制作者側の意見について

作り手が伝えたい意見を明確に持っていないと、途中で作品に対する情熱を失いかねない。撮影当初は、被写体も緊張し「恥ずかしさ」「あきらめ」「不安」などの発言が出やすい。ここで撮影を諦めれば、物事の本質は捉えられない。このような映像を撮っても被写体は「期待」しなくなる。「演出（シカケ）」も中途半端なものになるだろう。

また、長岡氏が「カメラは恐ろしいくらい、その場の雰囲気を出し出す」なんとなく撮った映像はなんとなくでしかない」と、撮影当初藤田氏にメールで伝えている³⁾。このことから、明確な目標に向かって一途に撮影するのが理想である。

しかし、「自分たちはこうしたい」と撮影対象に無理強いしては、被写体が持っている「不安」「疑問」「誇り」「感動」まで殺いでしまう。また、撮影が終わった後不満が残る、撮影が良い「きっかけ」とならないことも考えられる。撮影対象を挑発する撮影方法もあるが、地域に入るならば避けたほうがよい。後々、地域と共に活動していくことにつながっていないからである。

7-2-3 「つなぎ」となる人物を見つけることについて

「つなぎ」となる人物（キーパーソン）は必要である。まず、撮影者側に、撮影対象に関わる人（地域ならば、地元の人）がいることが理想である。まったくの部外者が、唐突に地域を訪れて「ドキュメンタリーを撮りたい」と伝えても、なかなか打ち解けるまでに時間がかかってしまう。情報も集めづらいし、「きっかけ」も作りづらい。

次に、撮影対象になる地域で、人脈や人望のある人を見つけ、撮影に協力してもらうことは多くの無駄を省くだろう。

だが、撮影中の様子を顔見知りの人が側で見ていると緊張し、「演じる」ことが出来ず、心の内を引き出せない可能性もあるので、カメラを回すときは退席してもらうなどといった配慮も必要である。

7-2-4 撮影対象者とのコミュニケーションについて

コミュニケーションをとり、親密になると、撮影に協力してもらいやすくなるばかりか地域行事のスケジュールを教えてもらえるようになったりする。「つなぎ」の役割を果たしてくれる人が多くなり、「きっかけ」も広がりやすい。

長岡氏も、撮影に関して島町の住民と多くコミュニケーションをとっていた。そこから生まれた信頼関係が、「誇り」や「感動」といった感情を引き出したり、「演出（シカケ）」の成功につながっていると思われる。

7-2-5 撮影・シナリオ作成・編集について

今回参与観察を行っているとき、長岡氏のインタビューや原氏のカメラワークを素人が真似ることは到底無理である。せっかくのすばらしい「演出（シカケ）」があったとしても、単調なアングルや浅いインタビューでは深い「感動」を引き出せないし、被写体も「演じる」ことなど出来ないであろう。住民との交流を深める内に身内の目になり、客観的に対象を撮れなくなり、作品（アート）として成立しない可能性がある。プロであれば、ドキュメンタリーの基本的な理論を理解した上での撮影が可能である。シナリオの提案やインタビューの手伝いなど手伝える部分は積極的に行ってよいが、最終的にはプロの判断に任せることが望ましい。

以上のことを踏まえ、焦らず地域との関係を築けば、ドキュメンタリー撮影後の活動もよりよく行えるはずである。

7-3 本研究の課題

時間の都合から、本研究では上映後の島町の動きと、島町以外の地域に住む人々が島町ドキュメンタリーを見たときの反応を調査・観察出来ていない。

今後の島町の変化を含め、観察していくことが必要である。

1) 鎌仲ひとみ,他:ドキュメンタリーの力,寺子屋新書,pp.200-201 (2005)

2) 加藤恭子,川浦康至:人はなぜブログを読むのか - 知人ブログと他人ブログの閲覧行動—,コミュニケーション科学,(26),pp.91-103(2007)

3) 藤田知丈,2007-1-23,私信

The study about influence that documentary filmmaking gives the community
- Intend for Shima-town in Omihachiman-city -

Kondo laboratory 0412034 Maiko Mizoe

1. Introduction

Today, it is said that agriculture declines. It means the agriculture areas weaken, too. As for it, in Shima-cho, it is such local 1.

The group called “Hyotannkara KO-MA” made documentary in Shima-cho. Content of the documentary is a thing about the torch called “Honngara-Taimatsu” that is a structure such as the chimney. Honngara-Taimatsu is a torch, but it is size more than 10m. However, it is not size to be rare.

It is very interesting how to make the torches and how to put fire.

They record how to make the torches on many films and it is one of the purposes for them to convey it in history.

However, they have more important purpose. It is that an area is activated to see the documentary film.



Figure1 Honngara-Taimatsu

In this study, I participated in the filming of the movie and observed it. I studied it based on that folkloric investigation and anthropological analysis. I clarify the filming process of the documentary, and I consider how photography contents are reflected by a scenario. Significance will be to contribute to movie making about the community in future.

2. Method

Participation and observation, Hearing investigation

Analyzing the scenario and using KJ method

3. The suggestion from findings

From findings, I suggested following seven items.

Making a work as the art.

The opinion of the producer side has clear.

Don't force the opinion of the producer side on.

Finding the person becoming "the Joiner" .

Regard communication as the person of photography object as much as possible.

Filming / Scenario making / The editing should be done by a professional hand.

目 次

第1章	序論	1
1-1	本研究の背景	1
1-1-1	本研究の位置付け	1
1-2	研究対象について	3
1-2-1	島町とホンガラ松明について	3
(1)	島町の概要	3
(2)	島町の歴史について	4
(3)	ホンガラ松明について	6
(4)	ホンガラ松明の製作手順	8
1-2-2	ひょうたんから KO-MA について	12
1-3	ドキュメンタリー撮影における理論	12
1-3-1	ドキュメンタリーとは	14
1-3-2	ドキュメンタリー映画の変遷	12
1-4	地域文化資産の映像化へのまなざし	15
1-5	島町におけるドキュメンタリー映画撮影について	13
1-6	本研究の目的と意義	16
1-6-1	本研究の目的	16
1-6-2	本研究の意義	16
1-7	本研究の構成	17
第2章	研究対象について	19
2-1	調査対象の選定	19
2-2	調査方法	19
2-3	分析方法	21
第3章	参与観察を行った期間	23
3-1	参与観察の概要	23
3-1-1	参与観察を行った期間	23
3-1-2	参与観察内容	25
(1)	松明祭までの撮影	25
(2)	松明祭（宵宮）当日の撮影	26
(3)	松明祭後の撮影	28
3-2	ヒアリング調査の概要	28
3-2-1	長岡氏へのヒアリング	28
3-2-2	中川氏へのヒアリング	29
3-2-3	藤田氏へのヒアリング	29
3-3	シナリオメモの概要	30
3-3-1	ドキュメンタリーにおけるシナリオの役割	30

3-3-2 島町ドキュメンタリーにおけるシナリオメモ	30
3-3-3 シナリオメモの要約と変化	30
第4章 KJ法の分類から見た調査内容の分析と考察	33
4-1 KJ法から見た島町ドキュメンタリー撮影過程	33
4-1-1 「恥ずかしさ」	33
(1) 撮影時	33
(2) ヒアリング	34
(3) シナリオメモ	34
(4) 「恥ずかしさ」のまとめ	34
4-1-2 「不安」	34
(1) 撮影時	34
(2) ヒアリング	35
(3) シナリオメモ	35
(4) 「不安」のまとめ	35
4-1-3 「疑問」	35
(1) 撮影時	35
(2) ヒアリング	35
(3) シナリオメモ	36
(4) 「疑問」のまとめ	36
4-1-4 「誇り」	37
(1) 撮影時	37
(2) ヒアリング	37
(3) シナリオメモ	37
(4) 「誇り」のまとめ	38
4-1-5 「感動」	38
(1) 撮影時	38
(2) ヒアリング	38
(3) シナリオメモ	38
(4) 「感動」のまとめ	39
4-1-6 「期待」	39
(1) 撮影時	39
(2) ヒアリング	39
(3) シナリオメモ	40
(4) 「期待」のまとめ	40
4-1-7 「諦め」	40
(1) 撮影時	40
(2) ヒアリング	41
(3) シナリオメモ	41
(4) 「諦め」のまとめ	41
4-1-8 「きっかけ」	41
(1) 撮影時	41
(2) ヒアリング	42
(3) シナリオメモ	42
(4) 「きっかけ」のまとめ	42
4-1-9 「演じる」	42
(1) 撮影時	42

(2) ヒアリング	43
(3) シナリオメモ	43
(4) 「演じる」のまとめ	43
4-1-10 「演出(シカケ)」	43
(1) 撮影時	43
(2) ヒアリング	44
(3) シナリオメモ	44
(4) 「演出(シカケ)」のまとめ	45
4-1-11 「つなぎ」	45
(1) 撮影時	45
(2) ヒアリング	45
(3) シナリオメモ	45
(4) 「つなぎ」のまとめ	46
4-2 キーワードの分類	46
4-3 「強い感情の欠落」について	48
第5章 まとめと結論	51
5-1 各章のまとめ	51
5-1-1 第一章のまとめ	51
5-1-2 第二章のまとめ	51
5-1-3 第三章のまとめ	52
5-1-4 第四章のまとめ	52
5-1-5 第五章のまとめ	52
5-2 島町におけるドキュメンタリー映画が果たした役割に関する考察・・・	54
5-3 地域を対象にしたドキュメンタリー映画撮影に対する提案 ...	55
5-3-1 アート(作品)として成立させるということについて ...	56
5-3-2 制作者側の意見について	56
5-3-3 「つなぎ」となる人物を見つけることについて	56
5-3-4 撮影対象者とのコミュニケーションについて	57
5-3-5 撮影・シナリオ作成・編集について	57
5-4 自由に動ける人材の確保について	58
5-5 今後の課題	58
5-6 今後ドキュメンタリーを観るにあたって	58

謝辞
Appendix

図 表 目 次

図 1-1 島町地図(1/2500 地形図)。緑の円の部分が島町。 赤点は大嶋・奥津島神社、紫点は若宮神社を表す。	1
図 1-2 権現山より島町を見下ろす。右手麓が島、中央麓が山口と呼ばれる。(出 所：2007 年 4 月 31 日権現山にて著者が撮影)	2
図 1-3 "島町内より山口、権現山を見る。(出所：2007 年 4 月 15 日島町内にて著者が撮 影)	2
図 1-4 島町と北津田町の境に鎮座する大嶋・奥津島神社。祭の本日はここで両町合同で 神事を執り行う。奥に見えているのは北津田町の松明。	3
図 1-5 ドンガラ松明を作る途中。シンに藁を巻きつけていく。(2007 年 4 月 15 日大嶋奥 津島神社隣にて著者撮影)	4
図 1-6 菜種殻を奇数段になるよう、下のほうからスカート状に巻いていく。(2007 年 4 月 15 日大嶋奥津島神社隣にて著者撮影)	4
図 1-7 北津田町のドンガラ松明。基本的な作り島町のものと同じだが、笠が大降りであ る。(出所：2007 年 4 月 15 日、大嶋奥津島神社にて筆者撮影)	4
図 1-8 島町若宮神社に立つ 5 本の松明。真ん中手前の一番大きなものがホンガラ松明。残 りはドンガラ松明。(出所：2007 年 4 月 21 日島町内にて筆者が撮影)	5
図 1-9 ホンガラ松明のシン(芯)を形成するための輪を作っている様子。50 個程度サイズを 変え、手分けして作る。(2007 年 2 月 28 日、藤田氏撮影)	6
図 1-10 竹を一本脚立にかけて横渡しにし、出来上がった 50 個程の竹の輪を大きさの順 に並べてゆく。(2007 年 2 月 28 日、藤田氏撮影)	6
図 1-11 輪を竹に「男結び」と呼ばれる結び方で括りつける。(2007 年 2 月 28 日、藤田氏 撮影)	7
図 1-12 輪の内側に 3 本、外側に 6 本の計 9 本の竹が括りつけられている。この煙突状 の内部を炎が駆け上がる仕組みとなっている。(2007 年 2 月 28 日、藤田氏撮影)	7
図 1-13 ホンガラ松明のシンが完成。島町内の若宮神社境内に軽トラックで持ち込む。(2 月 28 日、藤田氏撮影)	7
図 1-14 出来上がったシンは、幼稚園児がぐくめる程の太さがある。(2 月 28 日、藤田氏 撮影)	7
図 1-15 シンの周りに藁束を巻き、更にその上から菜種殻を巻いていく。(2007 年 4 月 9 日、藤田氏撮影)	8
図 1-16 "松明を一度立てて、裾の部分を菜種殻で飾りつけしている様子。 (2007 年 2 月 28 日、藤田氏撮影)	8
図 1-17 笠を編んで取り付ける様子。本番では、この笠の部分から炎が出ると成功である。 (2007 年 4 月 9 日、藤田氏撮影)	8
図 1-18 "ホンガラ松明を立てる作業。アホと呼ばれる竹竿と縄を使い、立ち上げる。	

(2007 年 4 月 9 日、藤田氏撮影	9
図 1-19 "聳え立つホンガラ松明(出所：2007 年 4 月 15 日、筆者が 島町若宮神社内にて撮影)	9
図 1-20 映像ジャンルのポジショニング	11
図 2-1 分析フロー図	19
図 3-1 松明用の竹を伐採する風景の撮影。(2007 年 1 月 29 日、著者撮影)	22
図 3-2 "白王町における葦切りの撮影風景。(2007 年 1 月 29 日、著者撮 影)	22
図 3-3 "ゲートボールの休憩中に取材を行う。(2007 年 4 月 4 日、著者撮 影)	23
図 3-4 "島町内の桜井さん宅にて。インタビューは天候の都合などにより屋内で行われる ことが多かった。(2007 年 4 月 15 日、著者撮影)	23
図 3-5 "若宮神社前で、撮影の打ち合わせを行う撮影班。(2007 年 4 月 21 日、著者撮影)	24
図 3-6 "ジツキを繰り返し、煙が上がるホンガラ松明。(2007 年 4 月 21 日、藤田氏撮 影)	24
図 3-7 "ホンガラ松明が燃え上がる瞬間。笠の部分から炎が上がる。(2007 年 4 月 21 日、 藤田氏撮影)	25
図 3-8 "本祭で張り切って神輿を担ぐ若者達。(2007 年 4 月 22 日、島町内で藤田氏撮 影)	25
図 3-9 "菜の花を、季節を表すカットに使うため撮影する長岡氏(2007 年 4 月 3 日、島町 内にて筆者撮影)	26
図 3-10 "昔のホンガラ松明の写真を見せてもらいながら、話を聴く長岡氏(2007 年 3 月 13 日、島町内にて筆者撮影)	27
図 3-11 シナリオメモ最終案の概要	28
図 3-12 島町ドキュメンタリーにおけるシナリオのあらまし	29
図 3-13 シナリオメモの変遷。撮影が進むにつれ、新しい要素が加わっていく	30
図 4-1 "カメラを前にしても、いつもと変らぬ様子で過ごす老人達(2007 年 4 月 4 日、島 町内にて筆者撮影)	31
図 4-2 シナリオメモ最終版における「不安」要素の表現シーン(黒字部分)	33
図 4-3 シナリオメモ最終版における「疑問」要素の表現シーン(黒字部分)	34
図 4-4 シナリオメモ最終版における「誇り」要素の表現シーン(黒字部分)	35
図 4-5 シナリオメモ最終版における「感動」要素の表現シーン(黒字部分)	37
図 4-6 シナリオメモ最終版における「期待」要素の表現シーン(黒字部分)	38
図 4-7 "松明祭に集う「かつての若者達」昔の法被を着ている人が多かった。(2007 年 4	

月 21 日、藤田氏撮影)	39
図 4-8 シナリオメモ最終版における「きっかけ」要素の表現シーン(黒字部 分).....	40
図 4-9 シナリオメモ最終版における「演出(シカケ)」のあったシーン(黒字部分)・・	42
図 4-10 シナリオ(作品)が成立するための要素	45
図 5-1 "「かつての若者達」の手で起き上がるホンガラ松明。(2007 年 4 月 9 日、島町若 宮神社において藤田氏撮影)	54
表 1-1 ひょうたんから KO-MA メンバー表	10
表 1-2 地域文化資産ポータルサイトに掲載されている滋賀の映像一覧.....	13
表 2-1 参与観察を行った日付(撮影日)と撮影場所、撮影内容一覧	17
表 2-2 ヒアリング対象者と実施日、実施場所一覧	18
表 2-3 長岡氏へのヒアリング項目	18
表 2-4 中川氏へのヒアリング項目	18
表 2-5 藤田氏へのヒアリング項目	19
表 3-1 参与観察を行った期間と場所、撮影内容一覧	21

第1章 序論

1-1 本研究の背景

コミュニティ内における世代間のつながりの希薄化が危惧されて久しい。「かつてのマチやムラでは、いまほどの世代の断絶はなかった。例えば、祭りというのは、信仰とか神事・芸能はともかく、むしろ異世代が一堂に会することに大きな意味があった」と、神崎宣武(1944-)¹⁾は述べている。農業従事者の減少や、宗教的観念の衰退により、農作業や祭礼のため集まる機会が減少していることが、世代間のつながりを薄くする原因の一つとして考えられる。

滋賀県近江八幡市島町も、同様の問題を抱える農業地域のひとつである。近江八幡市では、地域ごとに特色のある「松明祭」が4月から5月にかけて行われる。島町においても4月の第三土曜日の夜に松明祭が行われ、翌日の日曜日に本祭が執り行われる²⁾。しかし、神輿の担ぎ手の不足や、松明祭に若者が積極的に参加しないといった悩みがある。農業という産業の未来も悲観されている。

これらの問題を解決するため、2006年から滋賀県近江八幡市島町において「ひょうたんから KO-MA」という団体が「農をベースにしたまちづくり」をテーマとして活動している。

KO-MAの活動として、島学区にある「権座」と呼ばれる場所で「権座水郷コンサート」を2006年の夏に開催している。また、2006年6月から、島町独自の古式松明である「ホンガラ松明」再生の手順とそれにまつわる老人達や若者の思いを収録し、ドキュメンタリー映画作りを行っている。映画の完成・上映は2008年3月の予定である。

本研究では、従来文化人類学や民俗学が対象としてきたような事例である「ホンガラ松明再生」を、参与観察とKJ法を使って整理する。また、映像人類学に見られるようなテーマである島町ドキュメンタリーにおいて、「カメラ」という非日常的な道具を人と人との間に挟み、「人々の思い」を引き出していく映画撮影段階に注目する。

1-1-2 本研究の位置づけ

人々の生活文化をカメラに収めるという行為は、撮影機材が廉価になったことや小型化などにより数多く行われるようになった。だが、ロバート・フラハティによる映画『極北のナヌーク』(1922)は、民族誌映画の創出という点でもドキュメンタリー映画史としても、今なお注目される。フラハティは、スクリーンに上映したときに本物に見える記録映画というところにこだわった。民族誌映画の創出という視点から考えると、フラハティは画面上に文化を上手に構成したことになる³⁾。

撮影するという行為は、カメラという機械で現実を切り取る行為である。この機械の目は、撮影者も記憶にない事象や周辺の出来事の全てを記録してしまうことから、時には文章としたら何十ページに及ぶ多くの情報を提供する。その一方で、ファインダーで覗いて見えなかった場面は、全く価値を持たず忘れられてしまう⁴⁾。このように、民族誌映画と呼ばれるよ

うな映像に対して、人類学的な見地から考察する学問として映像人類学があり、本研究もこの分野に位置づけることが出来る。

次に、ドキュメンタリー撮影の手法という観点から考える。ある人々の生活習慣や祭礼などの撮影を行うためには、撮影対象に関する調査が必要である。撮影者は、予め撮影対象となる人々の生活や文化を調べた上でドキュメンタリー作品の内容を構成し、必要と思われるシーンやインタビューを映像として記録していく。この下調べの調査は、数ヶ月から数年の単位で行われることが多く、時には調査と撮影を数十年かけて行う場合もある。これは、被写体との信頼関係を築くという意味でも重要なことである⁵⁾。

実際に撮影対象と交流し、その様子を参与観察するという点に関しては、ドキュメンタリー撮影の手法から見ると当然のことである。更に、「ホンガラ松明」という島町独自の松明を、ドキュメンタリー撮影に参与観察し、調査することは民俗学的な調査法である。また、それを KJ 法にかけ整理することは、民俗学や文化人類学において、参与観察やフィールドワークにおいて得られた情報を整理するための方法として行われることである。本研究は、調査手法において従来の民俗学的な手法をとっている。

しかし、今回の島町ドキュメンタリーの大きな特徴は、ホンガラ松明製作の方法を記録するというだけではなく、今後島町において住民が島町の良さを再発見し、集落がより良く維持されていくための議論が行われることを期待して制作されている点である。撮影された映像は、島町の文化や生活を客観的に収めるのではなく、意図を持って被写体となる人々（島町住民）にフィードバックされることが前提なのである。

よって、カメラで切り取ることの出来なかった部分や、撮影されたが編集段階で省かれることになる場面を参与観察により明らかにしておくことで、上映後議論を交わすための一助になる。また、島町ドキュメンタリーのような、地域を対象とした映画が製作される場合の参考になることを意図している。

本研究の位置づけをまとめると、以下のようなになる。

島町ドキュメンタリーの対象となる「ホンガラ松明」「松明祭」は、民俗学の対象とされるようなものである

島町での撮影に参与観察し、ホンガラ松明や松明祭りに関する情報を集め、KJ 法を使い考察する方法は民俗学的である

文化人類学に映像人類学という分野があり、人々の文化や習慣を映像として記録し、それを考察するという点で本研究の位置づけに近い

しかし、本研究は映像、撮影者側の立場での視点を持ち「撮影された映像が被写体にフィードバックされることが前提となっている映画」という点に着目する

島町ドキュメンタリーから読み取れることとそうでないことを考察し、同様な目的で映画が撮影される場合の提案と、公開後の活動への進言を行うことで、映画作品がより有意義に活用されることに役立つ

以上の位置づけを基に、課題の解決を実現していく。

1-2 研究対象について

1-2-1 島町とホンガラ松明について

(1) 島町の概要

島町は、世帯数 89 戸、人口 256 人(男:117, 女:139, 2007 年 11 月現在)の、滋賀県近江八幡市の北部に位置する農業地域である。明治 22 年に近世以来の村落である円山・白王・奥島(現在の島町)・北津田・中ノ庄・長命寺・沖島を合併して滋賀県蒲生郡島村となった。この島村は昭和 26 年 4 月 1 日、八幡町に合併するまで存続した。

昭和 29 年には、近江八幡市が誕生し、旧島村の構成村落は島学区として旧島村の名と、地域としての伝統の一部を守り続けている。

島学区内の村落別戸数は、沖島を除き増加傾向にあるが、島学区全体として農家や漁業者の減少は著しい。

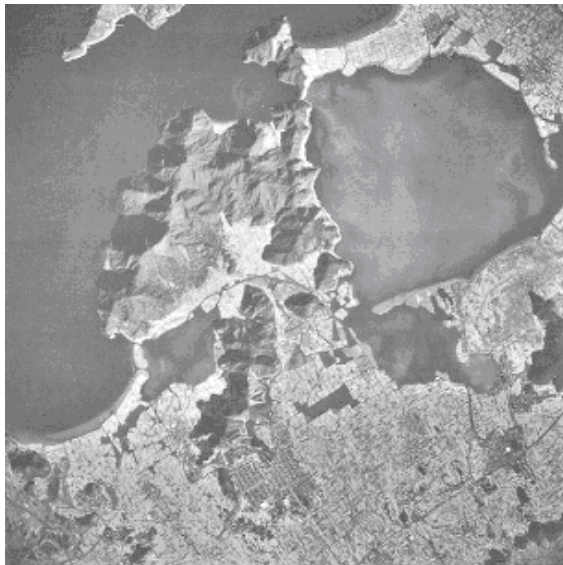


図 1-1 昭和 22 年における島学区俯瞰図 東北の内湖が埋め立て前の大中之湖、その西の島状地が長命寺山を含む山塊、その南の小湖が津田内湖で、北端にあるのは沖島である。

(出所:「水辺の記憶」- 近江八幡市・島学区の民俗誌 -)



図 1-2 島学区周辺地図(平成 9 年)
(出所:「水辺の記憶」- 近江八幡市・島学区の民俗誌 -)



図 1-3 権現山より島町を見下ろす．右手
麓が島，中央麓が山口と呼ばれる．
(出所：2007 年 4 月 3 日権現山にて著者が
撮影)



図 1-4 島町内より山口，権現山を見る．
(出所：2007 年 4 月 15 日島町内にて著者
が撮影)

隣接する北津田町との境界の位置に大嶋・奥津島神社が氏神として祀られており，祭祀儀礼に関してほぼ共同で執り行われている．大嶋・奥津島神社と併記されるのは，長命寺山・姨綺耶山・伊崎山が形成する一まとまりの島山を示していると考えられる．また，奥津島とは「奥つ島」「沖つ島」の意で，琵琶湖に浮かぶ小島である「沖島」のことである．この小島に対し，前途の島山を「大島」と称したことから現在の神社の名前となったことが伺える⁶⁾．

春の祭礼では，松明結いと宵宮祭(松明祭)は島町と北津田町で個別に行われる．島町は島町内に鎮座する若宮神社で，北津田町は大嶋・奥津島神社において松明祭を行う．二日目の神事と渡御行列・卯の刻参りは，大嶋・奥津島神社を中心に両集落で執り行っている．

島町において，松明結いは組ごとに分かれて行われる．組とは，奥・山口・中・南・宮と呼ばれる小字のことで，それぞれの組が一基ずつ松明を奉納する．かつては，山口が東西二つに分かれて一基ずつ奉納したり，同年齢の男達が有志で松明を作り，奉納していたこともあるそうだ．

現在では，長さが 7 メートル程度のやや枯れた竹と，菜種殻，葦，荒縄，藁束を使用して作るドンガラ松明と呼ばれる松明が組ごとに一基ずつ作られている．かつては青年団と呼ばれる団体により，「ホンガラ松明」と呼ばれる特殊な松明が 2,3 基奉納されていた⁷⁾．

(2) 島町の歴史について

天智天皇の時代，天智天皇が島村の奥島へ行幸された．そのとき長命で男子 8 人を持った夫婦に会われ，長寿の理由をお尋ねになった．すると，老夫婦は年ごとに家族中が食べる果実があるといって展覧に具した．

天皇はことのほかご感遊ばされ「宜(ムベ)なるかな」と仰せられた．この果実を「ムベ」

と称するに至ったという。以後、一時献上は途絶えたが、宮司が復活させ、今に至るも毎年十一月に皇室に献上されている⁸⁾。

大嶋奥津嶋神社を中心とするこの付近一帯は、平安期には奥嶋荘と呼称されていた地域であり、その荘域は王之浜、白部、円山辺りまでをも含む広大なものであったと推定されている。その後中世期に入り、白部や円山などが独自に惣村を形成してゆくようになり、奥嶋荘も惣村的結合社会へと次第に変化していったものと考えられている。永仁六年(1298)の「両村等社頭一味同心連署規文」には、奥嶋荘村人と隣接する北津田村人が宮座を結成したことを示す内容が記されており、その頃には島・北津田の両集落は、既に大嶋奥津嶋神社を要とした祭祀圏を構成していたものと考えられている⁹⁾。



図 1-5 島町と北津田町の境に鎮座する大嶋・奥津嶋神社。本祭は両町合同で神事を執り行う。奥に見えているのは北津田町の松明。
(出所：2007 年 4 月 15 日島町内にて著者が撮影)

昭和初期までは僻地寒村・貧弱町村であり、農山漁村といっても村の中核を成す山は殆ど国有林であり、水田面積は少なく、漁業もほんの一部であった¹⁰⁾。

しかし、島小学校の教育は、大正から昭和初期、国内はもとより大連、朝鮮、満州からも参観者が来るようなものであった。当時は蒲生郡島村と呼ばれ、昭和 5 年頃に始まる全国的な農村恐慌に島村も見舞われていた。そして、滋賀県から経済更生指定村に選定され、「全村教育」の名において、政治・産業と教育が一体となって活動を行った。その特色は郷土教育・労作教育にあり、郷土に根ざした生活体験、勤労の学習を重視し、低学年の自然観察学習の先導とも評された。村に即した教育のため、農村調査から郷土読本を編集し、郷土教育から労作教育の実践に至った。

全国からの参観者は、1 日に 100 人を越すこともあった。その様子は、横浜シネマが『村の学校』というタイトルで、一年間の学校行事の様子を納めたドキュメンタリー映画の制

作を行ったが、その後戦禍によって失われてしまったという¹¹⁾。

(3)ホンガラ松明について

ホンガラ松明とは、近江八幡市教育委員会編集の『近江八幡の火祭り行事 民俗文化財調査報告書』によれば、「昔は青年団が独自に『ホンガラ松明』と呼ばれる松明を2,3基作っていたのだという。ホンガラ松明とは、芯となる竹を組んで中を空洞にしたもので、底から火を入ると炎が上がって松明の頭に立てられた御幣にいち早く火がつくようになっていた。ホンガラ松明は雌の松明であると言われていたそうで、これは北津田側の神(大嶋神社)が男性神であるのに対し、島町側の神(奥津嶋神社)が女性の神様であったことに由来していたのだという。しかしホンガラ松明は、ここ数十年の間制作されていないのだそうである。」と記されている。しかし、筆者のヒアリングによれば、戦後しばらくして青年団の解散と共に無くなった松明ということなので、制作されなくなって、およそ50年の年月が経っている松明である¹²⁾。

現在奉納されているドンガラ松明(図1-8)は、まず5本の竹を根の方を下にして立て、次に竹と竹との間に出来た隙間に残る三本の竹を入れて括り、松明の柱とする。次にこの周りに藁を巻いて形を整えてゆき(図1-6)、さらに藁を松明の縁に巻きつけて化粧付けをする。そして松明の頭頂部に藁を花卉状に取り付ける。その際藁の穂先は下向きにする。これらが出来上がると、菜種殻を下の方から順番にスカート状に、奇数段となるように取り付けていく(図1-7)。最後に松明の三方に化粧竹を荒縄で結わえ、先端と笠の一方とに菜種殻の束を簞状にした飾りを取り付けて完成となる¹³⁾。



図 1-6 ドンガラ松明を作る途中。シンに藁を巻きつけていく。(2007 年 4 月 15 日大嶋奥津島神社隣にて著者撮影)



図1-7 菜種殻を奇数段になるよう、下のほうからスカート状に巻いていく。(2007 年 4 月 15 日大嶋奥津島神社隣にて著者撮影)



図 1-8 北津田町のドンガラ松明．基本的な作りは島町のものと同じだが笠が大振りである．
(出所：2007 年 4 月 15 日，大嶋奥津島神社にて筆者撮影)

ドンガラ松明とホンガラ松明の外見上の違いはほとんど見当たらない．多少ホンガラ松明の方が太いという点ぐらいである．しかし，製法の上で大きな違いがある．

ドンガラ松明はシンとして枯れた竹を 8 本束ねて使うのに対し，ホンガラ松明は竹を煙突状に編み，シンを空洞にしているという点である．近江八幡市全域において，様々な松明の形式が見られるが，中が空洞になっているのは島町のホンガラ松明のみである¹⁴⁾．



図 1-9 島町若宮神社に立つ 5 本の松明．真ん中手前の一番大きなものがホンガラ松明．残りはドンガラ松明．
(出所：2007 年 4 月 21 日島町内にて筆者が撮影)

ホンガラ松明の材料は、夏場は農業に従事し、雪に覆われる冬場に松明を作るという古来の島町のライフスタイルに合わせたものであった。シンとして使う竹は、竹林から伐採してきたものを稲のハサカケに用い、その後数年使用し乾燥したものを利用した。菜種は田畑の周囲につくり、菜種油として利益も出していた。その残りの菜種殻を松明の周囲に飾り付ける。藁は、ハサカケをしておいたものを使っていた。冬、雪が降り耕作が出来ないときに輪を作っておく。それを持ち寄り、シンを形成する¹⁵⁾。

完成した松明は、直ぐに若宮神社の境内に運び込まれるのではなく、松明祭まで各組の誰かの田に立てておいた。「蓮華畑の中に松明が立っている様子は美しかった。」とホンガラ松明再生発案者である福井氏と松村氏は語っていた¹⁶⁾。

(4)ホンガラ松明の製作手順

以下に、2006 年から 2007 年にかけて、ホンガラ松明再生プロジェクトにより再現されたホンガラ松明製作の手順を紹介する¹⁷⁾。

竹を縦に割り、細くする。割った竹を重ねて輪を作り、更に細く割った竹で結んで固定する。輪は、個別に少しずつ大きさを変えて作る。あまりに大きな輪にすると、松明の仕上がりが太いものになり、「格好悪い」そうである。ホンガラ松明は煙突状の松明になるため、胴が太くなりすぎないように注意する必要がある。

シンを構成するための竹を一本横に置き、その竹に通しながら 50 個程度の輪を直径が一番大きいものから一番小さいものまで順に並べていく。長い松明を作る場合は竹をつなぎ、輪を増やす。芯竹には、藁縄を使い「男結び」と呼ばれる方法で括りつけていく。この結び方は俵を編むときなどに必ず用いられていたもので、ほどけにくく、結び目が美しいと言われている。しかし現在では藁縄を使う機会がなくなっており、男結びが出来ない男衆が多い。過去は藁縄も島町で作っていたが、再現時(2007 年)にはホームセンターから調達されたものを使用している。



図 1-10 ホンガラ松明のシン(芯)を形成するための輪を作っている様子。50 個程度サイズを変え、手分けして作る。
(2007 年 2 月 28 日、藤田氏撮影)



図 1-11 竹を一本脚立にかけて横渡しにし、出来上がった 50 個程の竹の輪を大きさの順に並べてゆく。
(2007 年 2 月 28 日、藤田氏撮影)

竹で出来た輪の内側に 3 本，外側に 6 本の芯竹を括り，ホンガラ松明の「シン(芯)」が完成する。松明祭では，この煙突状のシンの中を炎が駆け上がる仕組みになっている。この状態でしばらく神社の境内に置いておく。昔は各グループが自分たちの田に置いておいた。そこで，子どもたちはシンをくぐり抜けるという遊びをしたそうだ。



図 1-12 輪を竹に「男結び」と呼ばれる結び方で括りつける。
(2007 年 2 月 28 日，藤田氏撮影)



図 1-13 輪の内側に 3 本，外側に 6 本の計 9 本の竹が括りつけられている。この煙突状の内部を炎が駆け上がる仕組みとなっている。
(2007 年 2 月 28 日，藤田氏撮影)



図 1-14 ホンガラ松明のシンが完成。島町内の若宮神社境内に軽トラックで持ち込む。
(2007 年 2 月 28 日，藤田氏撮影)



図 1-15 出来上がったシンは，幼稚園児がくぐれる程の太さがある。
(2007 年 2 月 28 日，藤田氏撮影)

竹で編んだシンの周りに藁束を巻いていく。藁は，丈が長く細くしなやかで加工しやすい「もち米」の藁が良い。その上から菜種殻を巻き，「化粧」をする。藁束の上に菜種殻を巻く理由については，長老達の見解は「白くて綺麗だからではないか」ということである。

松明を立て、裾の部分を菜種殻で美しい段になるよう飾りつける。このとき、「段の数は奇数にする」ということが決められている



図 1-16 シンの周りに藁束を巻き、更にその上から菜種殻を巻いていく。
(2007 年 4 月 9 日，藤田氏撮影)



図 1-17 松明を一度立てて、裾の部分を菜種殻で飾りつけしている様子。
(2007 年 2 月 28 日，藤田氏撮影)

松明の頭の部分に作られる「笠」は、地場産の葦で編まれる。笠は、日輪のシンボルであるとか、蠟燭の炎を模したものだという諸説があるが、いずれも真偽の程は定かではない。松明の胴の長さに対して笠が大き過ぎても小さ過ぎてもいけないそうで、製作者たちのセンスに拠って決まる。

松明を立て、裾の部分を飾り付けして完成。完成したホンガラ松明は、以前はそれぞれの田に立てておき、祭りの当日に神社の境内に運び込まれていた。このとき、笠が大き過ぎて鳥居をくぐれないといったアクシデントも起こったようである。蓮華畑に松明が立つ様子は美しかったという。松明の重量は 2～3t にも達する(地元老人達談)。松明を立てる際に使用する竹の竿のことを「アホ」と呼ぶ。由来は不明である。松明は倒れないよう、水に浸けておいた藤蔓で周囲の木に固定して完成である。



図 1-18 笠を編んで取り付ける様子．本番では，この笠の部分から炎が出ると成功である．

(2007 年 4 月 9 日，藤田氏撮影)



図 1-19 ホンガラ松明を立てる作業．アホと呼ばれる竹竿と縄を使い，立ち上げる．

(2007 年 4 月 9 日，藤田氏撮影)



図 1-20 聳え立つホンガラ松明

(出所：2007 年 4 月 15 日，筆者が島町若宮神社内にて撮影)

1-2-2 ひょうたんから KO-MA について

滋賀県域の NPO 活動を支援する淡海ネットワークセンターが主催する「おうみ未来塾」には、地域の課題を解決するための多彩な人材が集まる「地域プロデューサー養成所」がある。そのうちの 7 人(表 1-1)が集まって結成されたのが「ひょうたんから KO-MA」である(以下 KO-MA と表記)。主に滋賀県近江八幡市を舞台に「農をベースとした持続可能な地域再生のための人が集まる場を作ること」を研究テーマに活動している。また、目標としては「『農』のみにこだわらず、多角的な視点を取り入れるものとし、まずは、人の集まる場作りとして様々なコミュニティを組み合わせ、地域の再生を図る。持続可能を担保する仕組みとして、お金が動くシステム構築も視野に入れる」としている¹⁸⁾。

KO-MA は、近江八幡市島学区において、西の湖の水郷文化を象徴する、湖上の飛び地である権座を舞台に、地域の人々が主体的に関わる文化芸術活動やバザール・ワークショップなどを開催し、交流・振興・発信の場として活用する「座と市(ひと・もの・かねが行き交う場所)」という活動展開を行っている。

2006 年 11 月 3 日には、島学区にある「権座」と呼ばれる場所を利用し、「権座水郷コンサート」が実施された。「『権座』を拠点とした文化芸術活動の拠点づくり」として権座に注目した KO-MA と、重要文化的景観の PR をしたい近江八幡市の文化振興課との協働による「権座水郷コンサート」構想が、教育委員会、地元自治会などの後援・協力によって実現したものである。

2006 年 6 月からは、島町における「ホンガラ松明復活をテーマとしたドキュメンタリー映像づくり」を開始した。映像の完成・上映は 2008 年 3 月を予定している¹⁹⁾。

表 1-1 ひょうたんから KO-MA メンバー表

N.T氏	60代	男性	会社役員、島町在住
F氏	30代	男性	マルチメディアセンター長
N.K氏	20代	男性	ダンサー、舞台作家
O氏	40代	女性	司会業
M氏	60代	男性	県青少年室嘱託
H氏	50代	男性	野洲市市民活動促進課
T氏	60代	女性	栗東市コミュニティセンター勤務

1-3 ドキュメンタリー撮影における理論

1-3-1 ドキュメンタリーとは

ドキュメンタリーという名称は日本においては新しく、「記録映画」と呼ばれる時代が長く続いていた。「ノンフィクション」と呼ばれる場合もある²⁰⁾。

フリーの映像作家であり、東京工科大学メディア学部助教授である鎌仲ひとみは、ドキュメンタリーの定義として「現実を創造的に再構成する映画手法」と述べている。そして、フィクションとの違いを「ドキュメンタリーにも演出は存在し、前提として作品を通じて伝えたいものがある限りそこに意図は存在する。カメラが捉えられればもうそこには自然な現実

が存在しないのだから、ドキュメンタリーもフィクションを内包しているのは必然だ。加えて制作者が現実介入して、現実を変える場合も時にはありうる。」(下線は引用者)としている。

実際に、世界で初めてのドキュメンタリーと言われているロバート・フラハティの「ナヌーク 極北の怪異」においては、イヌイットの一家が朝起きて身支度をするシーンがあるが、このシーンは氷から作った家の中では暗すぎてカメラに映らなかった。そのため、その家を半分だけ建てて光を入れて撮影を行ったのである²¹⁾。

日本で長く使われてきた「記録映画」は、自分を殺して記録に徹すること、より現実に近いということが評価されるものである。現実そのものの解釈は必要なく、ニュートラルに撮る側面が強調され、作家の意志が介在しない。ニュース速報の映像やルポルタージュ(教育映画や文化映画も含む)においても、撮影者(もしくは編集者)の価値観と主張は、責任をもって表明されない²²⁾。

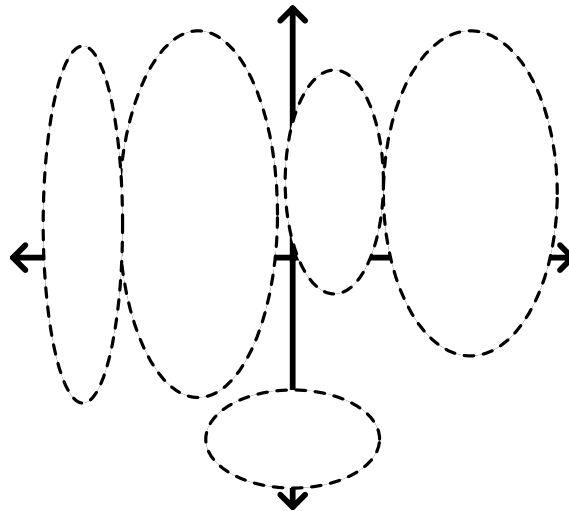


図 1-21 映像ジャンルのポジショニング (筆者作成)

しかし、ドキュメンタリー撮影において、意見や主張のごまかしはできない。自らの主張を明確にし、それを表現しうる対象を選定し(この作業は逆になる場合がある)、真っ向から問題に取り組まずに「ドキュメンタリー」を作ることは出来ないからである。

また、最近では機材が小型化したことと、パソコンによる編集が容易になったことなどから、社会的テーマと少し距離を置いた演出の「私(ワタクシ)ドキュメンタリー」がジャンルを確立しようとしている²³⁾。

これに対し、土屋豊(1966-)は「それ(私ドキュメンタリーの台頭)は、良いことでも悪いことでもなく、当然の結果である」としながらも、「アイデンティティーやリアリティーが混乱した世界と真正面から対峙した<私>のドキュメンタリーを、出来れば観たい」と述べて

いる。また、「やはりドキュメンタリーというのは社会的に少数派の人や立場が弱い人、向き合うことを避けられているものに挑むべきではないのか」という意見が出されている。手軽に日常を綴るということから、ウェブログと似ているので「ドキュメンタリーのブログ化」を懸念する声がある²⁴⁾。

佐藤真は著書「ドキュメンタリー映画の地平」において、「ハンディで廉価なフィルムと機材の普及は、『小型映画』とも呼ばれる個人映画の一つのジャンルを作り出した。だが、この小型映画はすぐに、もっぱら小金持ちの道楽と化してしまう。花鳥風月といった既定の意識を少しも疑うことなく、いかに自然を美しく撮るかのみを競い合うアマチュア映画は、『山川地蔵映画』と蔑称される趣味の世界を作り上げた。一方、家族の記念撮影や旅の記録といったホームムービーの大半も、撮られている家族にしか意味がない、閉じた世界にとどまっている。」と述べた後、この双方の映画に欠落しているのは「『わがこと』を見つめる他者の眼差しである」としている²⁵⁾。つまり、物事を一度自分の思いこみから切り離し、新しい視点で組み立て直すということがドキュメンタリーにおいて求められていることとさえいえる。

一般的にドキュメンタリーを撮影するためには、入念な準備調査と撮影対象との関係をいかに構築するかということが重要になる。

撮影対象との関係は、「穏やかで友好的」が最良というわけではない。原一男(1945-)のように、撮影対象を挑発するようにカメラを回すことで、原本人が「アクション・ドキュメンタリー」²⁶⁾と名付ける強烈な作品を仕上げているものもある。海南友子(1971-)は、カメラとバッテリーとテープを持ち、単身で中国に渡って「にがい涙の大地から」を仕上げた。日本兵が残した毒ガスや爆弾の被害者は、海南友子に対し怒りや悲しみ、苦しみの感情をぶつけている。海南は、逃げたくなる気持ちを抑え、カメラを通して撮影対象と対峙している²⁷⁾。また、羽仁進(1928-)は、学校で授業を受けている生徒達を自然なまま撮影した。カメラだけを教室の真ん中に置き、子ども達がカメラの存在に慣れた頃を見計らって撮影したのである。

28)

1-3-2 ドキュメンタリー映画の変遷

福田は、山形国際ドキュメンタリー映画祭の1997年パンフレットの座談会において、「日本のドキュメンタリー映画の歴史の中でも70年代から80年代は、テーマにおいてもスタッフワークにおいても集団から個人への大変換が起こった時代である」と指摘している。更に、「70年代に作られた『辺田部集落』(1973)と『不知火海』(土本典昭, 1975)で共にピークを迎える、小川プロダクション(小川紳介)と青林舎(土本典昭)のドキュメンタリー映画運動は80年代末に終焉した」と述べ、その理由として「村の共同性や運動体の集団性の崩壊、社会運動と両輪をなしていた自主上映運動の行き詰まり」を挙げている。そして、80年代以降のドキュメンタリーの課題は、「民衆への信頼ではなく、バラバラになった個を掘り下げていくこと」、「事実をかきわけていくと真実が現れるといった実体信仰でなく、事実そのものの

中に虚構が見えてくるはず」としている²⁹⁾。

1-4 地域文化資産の映像化へのまなざし

現在、総務省と財団法人地域創造において、高速大容量通信を通じて地域の伝統芸術等文化資産をデジタル映像化し、広く国内外に公開するために「地域文化資産デジタルコンテンツ発信事業」を構想、実施している。各地に多様に存在する伝説、神話、祭り、伝統芸能、習俗など地域伝統芸術等が、近年の生活様式の変化や個人の価値観の多様化、過疎化や高齢化の進展に伴い、継承が困難になっているという事実に対し、それらを保存することを目的としている。

地方公共団体が制作する映像記録に対する支援を実施し、新たにインターネットで発信することで、地域伝統芸術等の保存と発信を同時に行い、魅力や価値を広く多くの人々に知らせることで地域の活性化に関する気運が盛り上がることを期待されている。

2007年12月現在、北海道から沖縄まで264件の映像コンテンツが寄せられており、滋賀は5件のコンテンツが存在している。その内2つは近江八幡市のもので、『伝統技術の記録 手縫いの八幡靴』(54分間)、『～湖国に春を呼ぶ～ 火祭り行事 左義長』(44分間)の2件となっている。他の3件は、東近江市、安土町、愛荘町からの登録である。

また、映像の登録だけではなく、ポータルサイトに掲載されているコンテンツ(祭りなど)が実際に行われる日を掲載したり、閲覧ランキングを設けるなどの工夫がされている。登録されている映像は、地域・文化資産の分類・見たいシーン・一覧表示で探すことが出来る。2007年12月28日には、韓国語版のページが開設された。これにより、英語・中国語・韓国語での検索も可能となった。

更に、全国地域映像コンクールを開催するなど、総務省が進める地域文化デジタル化事業(デジタルミュージアム構想)を推進している³⁰⁾。

表 1-2 地域文化資産ポータルサイトに掲載されている滋賀の映像一覧³¹⁾

市町名	タイトル(作品の上映分数)
近江八幡市	伝統技術の記録 手縫いの八幡靴(54)
近江八幡市	～湖国に春を呼ぶ～ 火祭り行事 左義長(44)
東近江市	湖東物語(97)
安土町	継承される民衆の祭り 沙沙貴まつり ～滋賀県安土町沙沙貴神社～(30)
愛荘町	近江上布(158)

1-5 近江八幡市における文化行政について

近江八幡市では、平成18年1月26日に西の湖・長命寺川・八幡堀と周辺のヨシ地を含む「近江八幡の水郷」が重要文化的景観の全国第1号として国の選定を受けた。同年7月28日には追加申出を行っていた円山・白王の集落部分が追加選定を受けた。また、平成19年2

月には3次申出として里山（円山・白王山）とその周辺の水田について申出を行い、同年7月26日追加選定されている。現在、公有水面・ヨシ地・集落・農地・里山を含む約354.0haが「近江八幡の水郷」として選定されている³²⁾。

また、これらに対し近江八幡市風景作り条例や近江八幡市伝統的風景計画が作られている。市民に対してはパブリックコメントを募るなどしているが、計画の中には現実的でない部分があるという市民からの指摘がある。

また、伝統を受け継いでいくという点と、これからの町づくりを考えるため、近江八幡市史の編纂事業を平成13年度より進めている。『近江八幡の歴史』は、通史編とともに、新たな試みとして地域のさまざまな営みを取り上げた主題別（テーマ編）構成となっており、市民に親しめるような、わかりやすく読みやすい市史を目指して制作されている。市制施行50周年を迎えた平成16年10月には第1巻「街道と町なみ」が発刊され、2007年1月現在では第2巻「匠と技」第3巻「祈りと祭り」が発刊されている。テーマ編と通史編とを併せ第9巻まで発刊予定である³³⁾。

1-6 島町におけるドキュメンタリー映画撮影について

2007年9月14日、近江八幡市の喫茶店において、長岡氏にヒアリング調査を行った。長岡氏によると、島町におけるドキュメンタリー映画(以下島町ドキュメンタリーと表記)は、映画として特異な手法を使っておらず、テーマとしても「地域の問題を取り上げる」ということに関して、むしろドキュメンタリーとしては平凡な部類に入るとのことであった。

島町ドキュメンタリーと他のドキュメンタリーとが異なる点は、「社会に向けて意思や主張を発信するだけでなく、撮影対象に向けても発信する」という点である。通常のドキュメンタリーの主張は、撮影対象から外部にのみベクトルが向いている。しかし、島町ドキュメンタリーは、島町と同様な文化存続・継承の問題で悩んでいる外部地域に向けて発信することと同時に、「島町住民」に対して「島町にはホンガラ松明や、その他素晴らしい人間関係・風土・文化がある」というメッセージを伝えることが目的とされている。そして、島町住民が改めて自分達の住んでいる地域を見直し、これから島町をどうしていくべきかを考えるためのツールになることが期待されているのである。

1-7 本研究の目的と意義

1-7-1 本研究の目的

本研究では、近江八幡市島町におけるひょうたんから KO-MA によるドキュメンタリー映画の撮影過程を明らかにする。

さらに、撮影過程に発生する事象とドキュメンタリー映画のシナリオの変化を見ることが、どのような事象がそぎ落とされ、または強調されるかを明らかにする。

1-7-2 本研究の意義

島町におけるドキュメンタリー映画撮影の過程と課題を明らかにすることで、今後ドキュメンタリー映像を使用した地域社会へのアプローチの一つとして参考になるよう貢献することである。

1-8 本研究の構成

まず、第一章では序論として、本研究の背景と位置づけ、研究対象である島町の概要、ドキュメンタリー映画の基本的な理論、ひょうたんから KO-MA の説明、映像化へのまなざし、島町ドキュメンタリーについて述べた。第二章で、本研究における調査分析手法を示す。第四章では参与観察内容、ヒアリング内容、シナリオメモの概要を掲載する。第五章では、参与観察内容を基にした KJ 法から得られたキーワードに沿って、撮影時・ヒアリング・シナリオメモの内容を分類、考察する。第六章では、各章のまとめと結論を述べる。

第一章 脚注及び引用，参考文献

- 1) 神崎宣武,小松和彦編:現代の世相 5 祭りとイベント,小学館,pp.284-285(1997)
- 2) 近江八幡市教育委員会:近江八幡の火祭り行事 民俗文化財調査報告書,近江八幡市教育委員会,pp.3-4(1999)
- 3) 山下晋司編,大森康宏:文化人類学入門 古典と現代をつなぐ 20 のモデル,民族誌映画を活用する 方法としての映像,弘文堂,p.57(2005)
- 4) 山下晋司編,大森康宏:文化人類学入門 古典と現代をつなぐ 20 のモデル,民族誌映画を活用する 方法としての映像,弘文堂,p.62(2005)
- 5) 村山匡一郎編,佐藤真;ドキュメンタリー;リアルワールドへ踏み込む方法,フィルムアート社,pp.44-45(2006)
- 6) 近江八幡市史編纂室編:水辺の記憶—近江八幡市・島学区の民俗誌—,近江八幡市総務部市史編纂室,pp.22-24(2003)
- 7) 近江八幡市史編集委員会編:近江八幡の歴史第三巻 祈りと祭り,pp.136-137(2007)
- 8) 滋賀県百科事典
- 9) 近江八幡市教育委員会:近江八幡の火祭り行事 民俗文化財調査報告書,近江八幡市教育委員会,p.289(1999)
- 10) 中川良太郎編:滋賀県教育会五十年史,コピー
- 11) 中川良太郎編:滋賀県教育会五十年史,コピー
- 12) 2007 年 3 月 4 日,B 氏,他インタビュー
- 13) 近江八幡市教育委員会:近江八幡の火祭り行事 民俗文化財調査報告書,近江八幡市教育委員会,p.290(1999)
- 14) 2007 年 3 月 4 日長岡氏の撮影メモより,C 氏インタビュー
- 15) 2007 年 3 月 4 日長岡氏の撮影メモより,K 氏,L 氏,C 氏インタビュー
- 16) 2007 年 3 月 4 日長岡氏の撮影メモより,B 氏,C 氏インタビュー
- 17) ひょうたんから KO-MA 活動ブログ,
< <http://www.voluntary.jp/weblog/myblog/405?KEY=118190&STYPE=1&pageno=2>
> ,2007-12-15
- 18) 藤田知丈:Re:お返事ありがとうございます!滋賀県立大学の溝江です,2007-01-16,私信
- 19) 藤田知丈:2007-12-3,私信
- 20) 鎌仲ひとみ,他:ドキュメンタリーの力,p.200,寺子屋新書(2005)
- 21) 鎌仲ひとみ,他:ドキュメンタリーの力,pp.200-201,寺子屋新書(2005)
- 22) 横田安正,他:ドキュメンタリー;リアルワールドへ踏み込む方法,p.62,フィルムアート社(2006)
- 23) 鎌仲ひとみ,他:ドキュメンタリーの力,p.169,寺子屋新書(2005)
- 24) 横田安正,他:ドキュメンタリー;リアルワールドへ踏み込む方法,pp.22-23,フィルムアート社(2006)
- 25) 佐藤真:ドキュメンタリー映画の地平 上 世界を批判的に受けとめるために,凱風社,p.262(2001)
- 26) 石坂健治,他:ドキュメンタリー;リアルワールドへ踏み込む方法,pp.184-185,フィルムアート社(2006)
- 27) 鎌仲ひとみ,他:ドキュメンタリーの力,pp.160-168,寺子屋新書(2005)
- 28) 森達也:ドキュメンタリーは嘘をつく,p.62,草思社(2005)
- 29) 佐藤真:ドキュメンタリー映画の地平 上 世界を批判的に受けとめるために,凱風社,p.311(2001)
- 30) 地域文化資産ポータル< <http://bunkashisan.ne.jp/greeting/index.html> > ,2008-1-08
- 31) 地域文化資産ポータル 一覧表示結果
< <http://bunkashisan.ne.jp/search/FindSearch.php> > ,2008-1-08

32) 近江八幡市ホームページ,重要文化的景観 近江八幡の水郷 ;

< http://www.city.omihachiman.shiga.jp/contents_detail.php?co=cat&frmId=503&frmCd=3-4-5-0-0 >

33) 近江八幡ホームページ,市史編纂担当 ; < http://www.city.omihachiman.shiga.jp/contents_detail.php?co=cat&frmId=391&frmCd=3-4-2-0-0 >

第2章 調査分析手法について

2-1 調査対象の選定

「ひょうたんから KO - MA による近江八幡市島町におけるドキュメンタリー映画撮影」を対象とした。これは、撮影に対する島町住民と KO - MA メンバーの考えを把握するためであり、ドキュメンタリー映画を「撮る側」と「撮られる側」の両方の立場から撮影過程を考察していくためでもある。

2-2 調査方法

本研究では調査方法として、参与観察調査を行った。参与観察調査を用いたのは、対象の現状、持っている考えなど他の調査方法では引き出しにくい詳細な情報を、参与観察しながら得られると考えたためである。

表 2-1 参与観察を行った日付(撮影日)と撮影場所、撮影内容一覧

撮影日	撮影場所	撮影内容
2007 年 1 月 29 日	島町内の竹林	ホンガラ松明用の竹刈り
	白王町	葦切りの様子
2007 年 2 月 17 日	島町内 B さん宅	獅子舞を撮影
2007 年 3 月 11 日	島町内 C さん宅	C さん、B さんへのインタビュー
	島町内 E さん宅	E さんへのインタビュー
2007 年 3 月 12 日	島町内 A さん宅	A さん夫婦へのインタビュー
	島町内 F さん宅	F さんへのインタビュー
2007 年 3 月 13 日	島町内 G さん宅	G さんへのインタビュー
	島町内 H さん宅	H さん夫婦へのインタビュー
2007 年 4 月 3 日	権現山	権現山の祠へのお参り。
	島町内	稚児託宣祭
2007 年 4 月 4 日	島町内草の根広場	老人クラブのゲートボールの様子
	白王町	葦を買いに行く様子を撮影
	近江八幡市内	島町以外の地域の松明撮影
2007 年 4 月 12 日	島町内 F さん宅	F さんへのインタビュー
	島町内	季節が分かるもの(菜の花やテントウムシなど)を撮影
2007 年 4 月 15 日	島町内	ドンガラ松明組み立て、太鼓の飾り付け作業の撮影
	島町内 H さん宅	H さんへのインタビュー
	日牟礼八幡宮	八幡祭の様子
2007 年 4 月 17 日	島町内若宮神社	C さん、B さんへのインタビュー
2007 年 4 月 20 日	島町内	I さんを含め、女性へのインタビュー

	島町内若宮神社	ドンガラ, ホンガラ松明の姿
2007 年 4 月 21 日	島町内自治会館	ナオライ (男衆が集まる宴会)
	島町内	太鼓の渡りとそれを見ている人の様子
	島町内若宮神社	松明祭 (宵宮), ホンガラ松明奉火
2007 年 4 月 22 日	島町内大嶋・奥津嶋神社	神事, 御神輿
2007 年 5 月 8 日	島町内	C さんインタビュー
2007 年 5 月 15 日	島町内 B さん宅	B さんインタビュー
2007 年 5 月 30 日	島町内	若者へのインタビュー
2007 年 6 月 5 日	島町内	老人達へのインタビュー
2007 年 6 月 10 日	島町内 B さん宅	草餅, ちまき作り撮影
2007 年 6 月 13 日	島町内 G さん宅	G さんへのインタビュー

参与観察していく上での疑問点や, KO-MA の目的などを把握するため, KO-MA メンバーで島町ドキュメンタリー作成の中心人物である藤田知丈氏, カメラマン兼監督である長岡野亜氏, KO-MA メンバーであり島町住民である中川豊一氏にヒアリング調査を行った。

表 2-2 ヒアリング対象者と実施日, 実施場所一覧

ヒアリング対象	ヒアリング実施日	実施場所
藤田氏	2006/1/23, 2007/9/6, 12/3	マルチメディアセンター
長岡氏	2007/3 ~ 2007/6, 2007/9/14	近江八幡市内
中川氏	2007/9/6, 12/3	マルチメディアセンター

事前にインターネットから KO - MA に対する資料を入手し, ヒアリングの際の参考資料とした。ヒアリングでは, 質問項目表を元に筆者が質問し, 対象者が回答するという形式を取った。同時にヒアリング対象者から, 可能な限り活動に関わる資料を入手した。また, ヒアリング対象者の時間的制約などにより質問がもれた場合, 後日再訪問, 電話によるヒアリング, E-Mail による質問などの補足的な調査を実施した。

表 2-3 長岡氏へのヒアリング項目

1	島町ドキュメンタリーのシナリオのイメージはどのようなものですか
2	シナリオの案はどのようなものですか。欠かせないものはありますか。
3	では島町ドキュメンタリーで省くものは何ですか。
4	ドキュメンタリーの撮影方法として, 今回の島町での撮影は特殊なものですか。
5	観光ビデオとの違いはありますか。
6	島町ドキュメンタリー撮影をしたことで「良かった」と思った点はありますか。
7	個人的な製作と島町ドキュメンタリーは別のものですか。

表 2-4 中川氏へのヒアリング項目

1	なぜ KO-MA の会議でホンガラ松明のことを提案されたのですか .
2	最初からホンガラ松明に特別な思いがあったのですか .
3	いつごろから , どのように撮影が進められていったのですか .
4	撮影中に心がけていたことや気をつけていたことはありますか .
5	撮影中に不安に思ったことはありますか .
6	では , 最初からしっかりとしたシナリオや , 明確な作品のイメージは無いまま撮影がスタートしたということですか .
7	島町ドキュメンタリーの特徴 , 他と違うところはなんですか .

表 2-5 藤田氏へのヒアリング項目

1	島町でドキュメンタリー映画をとる目的は何ですか .
2	「後世に遺すこと」が目的ですか .
3	撮影中 , 人との交流で苦労したことはありますか ,
4	島町という地域に入っていく上で , 気をつけたことはありますか .
5	ドキュメンタリーを撮る上で重要だと思うことはありますか
6	地域ディレクター , 一般市民が撮影した映像との違いはあると思いますか .

2-3 分析方法

参与観察で得られた様々な情報を随時記録し , それらの情報をカードに書き出し , KJ 法を使用し , 参与観察における情報をまとめ , キーワードを抽出した .

そして , ヒアリング内容と島町ドキュメンタリーにおいて台本の役割を果たしているシナリオメモの内容を , KJ 法から導き出されたキーワードのどの部分に該当するかを分類・考察を行う .

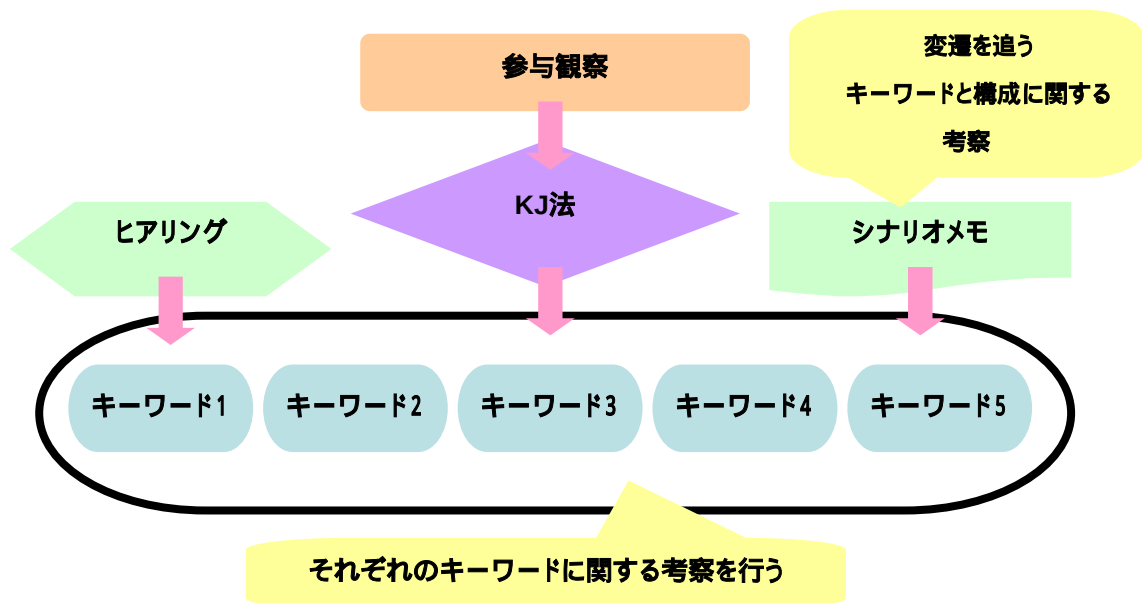


図 2-1 分析フロー図

また、シナリオメモに関しては、撮影序盤（2006 年夏頃）・中盤（2006 年 12 月頃）・終盤（2007 年 3 月松明祭直前）の三つの時期に分け、シナリオメモの変遷を追う。それにより、撮影段階に応じた KO-MA 側の主張やドキュメンタリー映画を構成する際の考え方の変化を知ることができる。そして、シナリオメモの内容に基づいて、KJ 法により導き出されたキーワードに関する考察を行う。

参与観察における情報とヒアリング内容の概要については、第 3 章で記述する。詳細情報は Appendix に掲載する。

第3章 参与観察・ヒアリング内容・シナリオメモの概要

3-1 参与観察の概要

3-1-1 参与観察を行った期間

島町におけるドキュメンタリー撮影が始まったのは、2006年6月10日からである。その後、筆者が撮影に参加したのは、2007年1月29日から6月までの計20回である。2006年の6月から、筆者が参加する2007年1月末までに、KO-MAメンバーによって31回の撮影が島町で行われた¹⁾。

表3-1 参与観察を行った期間と場所、撮影内容概要一覧

撮影日	撮影場所	撮影内容
2007年1月29日	島町内の竹林	ホンガラ松明用の竹刈り 松明の輪を作るための青竹を刈りに行った。
	白王町	葦切りの様子 葦切り風景を撮影するため、島町の隣の白王町にある葦屋に行った。
2007年2月17日	島町内 Mさん宅	獅子舞を撮影。おやまの道中など芸を多くしていた。Bさん宅が毎年もてなしている。
2007年3月11日	島町内 Cさん宅	Cさん、Bさんへのインタビュー。ホンガラ松明について詳細を伺う。
	島町内 Eさん宅	Eさんへのインタビュー。Eさんは3年程前、島町に引っ越してきた。
2007年3月12日	島町内 Aさん宅	Aさん夫婦へのインタビュー。ホンガラ松明再生の提案を受けたときの話などを撮影。
	島町内 Fさん宅	Fさんへのインタビュー。
2007年3月13日	島町内 Gさん宅	Gさんへのインタビュー。ホンガラ松明の写真を見せて貰う。
	島町内 Hさん宅	Hさん夫婦へのインタビュー。
2007年4月3日	権現山	権現山の祠へのお参り。機材を持って山を登る。頂上付近に岩の祠があった。
	島町内	稚児託宣祭。お稚児さんとなる子どものいる家まで取材に行く。
2007年4月4日	島町内草の根広場	老人クラブのゲートボールの様子 撮影に慣れておられる人が多かった。
	白王町	葦を買いに行く様子を撮影。
	近江八幡市内	島町以外の地域の松明撮影。
2007年4月12日	島町内 Fさん宅	Fさんへのインタビュー。
	島町内	季節が分かるもの(菜の花やテントウムシなど)を撮影。この他にも、季節を表すものを適宜撮影していた。
2007年4月15日	島町内	ドンガラ松明組み立て、太鼓の飾り付け作業の撮影。太鼓の飾り付けに苦労している様子や、松明組み立ての様子を撮影して回る。
	島町内 Hさん宅	Hさんへのインタビュー
	日牟礼八幡宮	八幡祭の様子
2007年4月17日	島町内若宮神社	Cさん、Bさんへのインタビュー。
2007年4月20日	島町内	Iさんを含め、女性へのインタビュー。

	島町内若宮神社	ドンガラ, ホンガラ松明の姿.
2007 年 4 月 21 日	島町内自治会館	ナオライ(男衆が集まる宴会) 原一男監督のマイク持ちを任される. 原監督がすぐに撮影対象となる島町の人と打ち解けておられたのが印象的だった.
	島町内	太鼓の渡りとそれを見ている人の様子.
	島町内若宮神社	松明祭(宵宮), ホンガラ松明奉火 本番. 8 台ものカメラを使い, 松明の様子とそれを見守る人々の表情を撮影した.
2007 年 4 月 22 日	島町内	卯の刻参り. 早朝からの撮影.
	島町内大嶋・奥津嶋神社	神事, 御神輿 神主に許可をもらい撮影を行った.
2007 年 5 月 8 日	島町内	C さんインタビュー. ホンガラ松明の感想と評価をきいた.
2007 年 5 月 15 日	島町内 B さん宅	B さんインタビュー. ホンガラ松明の感想と評価をきいた.
2007 年 5 月 30 日	島町内	若者へのインタビュー. ホンガラ松明の感想や, 島町に対する思いを話してもらった. 老人達に(撮った内容を)見られるという思いがあるからか, 少し遠慮しているように見えた.
2007 年 6 月 5 日	島町内	老人達へのインタビュー.
2007 年 6 月 8 日	×	天候不良により撮影中止. これ以外にも, 撮影対象の予定変更等により撮影が延期になったり急遽決まったりすることがあった.
2007 年 6 月 10 日	島町内 B さん宅	草餅, ちまき作り撮影.
2007 年 6 月 13 日	島町内 G さん宅	G さんへのインタビュー.

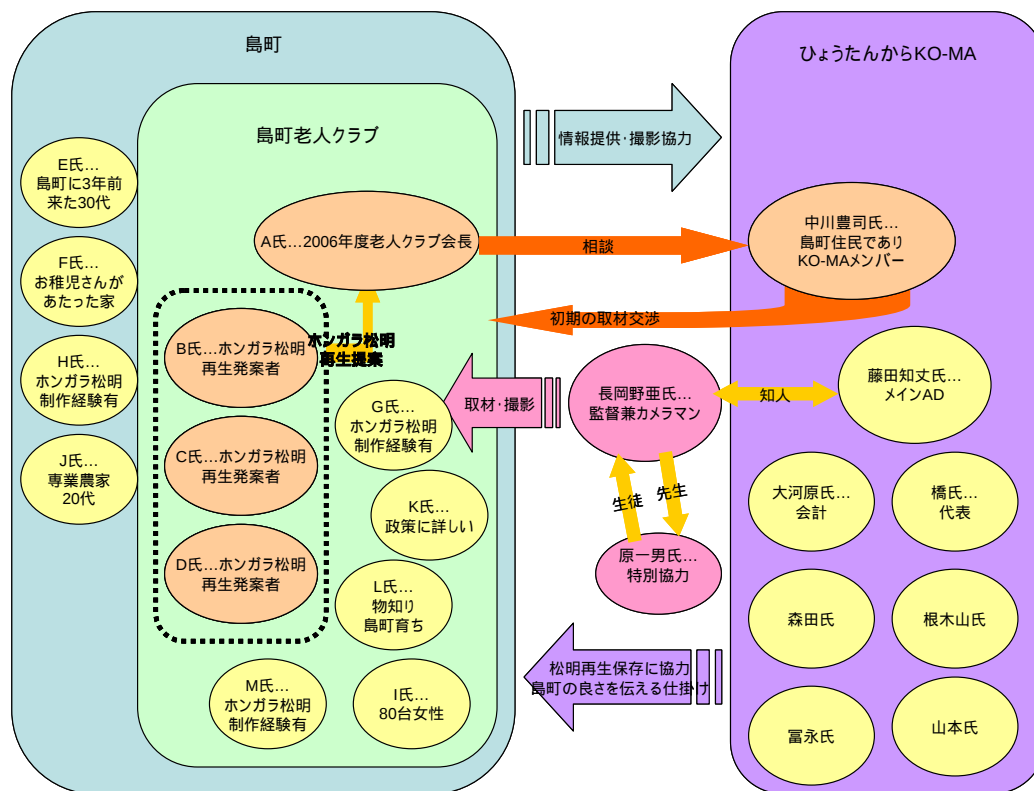


図 3-1 島町ドキュメンタリーにおける人物相関図

3-1-2 参与観察の概要

(1) 松明祭までの撮影

松明用の竹の伐採

竹を刈りに行くという行為は、筆者や撮影者である長岡氏からすると、非日常的で特殊な行為であった。しかし、老人たちは慣れた手つきで竹を選別し、切り倒していた。先人の知恵が活かされる場であった。長岡氏は様々なアングルから伐採の様子をカメラに収めた。



図 3-2 松明用の竹を伐採する風景の撮影。
(2007 年 1 月 29 日、著者撮影)

葦切りの撮影

2007 年 1 月 29 日，葦切りの撮影を行った．島町ではなく，湖岸道路をはさんで隣接する白王町の葦屋を訪ねた．三脚を用意し，葦切りの様子を撮影した．頻繁に取材や撮影に人が来るそうで，撮影慣れされていた．どのポイントから，こういう風に撮るといいよ，というアドバイスまでしていただいた．葦切りの風景は，全体の構成としてごく一部のカットであるが，1 時間程度，長岡氏は葦切りの風景を撮影していた．

ホンガラ松明の材料に関するものは，ホンガラ松明のアーカイブとして全てカメラに納められる．しかし，ホンガラ松明自体が生活様式の変化が一因で作られなくなったということ鑑みると，ホンガラ松明の材料撮影は「現代の生活になり失われていくもの，生活から離れてしまったもの」であることになる．



図 3-3 白王町における葦切りの撮影風景．

(2007 年 1 月 29 日，著者撮影)

ゲートボール風景の撮影

2007 年 4 月 4 日午前，ゲートボールをしておられる老人クラブのメンバーの撮影をした．次の老人クラブ会長に話をきいた．「(撮影は)少し恥ずかしい．松明自体は昔からやっていることである(だから特別な感じはしない)．若い人は(ホンガラ松明は)やらない．農業の生活に合わせた祭りだから，今の人の生活にあわないということもある．昔は，冬は農閑期で休みやったけど，むしろ会社の仕事は年末年始で忙しくなり，休めないから．」とのことであった．

H さんと G さんがゲートボール中に話をしてくださった．H さんは，「島は歴史が古く，いいところで，自分はその歴史を伝承している」と仰っていた．G さんは，この日寒かったので燃やしてあった，焚き火にくべた木を取り出し，水をかけていた．これを磨くと綺麗な木目が出て，花器などを作る素材になるそうだ．「こんなつまらんことして楽しんでるよ」と笑っておられた．

ゲートボールの休憩小屋の行事予定を書き込み黒板に「ホンガラ松明」の文字があった。「誰が書いたんや」と老人達が笑っていた。ゲートボール場として使用される広場は、子どもたちの遊び場にもなるが、ホンガラ松明に関して子ども達はよく知らされていないはずである。老人の誰かが書いたのだ。まるで、文化祭や体育祭を心待ちにする学生のような書き方であったので、思わず見た人は笑顔になったのだろう。照れくさいような、楽しみにしているような笑顔を見せる島町の人達を見て、撮影者としてだけでなく松明が成功して欲しいという思いが強くなった。事前に連絡を取らずに行われた撮影であったが、老人達は自然な様子でお茶を出し、話をしてくれた。



図 3-4 ゲートボールの休憩中に取材を行う。

(2007 年 4 月 4 日、著者撮影)



図 3-5 島町内の E さん宅にて。インタビューは天候の都合などにより屋内で行われることが多かった。

(2007 年 4 月 15 日、著者撮影)

若者へのインタビュー撮影

ホンガラ松明再生の主演は、ホンガラ松明の製法を知る 70 代後半～80 代の 10 人程度の長老達である。しかし、「老人達と若者のタテの交流」の様子を描きたいという意図が KO-MA にあるので、30 代、40 代のこれから地域を背負っていく世代の人にもインタビューを行った。

若い世代の人も、それぞれ島町に対する思いを持っていた。E さんは 3 年程前、島町に越してきた(2007 年時点)。「祭りがあるから、いろんな人と交流できる」「いつか子ども松明を作りたい」とのことであった。

自治会と KO-MA が呼びかけて、若者達と自治会が会議を行ったときも、20 代～30 代の人々がもっと祭りに関わるべきだということで、「祭礼実行委員会」を結成し、神輿を担ぐ人手を若者達自身で集めるようになるという、KO-MA にとっては「うれしい事件」が起こった。

(2)松明祭(宵宮)当日の撮影

松明祭に向けての打ち合わせ

島町自治会館に KO-MA スタッフと撮影スタッフ集合。カメラクルー 8 人、カメラ 8 台、AD6 人(内 2 人は夕方から参加)の計 14 人である。天気が心配されたが、うす曇でなんとか雨は降らずに済みそうであった。

島町内でロケハン(ロケーションハンティング)という「どこでどういうショットを狙うか、照明はどうするか」確認する作業をする。藤田氏と長岡氏がメインとなり、原氏がアドバイスをを行いながらカメラアングルや光源の確認が進められた。



図 3-6 若宮神社前で、撮影の打ち合わせを行う撮影班。
(2007 年 4 月 21 日、著者撮影)

松明祭本番に起こった事件

若宮神社内には各組から奉納された 5 本のドンガラ松明と、老人クラブより奉納されたホンガラ松明の 6 本の松明が立てられていた。その内、ホンガラ松明は三番目に奉火されることになった。しかし、ホンガラ松明に奉火する前に、他の松明の火の粉がホンガラ松明に降りかかったのである。「消防団水を持って来い！」「水をかけろ！」「あかん、はよ消せ！」「水はかけるな！」口々に叫ぶ長老たち。若い衆は、誰の指示に従っていいかわからずおろおろしている。観客からも、「はよ消して」「もうあかんわ」と小さな悲鳴のような声上がる。一人の青年が松明によじ登りだした。「やめとけ」「あむない、落ちろぞ」「何してんねん、水かけろ」「消せ」四方八方から叫び声が聞こえる。火の粉がついたのは地上から 4 メートル程度の位置である。青年はペットボトルを取り出し、火の粉がかかった部分に水をかけた。少し菜種殻を焦がしただけで、火は消えた。

この出来事は、ドキュメンタリー映画のシナリオとして重要な部分になると感じた。なぜなら、ホンガラ松明を作ったことがある長老から、「(ホンガラ)松明に燃え移った火を消すのに必死になって松明を上った。松明から落ちて、骨折したやつもいた。」という話を聞いていたのだ。今回の事件も、骨折こそなかったものの、「今まで長老たちが時間をかけて作った松明を、台無しにはいけない」ととっさに体が動いたと後々火を消した青年は語っていた。

8 台のカメラマンは、人々の表情や煙の上がる松明、声を上げる老人とうろたえる若者の様子を撮るため、混乱と熱気の中でカメラを回していた。

ホンガラ松明奉火

ホンガラ松明への奉火は、松明を斜めに傾け、筒状の内部に火を入れる。そして、「ジツキ」と呼ばれる松明を持ち上げ、落とす動作をして筒状の内部に空気を送り込み、炎を上部に持ち上げる。煙は出るが、なかなか炎があがらず、諦めかける長老もいた。

しかし、三回目の炎を入れてジツキを 3 度、ついに笠の部分から炎が上がった。見に来ていた多くの観客も歓声をあげて喜んだ。人々の歓声が上がった。若者たちは万歳と叫んだ。長老達は、笑顔で握手を交わしていた。「こんな松明やったら、来年もしてみたいなぁ」という声が若者から聞かれた。



図 3-7 ジツキを繰り返し ,煙
が上がるホンガラ松明 .
(2007 年 4 月 21 日 , 藤田氏撮
影)



図 3-8 ホンガラ松明が燃え
上がる瞬間 . 笠の部分から炎
が上がる .
(2007 年 4 月 21 日 , 藤田氏撮
影)

(3) 松明祭後の撮影

神輿担ぎ

本祭では , 10 代から 20 代の若者が神輿を担いだ . カメラがあることを意識してか , シュウシと呼ばれる神輿を上下させる動きを大げさに行っていた . 若者が楽しそうに神輿を担ぐ姿は , これからの島町がより元気になっていく姿を想像させるシーンになると考えられる .



図 3-9 本祭で張り切って神輿を担ぐ若
者達 .
(2007 年 4 月 22 日 , 島町内で藤田氏撮影)

長老へのインタビュー撮影

ホンガラ松明復活発案者の一人である福井栄吉さんは「肩の荷が下りた」と安堵の表情を見せていた。KO-MA メンバーである中川氏の奥さんは「ホンガラが素晴らしかった。とてもよかった。」と言っていた。しかし、「続けるとなると、役員の人が大変かもしれない」ともおっしゃっていた

3-2 ヒアリング調査の概要

3-2-1 長岡氏へのヒアリング

長岡氏は監督兼カメラマンとして、島町ドキュメンタリーを仕切っておられた。撮影の合間や車で送迎中に、ドキュメンタリーの理論や島町ドキュメンタリーへの考えを教えていただいた。その後、改めてヒアリングを行った。

「島町ドキュメンタリーのシナリオにおいて欠かせないものは何か」という問いに対し、長老達の思いをメインに置きたいという答えであった。「島町の（ドキュメンタリー）に限っていうと、無駄に暗いことは入れない。村が元気になるようなことを入れないといけないから、流れにあわへんってことやね。カメラで描ききれないことがあることは、見れば分かる。だから全部を入れる必要はない。どの立場からものを言うかっていうことは大切。『島町には何も（良いところが）無い』って言う人も、当然いるやろうけど、それよりは『島町をもっと良くしたい！』って思っている人を撮りたい」

「ドキュメンタリーの撮影方法として、今回の島町での撮影は特殊なものですか」という問いに対して「撮影の手法に関してもテーマにしても、ドキュメンタリーとしては基本中の基本の撮影方法。取材をして情報を集めて、インタビューしに行く、そして編集する、と特別なことは一切ないなあ」とのことであった。



図 3-10 昔のホンガラ松明の写真を見せてもらいながら、話を聴く長岡氏
(2007 年 3 月 13 日、島町内にて筆者撮影)

また、観光ビデオとの違いは何かという質問に対し、「観光ビデオと言えなくもない。島町の外部に、島町の良さを伝えるっていうことだけをとると観光ビデオにもなるかもしれない」「でも、観光ビデオは説明的なものが多いから。今回の（島町ドキュメンタリー）は、もっと「気持ち」寄りで、老人の思いに作業の工程をプラスしたもの。『日本人はこう暮らしてきた』ということをも、メインは

島町の人達に見てもらうこと．それと，それ（島町住民）以外の人にも気付いてもらいたいというのが一番の目的やから．本当は，権座のイベントを撮ろうかという意見も出たんやけど，権座はただのイベントの記録になるなあって．実はイベントの記録は，身内以外が見てもあんまり面白くない．よっぽどの問題が起きて，それを乗り越えとかならともかく，普通のイベントでは映画とまでは成りづらいよね．映画として成立させることが大事やから．きちっと落としどころがないと．観光ビデオとの違いはそこじゃないかな」ということであった．

長岡氏が作りたいと感じる制作とは分けて考えるようにしているそうである．製作者側（長岡氏）の意図を押し付けてしまうと，地元の人を受け入れづらいからということで，「アート」を持ち込む際には長岡氏のようにプロの考えを押し付けず，丁寧に地元の人の思いを集めるという作業が必要になるのだと感じた．



図 3-11 菜の花を，季節を表すカットに使うため撮影する長岡氏
(2007 年 4 月 3 日，島町内にて筆者撮影)

3-2-2 中川氏へのヒアリング

中川氏は，KO-MA メンバーでありながら島町住民でもあるので，両方の立場から撮影への助言・援助をしていた．特に，インタビュー撮影において，中川氏がカメラマンの側に居ると，気を遣って話しづらいこともあると考え，出来るだけマイク持ちなどの作業は避けておられた．

「島町ドキュメンタリーの特徴，他と違うところはなんですか」という質問に対し，「近江八幡市が作った左義長の映像なんかは，上（行政）が言って作らせたんやから，いわゆるトップダウンというか，言われたことをやるだけやから作業でしかない．でも，今回の撮影は偶然というか，例えば稲刈りを撮影するのに，『じゃあおにぎりでも作っていこう』『小学生も呼んでみよう』とかなってどんどん輪が広がって，作品になっていってるからボトムアップになるんちゃうかな．だから，もう一回ドキュメンタリー撮れてって言われても，全く中身が違うもんが撮れると思うわ」とのことであった．そして，撮影の輪が広がった理由としては，長岡氏が頻繁に撮影に訪れて住民との接点を持つようにしたということと，撮影当時（2006 年）老人クラブ会長の人望によるところが大きいとしている．

3-2-3 藤田氏へのヒアリング

藤田氏は、KO-MA の中でメイン AD として日程の調整などを行っていた。また、ホンガラ松明再生プロジェクトに関して KO-MA の中心的存在であった。

「ホンガラ松明を後世に遺すことが島町ドキュメンタリーの目的ですか」という筆者の問いに対して、「あくまで目的の一つ。KO-MA の目的は、この映像を見ることによって、島町の良さに気づいたりして、次の世代へ（ホンガラ）松明作りとかが受け継いでいってもらえたり、似たような問題を抱える地域の参考になったりきっかけになったりするの（KO-MA の）目的です」とのことであった。

また、「撮影中、人との交流で苦労や注意したことはありますか」という問いに対しては「自治会の人、1 年ごとに人が入れ替わるので、イベントを頼むには適さないということがあって、次の人（次年度の自治会の人）に仕事を増やして渡せないとか、1 年だけやから特に決定権がないことがある」とし、「何かイベントとかをしたいときは、老人会や消防団とかの、あまり入れ替わりがない団体を選ばないと、うまく行きづらいかもしれない」と述べていた。

「ドキュメンタリーを撮る上で重要だと思うことはありますか」とたずねたところ、「キーパーソンが一人でも欠けると厳しいと思う。今回は、中川さんとか老人クラブ会長の松村さんとかが、人望がある人やったから地域が動いたっていうのもあると思うから。もし誰かが欠けたら今と全然違う話になっていたと思う」「主人公が作るドキュメンタリーは、本人達が思いをしっかりと持っていることが大事になってくる。あくまで『アート』として成立させなければたくさんの人にも見てもらいたいと思うし、外にも内にも見ごたえがあるようにしないといけないから」とのこと。ドキュメンタリーについては長岡氏から基本的なドキュメンタリーの理論を勉強しながら撮影を行ってきたそうである。

3-3 シナリオメモの概要

3-3-1 ドキュメンタリーにおけるシナリオの役割

ドキュメンタリーは撮影者の主張が込められるため、「このような筋道で物事を伝えよう」というシナリオが存在する。通常のドキュメンタリーでは、長い時間（数年単位）をかけて調査を行ってから、主人公などを決め、シナリオを組み立てる。自主制作のドキュメンタリーでは、まず撮りたいテーマや対象があり、調査・撮影をしながらシナリオを練っていくことが多いようである。

これは、ある程度の結末ないし結論を想定して撮影していても、撮影者の常識が覆されたり、それ以上の「思い」に出会ったりすることが多いからである。

3-3-2 島町ドキュメンタリーにおけるシナリオメモ

島町ドキュメンタリーにおいてシナリオメモは、KO-MA メンバーと長岡氏によって話し合われた創作イメージから、藤田氏が原案を作成し、長岡氏と藤田氏が撮影を重ねながら修正し、最終的に長岡氏によってまとめられた。映画における台本の役割を果たし、島町ドキュメンタリーの筋道を示すものである。

また、シナリオメモに段階的に加わっていく内容は、「撮影をして具体的に分かってきたこと」以外に「KO-MA にとっては予想外だが、シナリオに加えたいこと」が現場で起こったと考えられる。

3-3-3 シナリオメモの要約と変化

島町における調査が始まった頃、大まかな筋道を確認するために藤田氏によってシナリオメモが作

られた．まだ撮影自体が殆ど成されていない状態での作成であるため，具体的な場面の記述が少ないことが特徴である．ホンガラ松明制作手順に関する記述は明記されている．

シナリオメモは，撮影段階に応じて変化していった．これは，調査・撮影を重ねるごとに新たな情報が加わっていったことと，「ドキュメンタリー映画」としての落としどころを模索していたことによる．長岡氏と藤田氏が撮影後，拠点としているマルチメディアセンターで話し合い，シナリオの構成を行っていた．

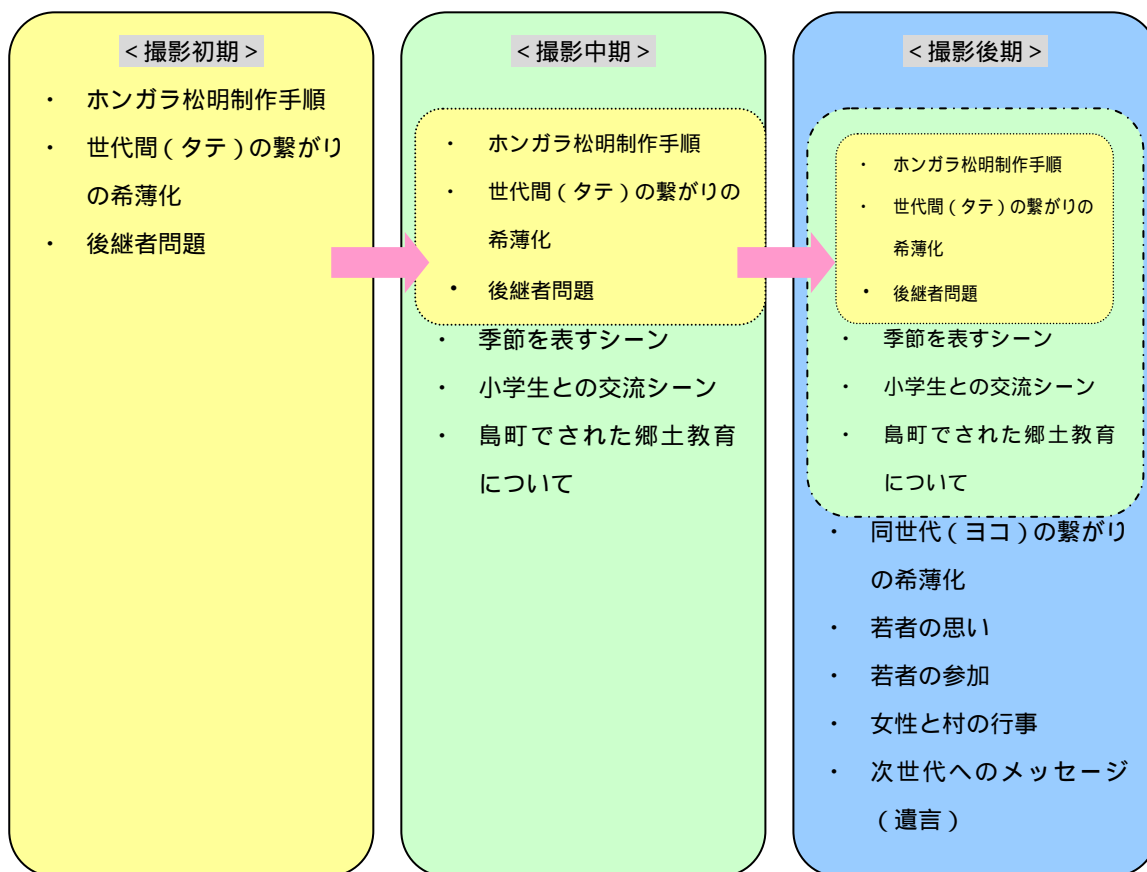


図 3-12 シナリオメモの変遷．撮影が進むにつれ，新しい要素が加わっていく⁴⁾．

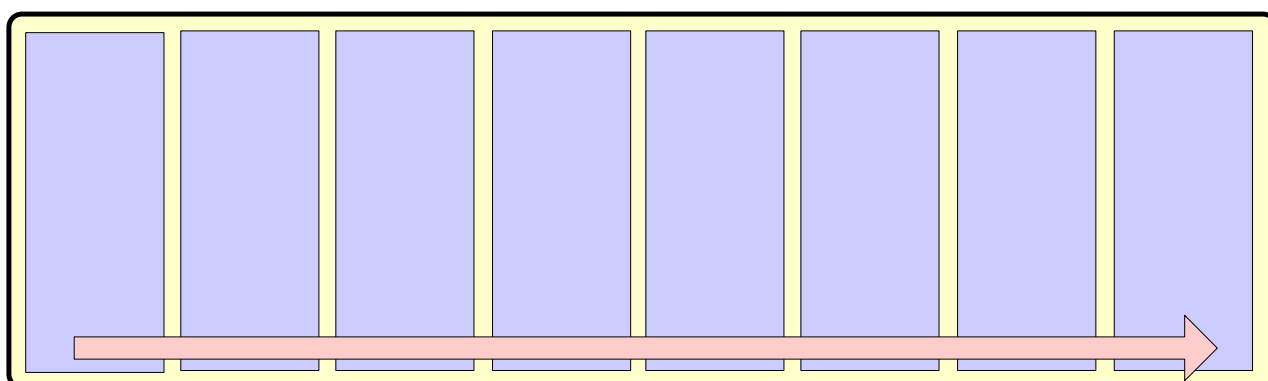


図 3-13 シナリオメモ最終案のリアリティ²⁾

2006 年 6 月から島町における撮影が始まり、同年 7 月までにKO-MAメンバーと長岡氏による会議が開かれ、島町映画の原案を出し合った。「よみがえれ！本殻松明」を仮題とし、「途絶えかけた松明の製法、それに関わる人の営み、地域のすばらしさを再発見、これは島町の宝物である。この取り組みを映像に残すことは、近い将来この島町が進んでいくための、新たな羅針盤としての役割を果たすものである」と述べている。制作の目的としては、途切れかけている古式松明（ホンガラ松明）の製法を次世代につなぐための記録として、文化伝承の大切さ、地域興しの面白さ、島町の魅力などを映像メディアを通じて地元内外に発信するとしている。更に、に関しては「単なる記録映画では発進力・訴求力がない。見る人に訴えかけ、感動させるだけの内容のある作品作りが必要」と補足されている。

更に、作品のテーマ・コンセプトが提案されている。これは、2006 年 7 月に話し合われて以来、変更はない。

対一般向け（島町以外の地域）に対しては、農村崩壊への警鐘と、農村再生への希望を提示すること、美しい農村風景を支えているもの、それを保つために必要なことへの気づき、登場する老人達の心の動き、葛藤、過去を振り返り、未来を見つめる様子（遺言）、戦前の農村の日常的な営みから、今学ぶべきこと、戦争と高度成長によって私たちが失いかけている「郷土」「信仰」「地域コミュニティ」の意味を問うといったものである³⁾。

また、対（島町）住民に関しては、島町の地域財産、素晴らしさの再確認と伝統、伝承を次世代へ受け継ぎたいという動機付け、地域内コミュニケーションの重要性、各世代が役割を持つことの意味への気づきへの期待が込められている。

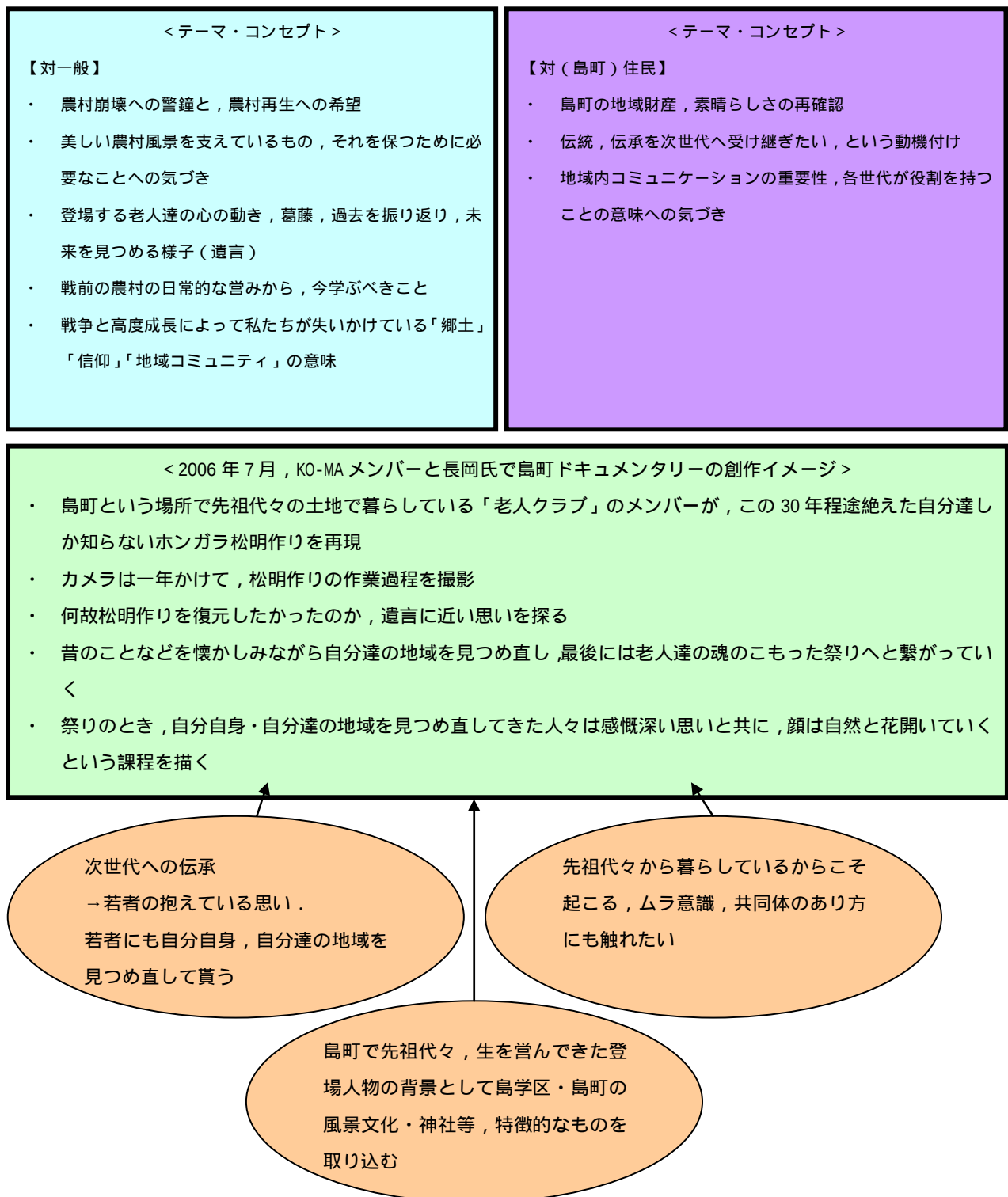


図 3-14 島町ドキュメンタリーのテーマ・コンセプトと創作イメージ

第三章 引用，参考文献

- 1) 藤田知丈,2007-1-23,私信
- 4) 藤田知丈,2007-3-23,私信
- 2) 藤田知丈,2007-3-23,私信
- 3) 藤田知丈,2007-1-23,私信

第4章 KJ法の分類から見た島町ドキュメンタリーに関する考察

4-1 KJ法から見た島町ドキュメンタリー撮影過程

ドキュメンタリー撮影中の島町住民やKO-MAメンバーの発言を集め、KJ法を行った。KJ法とは、文化人類学者川喜田二郎（東京工業大学名誉教授）がフィールドワークにおいて収集した膨大なデータをまとめるために考案した手法である。データをカードに記述し、カードをグループごとにまとめて図解し、論文等にまとめてゆくというもので、KJとは考案者のイニシャルに因んでいる。

今回、KJ法を行った結果（詳細はAppendixに記載）より、

- ・ 「恥ずかしさ」
- ・ 「不安」
- ・ 「疑問」
- ・ 「誇り」
- ・ 「感動」
- ・ 「期待」
- ・ 「諦め」
- ・ 「きっかけ」
- ・ 「演じる」
- ・ 「演出（シカケ）」
- ・ 「つなぎ」

という11のキーワードが抽出された。この10のキーワードを元に、

(1)撮影時（参与観察内容）

(2)ヒアリング

(3)シナリオメモ

について、分類・考察を行う。

4-1-1 「恥ずかしさ」

(1)撮影時

島町に撮影に行くと、おじいさん達はカメラの前でも普段と変わらないよう振舞っていた。「緊張したり、恥ずかしくはないですか」と筆者が尋ねても、「覚えなといけない台本もないし、気楽にしゃべっている」と長老たちは言っていた。何度かHOTTVという地元のケーブルテレビからの撮影を受けた人もいそうである。

しかし、おばあさん達にカメラを向けると「恥ずかしい、とらんといて」「お父さんにきいて」と逃げてしまった。洗濯物の後ろに隠れてしまう人もいた。最初からカメラを向けると緊張してしまうというので、カメラを回さずにインタビューを行った。おじいさんとおばあさんに並んでもらい、夫婦での撮影を行ったときは、「普段改めて一緒にいるということがないから、気恥ずかしい」と笑っておられた。



図 4-1 カメラを前にしても、いつもと変らぬ様子で過ごす老人達
(2007 年 4 月 4 日、島町内にて筆者撮影)

また、若い人の中にはインタビュー撮影中、終始手を組み替えている人もいた。「手が動いていると画面として気になるので、止めてほしい」と長岡氏が注文をしても、気づいたらそわそわとしていて落ち着かない様子であった。櫻井さんの家に取材に行ったとき、奥さんは「化粧をするから」ということで、待っていたこともあった。インタビューのために「いつもより少しいい服」を着る人もいた。

堂川さんは、長岡氏に「結婚式の写真、見せてくださいね」と頼まれ、最初は「恥ずかしいからいやだ」と言っておられたのが、何度も長岡氏が頼むうちに見せてくれるようになった。

長岡氏や KO - MA メンバーに会うから恥ずかしいのではなく、「カメラに撮られる」ことを意識しての発言だということは、撮影があるということが分かってから「いやや、恥ずかしい」と言っていることから分かった。この「恥ずかしさ」は、カメラを通して「この映像を見るだろう他者の目」を（無意識に）想定しているためであろう。しかし、何度も撮影を繰り返していると「恥ずかしい」という言葉はきかれなくなった。

(2) ヒアリング

中川氏によると、中川氏はインタビュー撮影時は AD としてマイク持ちなどをしないようにしていたそうである。「自分がいることで緊張して、言いたいことが言えないのではないか」という配慮からである。普段話さない「思い」を話す際、顔見知りや側にいると照れてしまっていて言いたいことが言えなくなってしまう。そのため、極力インタビューには他の KO - MA メンバーが付き添い、中川氏はサポーターに徹した。

(3) シナリオメモ

「恥ずかしさ」が分かるシーンは設けられていない。しかし、一般的な市民は撮影をされる機会が少ないことから、撮影に対する感情は推測可能と思われる。

(4) 「恥ずかしさ」のまとめ

「恥ずかしさ」は、見知らぬ人間にインタビューをされることに対してではなく、カメラを通して「不特定多数の人に見られる」という意識が働いたため出てきたキーワードだと言える。カメラを見

慣れくると、抵抗が無くなるのか、カメラの前でも話を普通にしてくれた。撮影を了承してもらえ
までのプロセスは、シナリオには反映されない。

4-1-2 「不安」

(1)撮影時

「ホンガラ松明がうまくいくかどうか」という不安は、ホンガラ松明再生に関わる人のみならず、
撮影スタッフも同様の不安を抱えていた。一度しか機会がないので、撮影場所のチェックが入念に行
われた。また、祭りに関して「神輿の担ぎ手がない」という不安もあった。これに関しては、後述
する「演出（シカケ）」に出てくるが、若者達が「祭礼実行委員会」を立ち上げ、自分達で神輿の担
ぎ手を集めた。老人達は将来の島町に対して「島町はどうなるのか」という不安を抱いてると考え、
インタビュー撮影を行ったが、「特に後世に望むことはない」という淡泊な返事が多く、長岡氏と筆
者は肩透かしをくらった気持ちになった。話をしているうちに、若い世代への遠慮が感じられ、「本
音」を聞き出すために質問の形を変えながら、じっくり話を聞いた。

(2)ヒアリング

中川氏は「島町が、果たしてドキュメンタリーの対象となって映画として成立するのかどうか」と
いうことを気にかけていた。他の KO - MA メンバー、長岡氏そして筆者から見れば「松明」という
ものの自体が特殊であり、その中でホンガラ松明というものは製法から奉火の仕方まで何もかも特殊に
感じられたため、撮影対象として不安はなかった。松明祭当日の天候や暗い中でのカメラワーク、8
人がかりの撮影など、技術面での不安があると長岡氏の話から分かった。

(3)シナリオメモ

「ホンガラ松明は成功するのか」という不安が大きい程、成功したシーンが感動的に映ることから、
ホンガラ松明再生の発案者である松村さんと福居さんに「(作ったホンガラ松明を見て)火が吹きそ
うなところがある。見ていて分かる」などの不安に思う声を収録し、シナリオに組み込んでいる。ま
た、将来の島町に対する漠然とした不安を、老人達のインタビューから表すことにより、他の将来に
不安を感じる地域が共感できる内容になる。

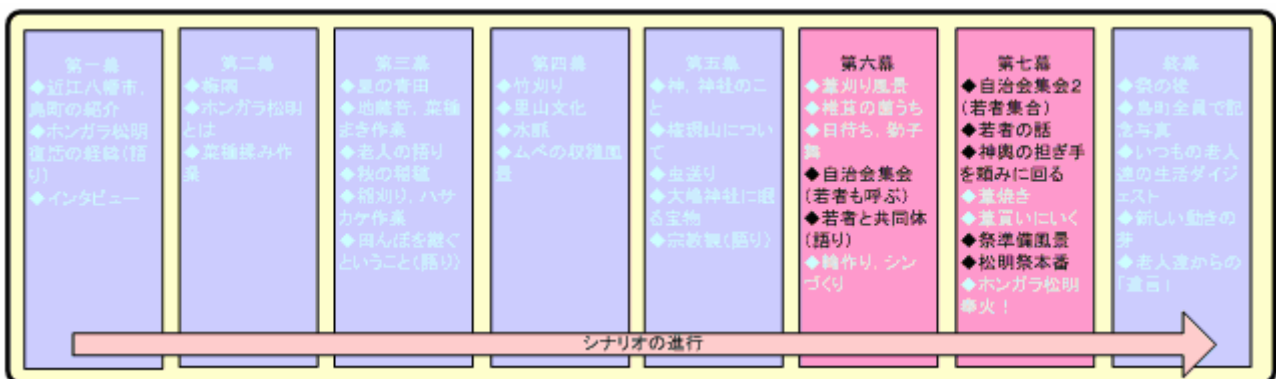


図 4-2 シナリオメモ最終版における「不安」要素の表現シーン（黒字部分）

(4)「不安」のまとめ

不安には、撮影対象となるホンガラ松明が成功するかどうかという不安と、ホンガラ松明（島町）を対象にしてドキュメンタリー映画が成立するののかという不安が存在した。また、撮影技術に関する不安も聞かれた。この中で、特に「ホンガラ松明が成功するかどうか」という不安は、後の松明成功のシーンへのスパイスとなるため、シナリオメモに取り入れられている。

4-1-3「疑問」

(1)撮影時

老人クラブのメンバーは、「ホンガラ松明を映像として残す」という認識しかなかったため、何度も長岡氏とKO-MAメンバーがホンガラ松明以外の内容をインタビューしに来るのを不思議に感じていた。HOTTVという地元のケーブルテレビと勘違いされていたため、撮影があった週にでも、TVで流されると思っていた人が多かったためである。

(2)ヒアリング

中川氏は撮影の間、「島町は撮影対象に成りうるか」と不安を感じていたそう。島町の人にとって、松明自体は全く珍しいものではない。その松明を題材にして、ドキュメンタリー映画としてのインパクトがあるのかどうかということが気にかかっていたそう。

この「撮影対象になりうるか」という疑問に対し、長岡氏は「なぜホンガラ松明は作られなくなったのか」「ホンガラ松明はどういったものなのか、どういう理由で生まれたのか」という疑問を元に撮影を進めていた。「ホンガラ松明が作られなくなったのは、戦争で男手が足りなくなったからですか」と長岡氏がインタビューしていたことから、長岡氏がホンガラ松明の消失と、戦争やライフスタイルの変化に関係があると考え、ホンガラ松明の存亡の裏に潜む社会的な問題をあぶりだそうとしていたと考えられる。結果的に、ホンガラ松明の存亡は、その制作を任されていた青年団の衰退（島町外に勤める人が多くなり、制作のために人が集まりづらくなった）などが一因として挙げられている。戦後も数年間は制作されていたことから、戦争は直接的な影響はないようであった。

ホンガラ松明再生自体外部の人間から見れば、不思議で魅力的なものである。その魅力を伝えるということに関しては、「観光映像的な側面もある」と長岡氏は述べている。その上で「観光ビデオは説明的部分が多いけれど、これ（島町ドキュメンタリー）はもっと気持ち寄りで、老人の思いや作業の工程を丁寧に追って、日本人はこうして暮らしてきたということを描きたい」ということであった。

ホンガラ松明を通して、老人達が抱えている思いや歩んできた歴史、引いては社会的な問題を描こうとしていることが伺える。

(3)シナリオメモ

「なぜホンガラ松明は作られなくなったのか」「ホンガラ松明とはどういったものなのか」という疑問葉はシナリオで明かされるようになっていく。前述の疑問に対しては「会社勤めの人が増え、農業のサイクルにあわせた松明（ホンガラ松明）ではなく半日で簡単に作ることができるドンガラ松明に切り替わった」ため、後述の疑問に対しては「煙突状で、松明下部から火を入れ、ジツキと呼ばれる作業をして松明上部に火をつけるもの」であるということ、ホンガラ松明製作の映像や老人達の語りにより説明される。

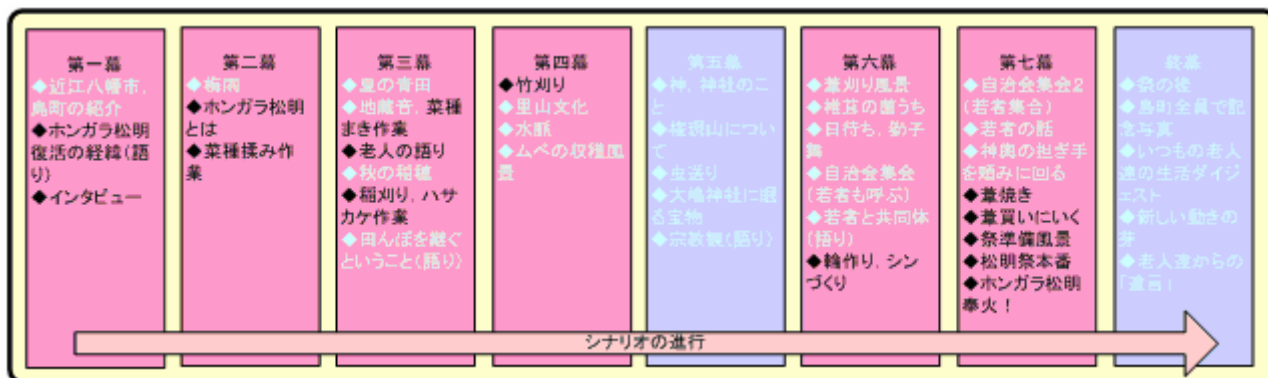


図 4-3 シナリオメモ最終版における「疑問」要素の表現シーン（黒字部分）

(4)「疑問」のまとめ

疑問要素には、「不安」でもあがっていた「ホンガラ松明は撮影対象として成立するか」という制作面に立ったものと、「ホンガラ松明はなぜ作られなくなったのか」という内容に関わる疑問があった。前者は「プロの介入」によって解消が可能である。後者は、島町ドキュメンタリーにおいて「疑問に対する謎解き（＝ホンガラ松明の説明）」として、話の展開で重要な役割を果たしている。

4-1-4「誇り」

(1)撮影時

ホンガラ松明以外の話については、インタビュー撮影時においても筆者の個人的な「島町は歴史が古い土地なんですね」との問いかけに対しても長老達は一様に島の歴史を語ってくれた。

「島町は天智天皇が島村の奥島へ行幸されたとき、長命で男子8人をもった老夫婦に長寿の理由を尋ねられた。夫婦は長寿の理由を、年ごとに家族中が食べる果実があるせいかもしれないと展覧に具した。天皇はことのほか御感に遊ばされ、「宜（むべ）なるかな」と仰せられ、この長寿の効果があるという果実を「ムベ」と称するよう至ったという。以後、現在に至るも毎年11月に皇室に献上されている。」この昔話は老人へのインタビューを行うと、ほぼ必ず聴かれた話である。

更に、島小学校では、昭和初期における新教育運動の高まりの中で、全国的にも著名な存在となり、国内のみならず台湾・朝鮮・満州からも見学に人が来たそうである。その教育の様子を、横浜シネマという会社が「村の学校」というドキュメンタリー映画に仕上げていた。一年間の学校行事や勉強の様子を撮影したそのフィルムは、戦火に焼かれ失われてしまった。しかし、長老達の記憶には残り、当時の話を生き活きとしてくれた。

(2)ヒアリング

カメラを前に語る長老達の姿を見て、中川氏は「じいさん達のこんな表情を、一緒に住んでいて見たことがない」「本人達（主に70歳以上の人達）が思いをしっかりと持っている」と発言していた。藤田氏も「老人達は、普段話す機会がないだけで、たくさんの思いを抱えているということが、撮影を見ていると分かる」と言っていた。

長岡氏は、「完成したドキュメンタリーを見て、島町の人が元気にならなければ意味が無い」と言っていたので、島町が誇れる部分は積極的に引き出すようにされていると考えられる。

(3) シナリオメモ

KO-MA としては、島町の「誇り」となる部分を住民に再確認してもらい、次世代へと繋げていくことが目的としてある。ホンガラ松明はもちろんのこと、ムベに関することや戦前の教育の話は、他の地域にはない「島町独自のもの」である。地域の宝として後世に伝えていくべきだとの判断から、シナリオに「老人が自ら語るエピソード（インタビュー）」として挿入されている。シナリオの前半にこのシーンを挟むことで、後世へ語り継ぐ役割とともに、島町外に対して魅力ある地域だということを主張している。



図 4-4 シナリオメモ最終版における「誇り」要素の表現シーン（黒字部分）

(4) 「誇り」のまとめ

日常生活では改めて話されることのない「島町の誇れる部分」が、カメラを向けることによって表れていた。特に、ムベの話や島小学校の話などは、どの長老達からも聞かれた。普段当たり前のことだが、カメラを通してみることによって「誇り」として意識されるよう、シナリオにも老人達のインタビューなどで場面として盛り込まれている。

4-1-5 「感動」

(1) 撮影時

4月15日、松明祭の一週間前に、ホンガラ松明再生発案者である松村さんと福居さんが「なかなか立派や」とホンガラ松明を見上げ、語っている場面を撮影した。もう一人、発案者の一人である堂川氏は2006年夏に亡くなった。「堂川さんが早くに亡くなってしまったから、見せたかった。自分たちも入退院を繰り返しているし、いつ死ぬか分からないから、完成したところが見られて嬉しい。本番上手くいくといいけど。」と語っておられたことは印象的なシーンとして撮影された。

4月21日、松明祭（宵宮）当日、例年は松明祭を見に来ない老人達が、昔着ていた法被を着て祭りに参加した。若者に混じってホンガラ松明の奉火の指示をし、ジツキ（松明を持ち上げ、地面に打ち付けて煙突状の内部に空気を送り込む動作）の音頭を取った。

ホンガラ松明から煙が上がるが、中々炎が上がらない。2度火を入れなおし、ジツキを行ってホンガラ松明の傘の部分から炎が出た。その瞬間、観客からの歓声が上がった。

カメラは、観客の表情、長老達の表情、若い衆の表情を見逃さないよう撮影していた。万歳をする長老達と、初めてのホンガラ松明に興奮する若者達が「こんな松明やったらもういっぺんでもしたい

なあ」との発言が、ホンガラ松明再生に関わってきた KO - MA メンバーには嬉しいものであった。

(2)ヒアリング

「カメラの前で、普段あまりしゃべらない人も多くの思い出を生き生きと語ってくれた」と藤田氏が言っていた。また、ホンガラ松明のシンが完成した時に、近くの島幼稚園の幼稚園児が近くに散歩に来ていた。そしてホンガラ松明のシンをくぐって遊びだした。これは、長老達が記憶の中でやっていた遊びだそうで、偶然にも「老人達の思い出が、現代で再現される」という運びになったそうである。

同様に、過去の話と一致するシーンとしては、松明祭本番でホンガラ松明に隣の松明から飛び火したことである。騒然となったが、混乱の中、一人の若者が松明によじ登り、消火した。昔は松明を守るため、同じ様に火を消そうとして骨折をしてしまった人の話を聞いていただけに、はらはらしながらも長老達の「若い頃」の様子も少しは再現されたように思い、行為のつながりが感動的だった。このような「偶然の感動」が重なって島町ドキュメンタリーが出来上がっていったのだと長岡氏、中川氏、藤田氏は語っていた。

(3)シナリオメモ

老人達が抱える思いが実り、ホンガラ松明が成功するシーンが最も感動する場面として設定されている。しかし、ホンガラ松明成功だけではなく、「ホンガラ松明のシンを作っていると、幼稚園児がやってきてシンをくぐる遊びをする」というシーンも偶然から生まれた感動のシーンである。長老達からのインタビューに、「昔、田んぼに置かれているホンガラ松明のシンをくぐって遊んでいた」という発言があったからである。昔のイメージと現在のイメージが重なり、文化の伝承を思わせる重要な場面となっていると考えられる。

シナリオにおける「感動」の中心は、その映画の「オチ」でもある。島町ドキュメンタリーは、ホンガラ松明の成功を通して、世代間の繋がりや祭りの伝承の大切さを示さなければならない。よって、ホンガラ松明成功のシーンには、松明の様子だけでなく松明成功に沸く若者の姿や、若者と一緒になって万歳している長老達を映し、「異なる世代の共通の感動」を魅せる場所となっている。

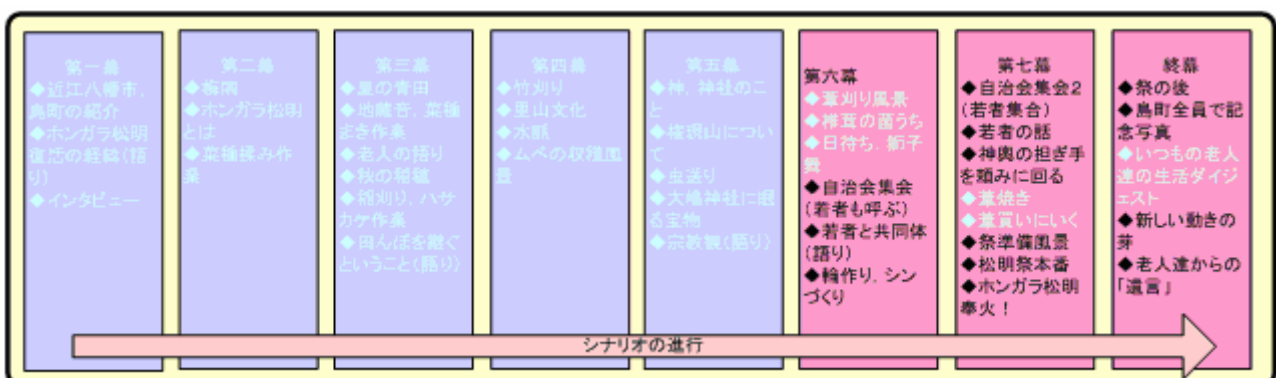


図 4-5 シナリオメモ最終版における「感動」要素の表現シーン（黒字部分）

(4)「感動」のまとめ

シナリオにおいて、感動の中心が一番盛り上がる場面なので、シナリオの配置としては後方にまとめられる。しかし、実際の撮影において「感動」する場面というのは数多くある。撮影段階での「感動」を覚えておくことで、撮影後の活動にも良い影響が残ると考える。

4-1-6「期待」

(1)撮影時

HOTTV という地元のケーブルテレビが近江八幡市にはある。老人クラブメンバーの中には、HOTTV の取材を受けたことがある人が多い。地域のイベントをニュースとして伝えているからだ。私が撮影に参加した当初(2007年1月27日)から3月くらいまでは、撮影に行くと「HOTTV の人？」と声をかけられた。その度に「ひょうたんから KO-MA という団体が、島町とホンガラ松明について撮影している」と説明をした。

(2)ヒアリング

撮影も終盤になる2007年4月、HOTTV において島町の松明祭の様子が流された。これは、KO-MA とは全く関係なく HOTTV が製作した島町の松明祭の様子である。ホンガラ松明再生を聞きつけ、松明祭当日もナオライ(太鼓を担いで若宮神社に行くまでに公民館に集まって宴会をすること)のときから撮影に来ていた。KO-MA 側のカメラングルとは関係なく撮影するので辟易することもあったが、HOTTV 側からすれば8台ものカメラが先客としていたのでよほど驚いたことだろう。島町の方にも声をかけて個別に撮影もしておられた。

そして、後日20分程度に編集され、TVで放送された。2007年6月30日に、KO-MA メンバーとその他 AAF(アサヒアートフェスティバル)のメンバー、島町住民、近江八幡市の方の集会が行われ、KO-MA によって上映された。コンパクトにホンガラ松明についてまとめてあり、概要をつかむものとしては丁度よかった。

しかし、中川氏曰く「島町の人はいこれ(HOTTV の映像)がうちらが撮ってるのと全然違うということを知ってはった」「まだ(KO-MA が)撮っていたのはできないのかきかれた」とのことであった。「頻繁にインタビュー撮影に来たり調べに来たりしていたのに、こんなもんのはずがない」と島町の人達は言っていたとのことである。

簡単な取材しかしていなければ、KO-MA の撮影と HOTTV の撮影の違いは分からなかっただろう。長岡氏が丁寧に取材を重ねていたのを島町の人は見えて、「すごい作品ができる」と期待していることの現われだと感じた。

(3)シナリオメモ

島町の人々が「ドキュメンタリー完成」に期待する分、KO-MA 側は「島町ドキュメンタリーがもたらす効果」に期待している。KO-MA の島町老人クラブ役員会で提示された資料には島町ドキュメンタリーの目的として

途切れかけている古式松明の製法を次世代につなぐための記録として

文化伝承の大切さ、そこに住む人の営みや独自に生まれたコミュニティ、自然や風土・歴史といった面での島町の魅力を、映像メディアを通じて地元内外に発信する

映像の魅力は真の姿とダイナミックな表現。これを(島町の)関係者全員で楽しむことで、新

たなコミュニティが生まれる
ということが提示されている。

に関しては、シナリオの軸として表現されている。長老の説明や製作手順を詳細に追っている。

に関しては、島町の自然風景や長老が語る昔話、ホンガラ松明にまつわる思い出と若者や子ども達との交流の様子をシーンとして挿入することで提示されている。

そして、現段階（2008年1月22日段階）においては、については未知数である。2008年3月8日に完成版が披露される。その後、の目的が達成されることが期待されている。



図 4-6 シナリオメモ最終版における「期待」要素の表現シーン（黒字部分）

(4)「期待」のまとめ

シナリオを見てみると、全てのシーンにおいて何らかの「期待」を背負って挿入されていることが分かる。これは、シナリオが「なんとなく」組まれているのではなく、「こうあって欲しい」という意図が込められて作られているということが分かる。

4-1-7 「諦め」

(1)撮影時

「(ホンガラ松明が無くなってしまったのは)時代の流れだから」「歳だから、今更とやかく言っても先が短い」「昔と今の生活は違う」という言葉がある。

実際にインタビュー撮影において、「ホンガラ松明が来年以降も続いて欲しいですか」という問いに対し、かつてホンガラ松明を作っていた青年から発せられたのは「準備も大変やし、続かないと思う」「現代の生活にあわない松明だから」といった消極的な意見だった。

ただし、「諦め」が伺えるのは発言の中だけであり、実際の老人達の行動は、積極的に撮影に関わったり、製法についてのそれぞれの記憶が若干違い、喧嘩の一手手前まで白熱した議論を交わしながらホンガラ松明を作ったりしているというものであった。島町で培われてきた文化に愛着が深いように感じられた。よって、「諦め」と思われるような言動は謙遜であると考えられる。

(2)ヒアリング

長岡氏と、長老達に「将来の島町はどうなって欲しいですか」などのインタビュー撮影を行った時、「諦め」と取れる老人の発言が多かったので、「島町の老人達は、若い人に遠慮してあまりものを言わない人が多いのではないか」「何かを遺さなければならない、という使命感からホンガラ松明再生

を目指したのではなく、何となくもう今がホンガラ松明再生最後の機会だということで発案しただけではないか」など、ホンガラ松明保存の使命感に燃える発言を予想して撮影に望んだ長岡氏と筆者は、「諦め」の言葉に驚いた。

(3)シナリオメモ

シナリオメモでは「老人達の思い」の一つとして撮影されている部分である。しかし、シナリオのコンセプトには「次世代へつないでいくこと」がある。インタビュー撮影同行時も、長岡氏は「今後ホンガラ松明を作って欲しいですか」という問いかけに対し、可能な限り「来年も再来年も、作って欲しいです」といった言葉が引き出せるよう何度も言い方を変えて質問をされていた。松明祭でホンガラ松明に火が付いた後、興奮冷めやらぬ若者達が、冗談交じりで「これは来年もやらなアカンな」という発言を繰り返していた。その青年達に、長老達の諦めの声を映画の構成として届けるのは、KO-MAの意図に沿わない。

(4)「諦め」のまとめ

島町ドキュメンタリーには、見た人が落ち込み、希望を無くすようなシーンは省いてある。KO-MAの意図は、島町の現実を突きつけ、病巣を明らかにするところにはない。人々が生き活きと祭りに関わる様子を撮りたいのである。よって、明るい内容に変わる要素ならば取り入れられるが、むやみにマイナスの発言を盛り込むことはない。

4-1-8 「きっかけ」

(1)撮影時

「撮影がある」という機会を人々は楽しんでいるようであった。「撮影で集まるし、おにぎりとお味噌汁を作って食べよう」と、稲刈り、ハサカケ作業を老人クラブで行った時に提案があり、実現した。さらに、田谷さんが小学生に声をかけ、稲刈り体験ということで老人と子ども達の交流の場が生まれた。

撮影に筆者らが赴いた時に、「せっかくやし」と言ってシイタケの収穫に連れて行ってくれた。シイタケは通常売られているものより大きく、よく売れるそうである。また、山中に猪を捕まえるための檻が仕掛けられており、獣害に悩む地域だということを聞いた。

また、一番大きな「きっかけ」は、松明祭に老人クラブのメンバーが参加したことである。普段あまり見に来ないおばあちゃん達も見に来ていた。男性陣は若い頃の法被を着ての参加であった。「ホンガラ松明再生」というきっかけが、松明祭に活気を与えたと言える。



図 4-7 松明祭に集う「かつての若者達」昔の法被を着ている人が多かった。(2007 年 4 月 21 日、藤田氏撮影)

(2)ヒアリング

「きっかけ」は、ヒアリング時に多用された言葉である。撮影の趣旨が老人クラブ全体に伝わっていなかったため、2006年12月に老人クラブメンバーに撮影した内容のダイジェスト版を公開した。それまで「ホンガラ松明だけを映す」と思っていた人達も、これをきっかけにKO-MAの趣旨を理解し、「聞きたいことがあったら電話して」と電話番号を教えてくれる人もいたと、藤田氏は述べていた。

今回の島町ドキュメンタリーがきっかけで、島町内における祭りが活発になり、住民が島町に対する考えを深めるきっかけになることが、KO-MAの目的として挙げられている。また、島町住民以外の人にも、自分達の地域を見つめなおすきっかけになることが期待されている。

(3)シナリオメモ

シナリオに盛り込まれている内容はきっかけから生まれたことが多い。スクリーンに映る人々の楽しそうな様子を見て、「自分達の地域もこうなりたい」と島町ドキュメンタリーを「きっかけ」に立ち上がる人がいれば、KO-MAの狙いは成功したといえる。



図 4-8 シナリオメモ最終版における「きっかけ」要素の表現シーン（黒字部分）

(4)「きっかけ」まとめ

ヒアリング時に「きっかけ」という言葉が多用された。偶然から生まれた人と人とのつながりがきっかけとなり、島町ドキュメンタリーを制作するに及んだためである。また、映画撮影をきっかけに島町の生活や文化を見直してもらうという意図がKO-MAにはある。

4-1-9 「演じる」

(1)撮影時

2007年4月22日、本祭が大嶋・奥津島神社で行われた。若者達が「ハクチョウ」と呼ばれる衣装を着て神輿を担ぐ。「カメラで撮ってはるから、しっかりせえよ!」という檄が年配者からとび、緊張した面持ちで神輿を担ぐ準備をしていた。神輿を担いでいる時、例年より大袈裟にシュウシ(神輿などを上下に動かすこと)を行っていた。カメラの前で特に大きくシュウシをしていたので、これはカメラを意識して行われたことである。「祭りを楽しむ若者達」という役柄を、実際に神輿を担いだ若者たちは「演じた」のである。祭りという場が、日常とは違う自分を体現する場であると考えたとき、カメラという存在が「日常との違い」を生み出し、被写体となった若者達の気持ちを鼓舞したと

考えられる。

(2)ヒアリング

「いつも挨拶ぐらいしか交わさない人が、活き活きとたくさん話をされていて、あんな表情は初めて見た」「自身の父親の思いすら日常ではあまり聴くことがなかった」と中川氏が言っていた。地元にいると、顔見知りだからこそ改めて話を聞く機会がない。また、中川氏はインタビューの対象となる人が、気を遣って発言がしづらくなることが無いように、長岡氏と他の KO-MA メンバーにインタビュー撮影を任せていた。その配慮によって、より「日常とは違う自分」をカメラの前で出せたのであろう。

また、藤田氏が「老人達の上の世代はあまりいない。自分達が話す過去のことは、正しいかどうかは本人達しか分からない。そういう気楽さが、老人のアーカイブを生み出しているのかもしれない」と分析していた。

(3)シナリオ

シナリオ中には、全体を通して活き活きと昔話をする老人の姿や、ホンガラ松明のジツキを青年や老人が入り混じって行う姿、神輿を担ぐ青年達に「いつもとは違う」様子が見て取れる。島町住民にとってはいつもと違うということが分かるが、島町に関わりのない人を見たときは「いつもとは違う」ということに気づかない可能性がある。



図 4-9 シナリオメモ最終版における「演じる」様子が表れるシーン（黒字部分）

(4)「演じる」のまとめ

カメラという異質な存在を前に、被写体も「いつもとは少し違う」「(カメラを通して)こう観られたい」という自分を、少なからず演じることはドキュメンタリー理論において周知された事実である。

しかし、被写体の「本当の姿、本当の思い」と対峙しようするということも、カメラでの撮影である。このことを踏まえた上で、「地域社会」と向き合っていくことが望ましい。

4-1-10 「演出(シカケ)」

(1)撮影時

2月24日、自治会と20~40歳前後の若者が集まり、集会が開かれた。これは、ホンガラ松明再生と同時に存続の危機に瀕している神輿担ぎを何とかするためである。神輿の担ぎ手は、「地元に住む

14 歳以上の若者（男子）で、若い順に 14 人」と決まっている。これは今も昔も変わらない、神事としてのルールだそうだ。以前は若者が多く、青年団というグループもあり、その中で神輿を担げるということは「格好良いこと」であった。今のように人手不足になるなど考えられなかったという。

しかし、現在では自治会長が毎年一件ずつ家を回り、拝み倒してようやく 14 人かき集める、ということが続いていた。10 代、20 代の人と思うように集まらず、40 歳を過ぎても神輿に参加しなければならない人もいたそうだ。

これに対し、KO-MA と自治会が呼びかけ、10 数人の若者が集会に参加し、個人の思いを語った。そして「神輿担ぎは若者の役目やから、自分達で祭礼実行委員会を組織して、責任を持って神輿の担ぎ手を集めて、祭りを成功させようや」という意見が出た。「俺ら若いもんが頼みに行ったほうが、相手も気楽やろうし」と話は進み、後日神輿担ぎのお願いをして回った。

異なる世代間の交流のみならず、同世代の間でも改めて思いを語ったり意思を確認しあう場が無くなっていることがこの会議で挙げられていた。若者が島町のことを考えるという「演出（シカケ）」から、KO-MA が期待していた以上の結果（この場合は祭礼実行委員会が結成されたこと）が出たのである。

(2) ヒアリング

「地域プロデューサーズ」と KO-MA は自称している。「地域プロデューサーの役割は、地域に対してシカケをして、それに乗ってもらえるようにすること」だと藤田氏は述べている。中川氏も、「自分達がやっていることにどんどん住民を巻き込んで行って、イベントを回していくのが自分達の役目」と説明していた。このことから、ドキュメンタリーをただ撮影するだけでなく「若い人が祭りに関わるようにする」「女性が活躍する場面を作る」と言った演出（藤田氏の言葉を使うとシカケ）を行うことが KO-MA の役割の一つだと言える。

また、ドキュメンタリー撮影の理論から考えると、「演出はよく使われる。事実を曲げて伝えるような悪意のある演出は良くないけれど、自分が撮りたいと思う場面になるよう工夫することは、自分の主張を伝えるという意味で必要」と長岡氏は言っていた。

(3) シナリオメモ

シナリオメモにおいて、「シカケ」が成功した場面は重要なシーンとなる。若者達が集まる自治会の集会は、初春の風景と共に描かれる予定になっている。老人達が頑張る傍らで若者達の思いも表現し、島町に対してはお互いがどういった考えを持っていたか」ということを示す重要な役割を果たし、外部の視聴者に対しては「それぞれの思いがあり、改めて話し合いの場を作ることでは何か動き出す」と思わせる演出になることが期待される。

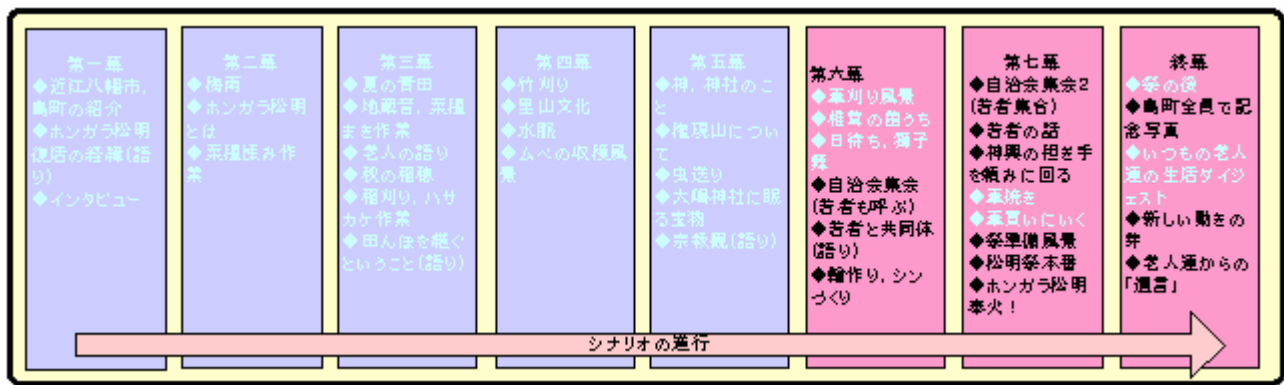


図 4-10 シナリオメモ最終版における「演出(シカケ)」のあったシーン(黒字部分)

(4)「演出(シカケ)」のまとめ

ドキュメンタリー映画がただの記録映画と別であることは第一章で述べた。島町ドキュメンタリーをみる上でも、「演出(シカケ)」あつてのシナリオだということを知っておかなければ、自分達でただ映画の真似をしても上手くいかないということになる。受身にならず、「こうしたい」と積極的に動かなければならない。

4-1-11 「つなぎ」

(1)撮影時

島町住民の中でも人脈の広い人に、他の住民を紹介してもらうことが多かった。長岡氏自身が直接撮影の交渉を行うので、住民もすぐに長岡氏のことを覚えていた。長岡氏に取材された人は、「もっとこういうのも撮ったらどうか」といった情報を長岡氏に提供していた。

また、島町内における「つなぎ」は自治会の集会などが挙げられる。住民同士が顔を合わせ話し合う機会をもつことが「つなぎ」であり、更に別の活動につながっていくことが期待されるからである。

(2)ヒアリング

島町ドキュメンタリーにおいて、KO-MA と島町住民の「つなぎ」となるキーパーソンの重要性が強調された。中川氏は、2006 年度老人クラブ会長をしておられた松村氏の人望あつてこそそのホンガラ松明再生・ドキュメンタリー撮影だったとしている。「松村さんが島町内で信頼に足る人物だったからこそ、ハサカケの時に炊き出しがあったり、みんなが協力する体制になった。松村さんがいなければ、全く違う内容のドキュメンタリーになっていただろう」と述べている。

長岡氏と藤田氏は、中川氏の人柄と適切な人選があつたことを評価している。KO-MA のメンバーは中川氏以外外部の人間なので、中川氏のスムーズな仲介があつたからこそ島町で問題なく撮影が行えたとのことである。中川氏が日常から島町内において、権座などの KO-MA の活動を積極的に行っていることが周知されていた。よって、中川氏からの取材の要請などに応じてくれる人が多かったと思われる。

逆に、中川氏曰く老人会から自治会への情報流しはうまくいかないそうだ。一年ごとに交代なので、勝手に仕事を増やすわけにはいかないということが理由のようである。

(3)シナリオ

シナリオには「つなぎ」となっている存在は明示されない。島町ドキュメンタリー自体が、老人世代から次世代への「つなぎ」となるよう意識されているため、若い世代との交流シーンや次世代へのメッセージなど、インタビューや祭りへの作業を通して「つなぎ」を意識させる内容が含まれている。

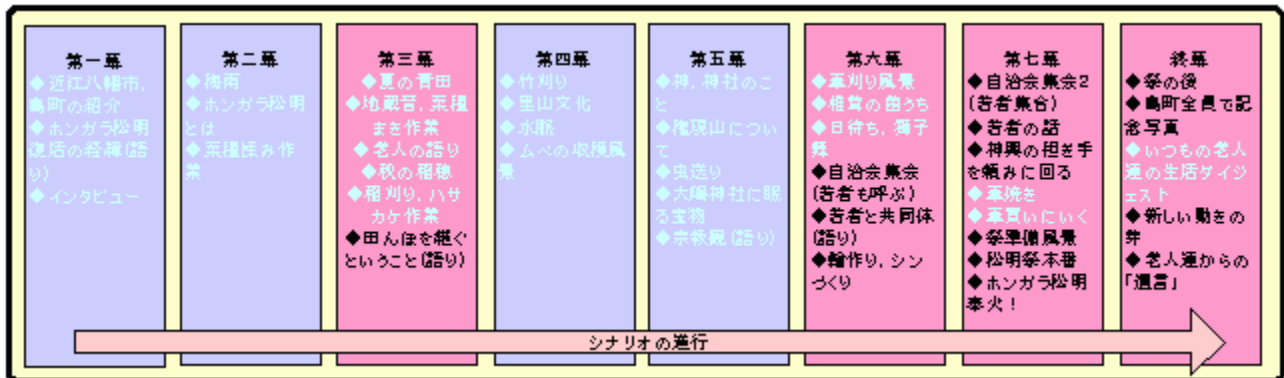


図 4-11 シナリオメモ最終版における「つなぎ」のあったシーン（黒字部分）

(4) 「つなぎ」のまとめ

「きっかけ」と同様で、ヒアリング時に「島町ドキュメンタリーにおいて、かなり重要だ」と言われたのが「つなぎ」の存在である。外部の人間がある地域に介入しても、突然立ち入ればただのお節介であり、煙たがられるかもしれない。まず、自分達の活動を理解してくれて、地域の人とも良好な関係を築いている人がいれば、島町ドキュメンタリーのような作品にはスムーズに取り掛かることが出来そうである。

また、島町ドキュメンタリーは島町住民同士の「つなぎ」となることが期待されている。撮影を「きっかけ」として様々な「つなぎ」のシーンが作られたが、今後上映されてからもつながりが続くことが望まれる。

4-2 キーワードの分類

KJ 法で出された以下のキーワードに関する分類・考察を行った。

- ・「恥ずかしさ」
- ・「不安」
- ・「疑問」
- ・「誇り」
- ・「感動」
- ・「期待」
- ・「諦め」
- ・「きっかけ」
- ・「演じる」
- ・「演出(シカケ)」
- ・「つなぎ」

撮影段階において出てきたこれらのキーワードは、シナリオに反映されるものとシナリオから省かれるものがある。映像化された事象以外の要素を考察する。

まず、映像化すべき要素としては「不安」「疑問」が考えられる。自分達の生活や、地域社会に対する不安や疑問をきっかけにして、人々は行動を起こす。島町ドキュメンタリーで言うと、「ホンガラ松明の製法を知る人物は、自分達で最後になってしまう」「このままでいいのか」という漠然とした不安と疑問が、ホンガラ松明再生の足がかりになる。

しかし、「不安」には「本当にこの対象で良い作品が出来上がるのかどうか」という不安や、「ホンガラ松明は成功するのだろうか」という製作者サイドの不安も存在する。これは、「プロ」介入と話し合いによって軽減される不安であろう。

次に「誇り」「感動」「期待」がシナリオに込められる。実は、撮影対象にはこれだけ素晴らしい部分があるということを示すのである。ホンガラ松明が良い例である。また、撮影の下調べをされていて分かった島町の郷土教育も、誇るべき要素である。老人達が一年以上かけて実現させたホンガラ松明の成功は、一番の「感動」すべき点であろう。そして、今後の島町の展望、社会のあり方が少しでもこのドキュメンタリーによって変化するよう「期待」が込められたシーンで終わる。老人達の遺言として、後世へのメッセージが島町ドキュメンタリーシナリオのラストシーンである。

だが、そのキーワードとなる要素に至るまでに「恥ずかしさ」「諦め」などのキーワードとなる事柄が出てくる。「恥ずかしさ」は、見知らぬ人間にインタビューをされることに対してではなく、カメラを通して「不特定多数の人に見られる」という意識が働いたため出てきたキーワードだと言える。「撮らんといて」と言いながら洗濯物の後ろに隠れてしまったおばあさんが居た。カメラがあると、緊張して喋れないという。そこで長岡氏はカメラを止めた。しかし仕舞うことはなく、手に持ったまま世間話をしながら、印象的な話が出てきたときに「今の話だけ、もう一回」と言ってカメラを回した。おばあさんはカメラ自体に見慣れてきて抵抗が無くなったのか、話を普通にしてくれた。カメラに対する恥ずかしさは、シナリオの要素としては現れないが、撮影対象の日常の表情を撮りたいと思うならば、恥ずかしがっているところを無理やり映すのではなく、少しずつ関係を築くことが必要になるだろう。また、「諦め」は、本当の思いがあるにも拘らず、「言っても無駄だ」と思い込んでいると考えられる。こちら、本心を語ってもらえるような関係性を構築しないと、心にある不満や主張が見えてこない可能性がある。

「きっかけ」「演じる」は、カメラによって生まれる効果である。カメラ(普段目にするようなデジタルカメラとは違う)という非日常的なツールによって、撮影される側も「自然を装う」という非日常な状態を強いられるのである。それは、カメラの前で日常を「演じて」いるのである。撮影に実際に関わっていると、カメラの前で緊張して動けなくなる人はおらず、むしろ普段より饒舌であったり表情が生き生きしていた。「カメラに撮られている」という意識が働き、いつもより「良い状態」の自己を演じているように見えた。そしてカメラという非日常をきっかけに、「いつもと違うこと」にチャレンジするということが可能になる。島町ドキュメンタリーで言うと、60歳以上の人は松明祭に出向くことは無くなっていたが、「カメラで取材がある」ということで、多くの老人が祭りに参加した。

最後に最も重要と思われるのは「演出(シカケ)」「つなぎ」である。シナリオに明記される要素ではないが、シナリオに出てくる要素のベースとなるものである。つまり、この要素を無視して地域に介入するドキュメンタリーは撮影できないといえるだろう(「つなぎ」に関しては、対外的にシナリオに組み込まれたものがあり、後述する)。「つなぎ」になっていた人物は、島町ドキュメンタリーの場合 KO-MA と島町住民を媒介した中川氏や松村氏である。このキーパーソンがいることにより、双方の意思の確認

や日程の調整などがスムーズに行える。「演出(シカケ)」は、藤田氏がよく用いていた言葉である。「島町の人にとっても、外部の人が見ても魅力的なドキュメンタリーにする」ためには、事実を淡々と撮るだけでは不十分である。島町の人が見れば身内が出ているということで面白いだろうが、外部の人が見てもホームビデオを見せられているようなもので、なんら興味関心をひかれることはないだろう。そこで、島町ドキュメンタリーでは「世代の交流」をシーンとして入れるため、自治会や直接若者に呼びかけ、会議の場を設けた。結果的に若者が自ら「祭礼実行委員会」という組織を立ち上げるという KO-MA の想像以上のシーンとなった。ホンガラ松明製作の日を、若い世代の人に伝えておくと、その日に実際に若者が手伝いに来た。老人に男結びを教えてもらう若者のシーンが生まれた。これは、外部に対する「(世代間の)つなぎ」のシーンであると考えられる。

以上に述べたように、ただ出来上がったシナリオを見るだけでは分かりづらい事象を知らずに地域に対するドキュメンタリーを撮影するのは難しい。出来上がった映像を見て議論を交わすときも、スクリーンで起こったことだけを真実として受け止めるのではなく、その裏に隠された感情や努力、活動を念頭におかなければならない。

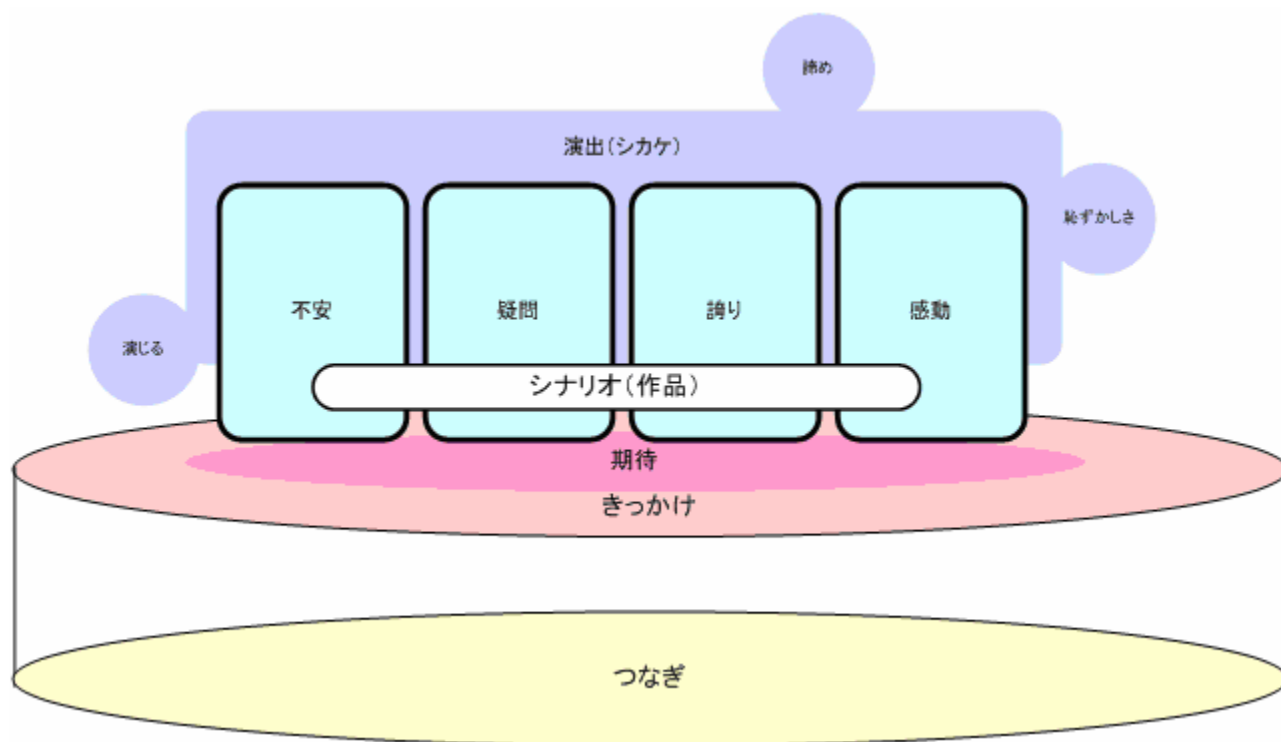


図 4-10 シナリオ(作品)が成立するための要素

4-3 「強い感情の欠落」について

4-1, 4-2 において, KJ 法の結果とそれに対応した事象のまとめと考察を行った。ここで更に考察しておきたいことは、ドキュメンタリーとは多くの場合「何かに対する痛烈な批判」を抱えているものである。

近年は、撮影用機材の小型化と低価格化により、「私ドキュメンタリー」と呼ばれる自分の身の回りを題材にしたドキュメンタリーが増えている。しかし、ドキュメンタリーとは社会において少数派であり、声をあげる力がない人に寄り添う存在であるべきだという主張がある。

長岡氏は、島町ドキュメンタリーの難しさとして「強い感情がない」ということを挙げていた。筆者自身、撮影に入る前は「次世代に上手く文化が伝承しないことへの苛立ち」や「祭りに参加しない人に

対する怒り」が少なからずあると思い踏み込んだ。しかし、実際インタビューをしていると苛立ちや怒りではなく「諦め」「不安」にとどまっている。強い感情がないと、話も穏やかだが単調になり、「作品(アート)」としてドキュメンタリー映画を捕らえたとき、印象の薄い作品となってしまう恐れがある。

また、「個人で何かをするのは困難」という発想はあるが「集団で何かを成し遂げよう」という逆の考えが出ていないことも特徴であろう。本来一体感を持って「ムラ」を守ってきた人たちも、隣人に対して気を遣い、「自分の考えに巻き込んではいけない」とばかりに遠慮する。「同じ世代同士で集まることがないから、お互い考えが分からない」と、祭礼実行委員になったJさんは言っていた。

集団になると強気になるということは、時としては悪いことも引き起こす。しかし、島町という地域に入ってみていると、もっと集団で考える機会があってもよいのではないかと感じた。

第5章 まとめと結論

5-1 各章のまとめ

5-1-1 第一章のまとめ

第一章では、本研究の序論として本研究の背景と位置づけ、島町に関する情報とホンガラ松明の製法、また映像を取り巻く現状とドキュメンタリーの理論について述べ、島町におけるドキュメンタリー撮影について言及した。

本研究の背景としては、コミュニティの希薄化や世代間の繋がりが失われていくこと、農業地域の衰退がある。

本研究の位置づけは、民俗学的な手法で調査を行い、映像人類学に近い位置づけの研究内容となるが、映像・撮影者側の立場での視点を持って分析を行い「撮影された映像が被写体にフィードバックされることが前提となっている映画」という点に着目するものである。

島町は農業を主要産業とする地域であり、古い歴史を持つ。戦前、郷土教育が盛んで横浜シネマという映画会社が「村の学校」というドキュメンタリー映画を撮影・製作した。松明祭に関しては「ホンガラ松明」という独自の松明が作られていたが、戦後程なくして途絶えてしまった。途絶えた理由としては、農業に合わせた材料・製法であった松明なので、戦後のライフスタイルの変化に対応出来なかったことが原因として考えられている。

昨今の映像を取り巻く環境は、撮影・編集機材の低価格化とインターネットの普及により、誰でも手軽に撮影・編集・公開が出来るようになっている。その反面、情報が膨大であり、求める情報を探すことが困難であったり、信憑性の低い情報も多いことが問題となっている。

一般的なドキュメンタリーの理論については、ドキュメンタリーとは「現実をカメラを通して再構築したもの」であるということである。日本では「記録映画」と呼ばれ続けていたものが「ドキュメンタリー」に置き換えられたことで、現在でもドキュメンタリーは「事実をそのまま映し伝えるもの」と一般的に考えられていることが多い。しかし、ドキュメンタリーは製作者の主張を明確に示すため、意図的に場面や発言が切り取られ、構成されているという性質のものである。

島町におけるドキュメンタリー映画撮影に関しては、「ひょうたんから KO-MA」という団体が企画し、ドキュメンタリー作家の長岡野亜氏が撮影・編集を行った。2006年6月から2007年6月まで、島町において撮影された。2008年3月8日に公開予定である。

5-1-2 第二章のまとめ

第二章では、本研究の調査手法と分析方法について言及した。

5-1-3 第三章のまとめ

第三章では、調査と分析方法について述べた。

- 島町におけるドキュメンタリー映画撮影に参加し、その様子を観察した。
- 参与観察内容を元に、KJ 法を行った。
- KJ 法から導き出されたキーワードに従い、ヒアリング調査内容とシナリオの分析を行った。
- キーワードがシナリオにどのように反映されているかを調べた。

5-1-4 第四章のまとめ

第四章では、参与観察内容の概要と、ヒアリング内容、シナリオメモの概要をまとめて掲載した。

5-1-5 第五章のまとめ

第五章では、第四章に掲載した内容の詳細を元に、KJ 法より導き出された 11 のキーワードに関する撮影時・ヒアリング内容・シナリオメモ内容の分類・考察を行った。11 のキーワードと概要は以下の通りである。

- 「恥ずかしさ」...「カメラに撮られる」、この後映像が不特定な他者に晒されるということに対する感情である。「他者からのまなざし」を意識することにより、自分(達)を客観的に見ることになる。
- 「不安」... 島町におけるドキュメンタリーが成立するかどうか 松明祭においてホンガラ松明が成功するかどうかという二種類の不安に分けられる。はプロの介入や、シナリオを練ること、ダイジェスト版を公開することで解消し、はシナリオ内に取り入れ、後の感動的な松明の姿への準備とする。
- 「疑問」...「なぜホンガラ松明が途絶えてしまったのか」「ホンガラ松明とはどういったものなのか」という、島町ドキュメンタリーの原点になる部分であった。これは、島町に住んでいる人にとっては松明があることは特別なことではなく、ホンガラ松明について知らない人が多かったため、外部(今回は KO-MA)の介入が無ければ出てこなかった疑問であると考えられる。
- 「誇り」...ホンガラ松明以外にも、天智天皇の「ムベ」の話や島小学校の郷土教育の話など、住民もよく知らなかった話が老人達からきかれた。この内容は老人の語りでシナリオに含まれている。長岡氏は、「完成したドキュメンタリーを見て、島町の人々が元氣にならなければ意味が無い」と言っていた。島町が誇れる部分は積極的に引き

出し、後世へ語り継ぐとともに、島町外に対して魅力ある地域だということを伝えている。

- 「感動」...島町ドキュメンタリーにおいて重要なシーンとなる。ホンガラ松明の成功は当然であるが、長老たちが紹介した「ホンガラ松明のシンをくぐって遊んだ」話や「松明に飛び火したとき、よじのぼって必死に消火した」などのエピソードが再現されたかのような場面があった。生活が変わってもそこに住む人は変わらないとでも言うかのような、感動を生む場面である。
- 「期待」...撮影も終盤になる 2007 年 4 月、HOTTV において島町の松明祭の様子が流された。これは、KO-MA とは全く関係なく HOTTV が製作した島町の松明祭の様子である。中川氏曰く「島町の人はいこれ（HOTTV の映像）がうちらが撮ってるのと全然違うということを分かってはった」とのことであった。「頻繁にインタビュー撮影に來たり調べに來たりしていたのに、こんなものはずがない」と島町の人達は言っていたとのことである。長岡氏が丁寧に取材を重ねていたことを島町の人は見えていて、「すごい作品ができる」と期待している。
- 「諦め」...「後世に望むことは特にない」といった発言がインタビュー当初はよくきかれた。また、ホンガラ松明をはじめとする祭礼や行事の減少・変化についても、「生活や仕事の変化だから仕方がない」という意見が多かった。しかし、実際にホンガラ松明制作段階になると、そのような発言は聞かれなかった。建前である場合が多いと考えられる。
- 「きっかけ」...ヒアリング時によく聞かれた言葉の一つである。今回の島町ドキュメンタリーがきっかけで、島町内における祭りが活発になり、住民が島町に対する考えを深めるきっかけになることが、KO-MA の目的として挙げられている。また、島町住民以外の人にも、自分達の地域を見つめなおすきっかけになることが期待されている。更に、「自分達の地域もこうなりたい」と島町ドキュメンタリーを「きっかけ」に立ち上がる人がいれば、KO-MA の狙いは成功したといえる。シナリオメモに「きっかけ」が明示される箇所は無いが、シナリオに盛り込まれている内容はきっかけから生まれたことである。
- 「演じる」...「カメラの前」という非日常的な状態は、被写体となっている人にとって「いつもの自分」とは異なる自分を引き出させると考えられるということである。日頃口数が少ない人がカメラに向かって生き活きと語っている姿から、その様子が伺える。

- 「演出（シカケ）」…島町ドキュメンタリーを KO-MA の主張に沿う内容にするために必要なものであった。インタビュー時に長岡氏が必要な台詞を引き出すために質問を繰り返したり、若者達が活動する場を描けるよう自治会との会議を呼びかけたりした。演出（シカケ）をするのはプロデューサーである KO-MA の役割であるが、実際に動くのは島町の人達なので、今回の島町ドキュメンタリーと同様のシカケを他地域に用いても有効とは限らない。そして、実際にスクリーンにはシカケの様子が写っているわけではないので、映画そのままを鵜呑みにしてはいけないということでもある。
- 「つなぎ」…島町ドキュメンタリーにおいて、キーパーソンの重要性が強調されたことを表している。中川氏は、老人クラブ会長をしておられた松村氏の人望あってこそこのホンガラ松明再生・ドキュメンタリー撮影だったとしている。長岡氏と藤田氏は、中川氏の人柄と適切な人選があったことを評価している。KO-MA のメンバーは中川氏以外外部の人間なので、中川氏のスムーズな仲介によって問題なく撮影が行えたということである。逆に、役員が一年ごとに交代する組織では、勝手に自分の番で仕事を増やすわけにはいかないということもあり、協力体制が取りづらいことがある。また、長老の思い出にあったエピソードと同じシーンが現在でも起こったり、若者との作業や話し合いの場を入れることにより、世代間の「つなぎ」を意識させることも島町ドキュメンタリーのポイントとなっている。

5-2 島町におけるドキュメンタリー映画撮影が果たした役割に関するまとめ

ドキュメンタリーというものは、「記録映画」ではなく「現実を切り取り、意図して再構築したもの」とであるということは、第1章で紹介した。長岡氏自身も、「カメラにおさめるということは、当然撮っていない部分が存在するし、同じ撮影対象でも誰の立場になるかで映画の内容は正反対になる¹⁾」と述べている。

単なるホンガラ松明に関する映像アーカイブならば、撮影するのは単なる「作業」であり、島町の住民との綿密な交流は必要ないことである。ホンガラ松明の制作手順を分かり易く撮影し、編集すればよい。そして、映像の完成は「作業の終了」でしかない。いずれ誰かがホンガラ松明のことを調べようとしたときの資料になればよいのである。

しかし、今回の島町におけるドキュメンタリー映画撮影は、何度も島町にカメラを持ち込み、20人以上の住民に何度もインタビューを行っている。KJ法でも出てきたキーワードであるが、地域が動く「きっかけ」となることが「期待」されている。

ドキュメンタリーのワンシーンに、「ホンガラ松明用の稲を刈り、ハサカケを行う」というものがあつた。そのために老人クラブの人は集まったのだが、それをきっかけに「せっかくやから」と言って食べ物を持ってきたり、変わった衣装を出してきたり、いつも話さないようなことを話したりするのである。

島町におけるドキュメンタリー映画撮影は、「カメラ」を通して多くの「一対一」の会話を行ってきた。会議やインターネットからの募集とは比べ物にならない量の「個人の思い」「それぞれの考え」をカメラによって、長岡氏は引き出したのである。撮影段階において、島町に対する島町ドキュメンタリーの役割は、老人達一人一人の思いと向き合い、受け止めてきたことが大きく評価できる。また、島町以外の地域に向けても、地域が抱える文化の継承や世代間の交流に関してシカケを施すことで、変わっていくきっかけを見せるシナリオになっていると考えられる。

しかし、ドキュメンタリー作品として捉えたときの限界も存在する。ドキュメンタリー映像はつくられている、そこには操作があるということを、念頭に置かねばならない。ドキュメンタリー作品は制作者の意図により構成されている²⁾。つまり、「ドキュメンタリーとは真実を映しているものである」と作品を鵜呑みにしては、その裏にある事象に気づけないということになる。

ホンガラ松明が約 50 年降りに老人達の手によって再生され、それが次世代にも受け継がれてゆく。老人達と若者達の交流の場が映し出され、子どもはホンガラ松明のシンをくぐり抜けて遊ぶ。若者達で作る祭礼実行委員会も発足した。しかし、その裏には「次世代にあまり望みすぎるのは野暮だ」「自分はそう長くないから、今更言うこともない」と寂しくなるような発言もある。恥ずかしいと隠れてしまうおばあさんと、一言をもらうために一時間話す。若者達の中には撮影が行われていたことを、松明祭り本番まで知らなかった人もいる。子ども達は、ホンガラ松明という名前を聞いたことがなかった。若者達は、自発的に集まって委員会を作ったわけではない。これらは事実であるが、シナリオの中に具体的に登場してこない。

これらのことから、ただ見て「感動した」で終わってはいけない。「なぜ島町でホンガラ松明のドキュメンタリーが撮られたのか」ということを考える場、考えさせるきっかけが必要なのである。ドキュメンタリー、特に自主制作のドキュメンタリーにおける課題はそこにある。いくら素晴らしい内容の作品を仕上げて「素晴らしかった」「すごかった」で終わられては、作品を撮った意味がなくなってしまう。見たことをきっかけにして、何か行動が起こるよう、上映後にワークショップを行い、製作者の意図を伝えた上で、上映された内容意外のことを伝える必要がある。被写体となった地域の人々にはそれぞれの感想を考えてもらってもよいし、外部の人間ならば映画の裏にある苦労話や工夫を知ることによって、自分たちの活動に生かすことが出来る。

5-3 地域を対象にしたドキュメンタリー映画撮影に対する提案

筆者が参与観察・ヒアリング・考察を行った上で、地域に対するドキュメンタリーを撮影する際に留意する点を以下のように提案する。

作品（アート）として成立させること

製作者（撮影者）側の意見を明確にしておくこと
製作者（撮影者）側の意見を撮影対象に押し付けないこと
「つなぎ」となる存在を見つけること
撮影対象者とは可能な限りコミュニケーションをとること
撮影・シナリオ作成・編集はプロの手で行うようにすること

以下、それぞれの項目に対する説明を述べる。

5-3-1 作品（アート）として成立させるということについて

作品（アート）として成立させるということは、ドキュメンタリーの「日記化」を防ぐということである。ただ事実を「なんとなく」映し、他人に公開することは、現在流行している「ブログ」とポジションが変わらない。私的なブログを見る理由は、「そのブログに載せられている情報に興味・関心がある」場合を除けば、「知人の、自分の知らない一面を見たい」というものがある³⁾。島町のドキュメンタリーにおいても、登場する人物を知る人々にとっては、「自分たちの知らない一面」を見られるということから、興味深く観てもらえるだろう。しかし、知人が見れば面白いが、第三者から見ると「何が言いたいのかかわからない」という状態になってしまう。私的なドキュメンタリーが映画作品として普遍性を持つためには、その私的な世界を見つめる他者としての視点が必要なのだ。作品として完成されたものにするためには、「不安」「疑問」「誇り」「感動」のように、観客が共感しやすい感情を盛り込むことが必要となってくる。これらの感情は、被写体とある程度信頼関係が成立していないと、「恥ずかしさ」「諦め」（諦めのように思える発言は本心ではなく謙遜の場合が多い）が入ってきて上手く撮影できない可能性がある。

5-3-2 制作者側の意見について

、 に関しては相反するように見えるが、両方必要である。作り手が伝えたい思いを明確に持っていないと、途中で「なぜこんなにも頑張って撮らねばならないのか」と、作品に対する情熱を失いかねないからである。撮影当初は、被写体も緊張し「恥ずかしさ」「あきらめ」「不安」などの発言が出やすい。ここで諦めるようであれば、物事の本質は捉えられない。目的も持たず撮影しても、被写体は「期待」しなくなる。「演出（シカケ）」も中途半端なものになってしまう恐れがある。

また、長岡氏が「カメラは恐ろしいくらい、その場の雰囲気映し出す」「なんとなく撮った映像はなんとなくでしかない」と、撮影当初藤田氏にメールで伝えている⁴⁾。このことから、明確な目標に向かって一途に撮影するのが理想である。

しかし、「自分たちはこうしたい」と撮影対象に無理強いしては、被写体が持っている「不安」「疑問」「誇り」「感動」まで殺いでしまう。また、撮影が終わった後不満が残り、撮影が良い「きっかけ」とならないことも考えられる。撮影対象を挑発する撮影方法もあるが、

地域に入るならば避けたほうがよい。後々、地域と共に活動していくことにつながっていないからである。

5-3-3 「つなぎ」となる人物を見つけることについて

については、二つの「つなぎ」となる人物（キーパーソン）が必要である。まず、撮影者側に、撮影対象に関わる人（地域ならば、地元の人）がいることが理想である。まったくの部外者が、唐突に地域を訪れて「ドキュメンタリーを撮りたい」と伝えても、なかなか打ち解けるまでに時間がかかってしまう。情報も集めづらいし、「きっかけ」も作りづらい。

次に、撮影対象になる地域で、人脈や人望のある人を見つけることである。ここで注意すべきなのが、地域にある組織の会長にコンタクトをとることである。特に、1年ごとに役員が変わる団体は「自分の番で、勝手な仕事を増やせない」と協力を断られることがある。これでは「きっかけ」が生まれにくい。入れ替えのない組織や個人での交流が望ましい。

だが、撮影中の様子を顔見知りの方が側で見ていると緊張し、「演じる」ことが出来ず、こちない画像になり、心の内を引き出せない可能性もある。よって、カメラを回すときは退席してもらうなどといった配慮も必要である。

5-3-4 撮影対象者とのコミュニケーションについて

は、コミュニケーションをとり、親密になることによって、撮影に協力してもらいやすくなるということが目的の一つである。地域の行事のスケジュールを教えてもらえたり、撮影場所などをスムーズに探すためには撮影対象の協力があるほうがよい。「つなぎ」の役割を果たしてくれる人が多くなり、「きっかけ」も広がりやすい。

しかし、それ以上に重要なこととして佐藤真(1957-)は著書でこう述べている⁵⁾。「フラハティも小川も、＜暮らしながら撮る＞ことを一生涯一貫して続けてきたドキュメンタリー監督である。それは、何よりもまず、撮る側と撮られる側の豊かな関係を大切にしていたからである。ドキュメンタリーでは、撮る側と撮られる側の人間関係が映画の視線を全て決める。それは、なまじのフィクションを超える、映画そのものの驚きや恐れを生み出す映画のオリジン（原点）である」。長岡氏も、可能な限り島町に赴き、撮影意外でも住民に声をかけていた。また、撮影の約束を自分が行うことで住民との関係を密にしていたように思われる。そこから生まれた信頼関係が、「誇り」や「感動」といった感情を引き出し、「演出（シカケ）」の成功につながると考えられる。

5-3-5 撮影・シナリオ作成・編集について

は、に関わることである。今回参与観察を行っているとき、長岡氏のインタビューや原氏のカメラワークを素人が真似ることは到底無理である。せっかくのすばらしい「演出

（シカケ）」があったとしても，単調なアングルや浅いインタビューでは深い「感動」を引き出せないし，被写体も「演じる」ことなど出来ないであろう．住民との交流を深める内に身内の目になり，客観的に対象を撮れなくなり，作品（アート）として成立しない可能性がある．プロであれば，ドキュメンタリーの基本的な理論を理解した上での撮影が可能である．シナリオの提案やインタビューの手伝いなど手伝える部分は積極的に行ってもよいが，最終的にはプロの判断に任せることが望ましい．

以上のことを踏まえ，焦らず地域との関係を築けば，ドキュメンタリー撮影後の活動もよりよく行えるはずである．

5-4 自由に動ける人材の確保について

KO-MA 側のスタッフとして参加した感想になるが，自由に動ける人材の必要性について言及しておく．

ドキュメンタリー撮影において，特に決まった期間に行われる祭礼やイベントの撮影を行うときは，当然ながら撮影対象のスケジュールにあわせなくてはならない．その時に，いくら撮影へのモチベーションが高くても，仕事などが忙しく撮影に行けないとなると活動が続きづらい．一つのパターンとしては，撮影者（カメラマン）とメイン AD となる人物がいて，その二人ないし数人が指示を出し，その他のメンバーが入れ替わりながら取材に同行するというスタイルが現実的な組織であると提案する．

5-5 今後の課題

今回は時間的制約から，調査対象を「ドキュメンタリー撮影」とした．2008 年 3 月 8 日には，完成版が上映される．

今後，島町の人に対して，どのような影響があったかを調査する必要がある．

「自分達のよく知る人，場所がドキュメンタリー映画となったときにどう感じるか」

「今後島町がどのように変化をしていくか」

「島町ドキュメンタリー映画を見て，何か行動を起こす人や地域が出てくるか」

を把握すれば，より地域社会に対して効果的なドキュメンタリー映画制作が可能となるだろう．

また，島町ドキュメンタリーがきっかけとなって，他の地域でもドキュメンタリー撮影が起こるのかという疑問がある．ドキュメンタリーでなくとも，地域社会を対象とした映像コンテンツは夥しい数がある．それらがどのような影響力を持ち，また影響された人がいるのかということも調査する必要がある．

5-6 今後ドキュメンタリーを観るにあたって

今後ドキュメンタリーを観るときは、「カメラ」と「カメラを構える人」の存在を意識して欲しい。そして、その人物はカメラで何を切り取り、何を伝えたいと思っているのかを考えるべきである。

往々にして、ドキュメンタリーは目をそらしたい現実や、答えのない疑問を投げかけてくるだろう。しかし、自分なりの結論を求め、頭を動かすことを勧める。

そして、何か行動を起こす「きっかけ」としてもらいたい。

第5章 引用文献

- 1) 長岡野亜,2007-9-7,私信
- 2) 鎌仲ひとみ,他:ドキュメンタリーの力,寺子屋新書,p.209(2005)
- 3) 加藤恭子,川浦康至:人はなぜブログを読むのか - 知人ブログと他人ブログの閲覧行動 -, コミュニケーション科学,(26),pp.91-103(2007)
- 4) 藤田知丈,2007-1-23,私信
- 5) 佐藤真:ドキュメンタリー映画の地平 上 世界を批判的に受けとめるために,凱風社,pp.44-45(2001)

本稿は、滋賀県立大学環境科学部環境計画学科環境社会計画専攻における研究成果を、学位論文としてまとめたものである。

本研究の遂行ならびに本研究の作成において、テーマの設定・論の展開・プレゼンテーションの方法、進路に関してなど、厳しくも丁寧な指導をいただき（そして最後までぎりぎりでご迷惑をおかけし）ました滋賀県立大学環境科学部環境計画学科環境社会計画専攻近藤隆二郎准教授に謹んで感謝の意を表します。

ドキュメンタリー作家である長岡野亜氏、ひょうたんから KO-MA の藤田知丈氏、中川豊一氏には、撮影時にお世話になるだけでなく卒論の相談として、何度も話をきいてくださり時間を割いてくださいました。そして、島町の方は、あたたかく迎え入れてくださいました。これほどまでに「研究対象」に恵まれた論文は無いと思います。卒論がきっかけとなり出来たつながり、一生大事にさせていただきます。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

また、研究当初何を研究してよいかわからず、試行錯誤の時に的確なアドバイスをしていただき、研究の相談に乗っていただいた近藤紀章氏、樋口幸永氏、迫間勇人氏に感謝いたします。

近藤研究室の江口君、倉嶋君、齋藤君、田代さん、久野君、三輪君。気分屋で無計画な私を見捨てず、共に悩み苦しみ、乗り越えてきた日々を忘れません。これから先、多少の苦難があろうとも、卒論の日々を思い出せば乗り越えそうです。あなた達と同期・同ゼミで良かったと心から思います。改めて感謝の意を表します。

同期の社会計画専攻の皆さん、お互い切磋琢磨し歩んできた日々を忘れません。社計 10 期生の持つ独特の「ゆったり」とした雰囲気は私は大好きでした。こんなに居心地の良いクラスは無いと思います。今までありがとう、そしてこれからもよろしくお願いいたします。

最後に、就職活動や卒論の調査などでスケジュールが詰まっても健康でがんばれたのは、父・母・祖母・弟妹達の支えがあったからです。ここまで私を育て、学校生活を支えてくれた家族に心から感謝いたします。

2008 年 2 月 20 日 雪の残る冷たくもきれいな朝に（徹夜明け）

溝江麻衣子

Appendix.

ひょうたんからKO-MA

おうみ未来塾7期生による地域課題研究グループ「ひょうたんからKO-MA」の活動記録&発信用ブログです。



[TOP](#) / 本殻松明復活プロジェクト

<< [1](#) [2](#) >>

2007年02月18日

ブログ一部移転します。

2007/2/18以降、「ほんがら松明復活プロジェクト」と「子ども映画づくりワークショップ」の経過報告は、このブログではなく、「アサヒ・アート・フェスティバル 草の根コミュニティ」の方にアップしていきます。

【島町映像フェスティバル】

<http://www.voluntary.jp/hyotan/>

【AAF草の根コミュニティ】

<http://www.voluntary.jp/portal/aaf/>

posted by ひょうKOMA at 09:00 | [Comment\(0\)](#) | [TrackBack\(0\)](#) | [本殻松明復活プロジェクト](#)

2007年02月17日

日待ち&獅子舞

2/17は、毎年「お伊勢さん」から「伊勢太神楽」のご一行が島町にやってくる日。

獅子舞の獅子が町内の各家を回っておくどさん(今で言う台所)などの悪魔祓いをしてくれるほか、町内のお寺の境内で、国の無形文化財にも指定されている由緒正しき獅子舞(曲芸)の「フル・バージョン」を魅せてくれます。

昔は、子供たちはこの獅子舞を見に行くのが(というか飴がもらえるのが)楽しみで、学校が終わるや否や、お寺へ飛んでいったのだとか。

近年は、島町で「フル・バージョン」が行われることはなかったそうですが、今年は特別に有志でお金を出しあって実現したそうです。

そして、獅子舞が来る前日には、「日待ち」と言って、町内の各組ごとに、毎年持ち回りで決まる「宿」と呼ばれる家に組内の住人が集結して、お燈明を立て、みんなで「じゃんじゃん」(鶏肉のすき焼き)を食べて騒ぎながら獅子舞が来るのを待つ、という行事があります。

組によって簡略化されている所もありますが、この「日待ち」が、組内の各家のコミ

記事検索

検索語句

2007年05月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

新着記事

(04/10)子ども映画づくりワークショップ2007 in 近江八幡 はじまるよ!!
(02/18)ブログ一部移転します。
(02/17)日待ち&獅子舞
(02/13)AAF2007ネットワーク会議に行ってきました!!
(02/09)左義長祭の元気の源を探る!!

最近のコメント

左義長祭の元気の源を探る!! by ひょうKOMA (02/19)
新聞報道 by マツザキ@湖岸のほとり (10/29)
県民文化活動チャレンジ企画・公開プレゼン by 老人 (07/20)
これが「ゴンザ」だ!! by negi (05/24)

ユニケーションの場のひとつであることは間違いなさそうです。

今回、この「日待ち」と「獅子舞」も、我らがひょうKO-MA撮影チームは密着・撮影してきました♪



posted by ひょうKOMA at 22:00 | [Comment\(0\)](#) | [TrackBack\(1\)](#) | [本榎松明復活プロジェクト](#)

2007年02月13日

AAF2007ネットワーク会議に行ってきました!!

2/11・12の2日間に渡って、東京浅草のアサヒ・アート・スクエアで開催されたAAF (アサヒ・アート・フェスティバル)2007の「ネットワーク会議」に参加してきました♪

アサヒ・アート・フェスティバル オフィシャルサイト
<http://www.asahi-artfes.net/>

興奮冷めやらぬうちに、諸々報告しま～す！
↓ ↓ ↓

[続きを読む](#)

posted by ひょうKOMA at 10:00 | [Comment\(0\)](#) | [TrackBack\(1\)](#) | [本榎松明復活プロジェクト](#)

2007年02月09日

左義長祭の元気の源を探る!!

若者の祭離れが進む島町(というか市内の松明・太鼓祭全般)とは対照的に、むし

最近のトラックバック

日待ち＆獅子舞 by 夢叶スクール(03/23)
老人クラブ役員会で予告編を上映!! by 夢叶スクール(03/23)
ムベ、むべ、郁子 by 筆ペンでなぞる百人一首(03/18)
新聞報道 by 筆ペンでなぞる百人一首(03/18)
ゲートボールクラブ忘年会 by 九州・沖縄情報(03/05)

カテゴリ

権座水郷コンサート(22)
本榎松明復活プロジェクト(22)
子ども映画づくりワークショップ(0)

過去ログ

2007年04月(1)
2007年02月(5)
2007年01月(2)
2006年12月(3)
2006年11月(2)
2006年10月(11)
2006年09月(6)
2006年08月(3)
2006年07月(4)
2006年06月(5)
2006年05月(2)

RDF Site Summary
RSS 2.0

[管理者ページ](#)

市M町自治会館)を取材してきました。

左義長祭そのものについては下記サイトなどを参照ください。

<http://www5d.biglobe.ne.jp/~him8man/S-2004.html>

結果、M町では、祭を代々伝承するしくみが出来上がっているばかりでなく、祭が人・世代・空間をつなぐ「かすがい」として抜群に機能し、今でも限りなく理想に近い地域コミュニティが形成されているようだ、ということが分かってきました。

M町すごい！

左義長祭すごい！

...これは、さらなる分析の価値アリです♪

以下、長くなりますが、取材メモからの抜粋をここに記録しておきます。

↓ ↓ ↓

[続きを読む](#)

posted by ひょうKOMA at 23:30 | [Comment\(1\)](#) | [TrackBack\(0\)](#) | [本榎松明復活プロジェクト](#)

2007年02月07日

老人クラブ役員会で予告編を上映!!

本日、島町老人クラブで役員会があり、ほんがら松明づくりの今後の予定を話し合うということで、その様子を撮影してもらいました。

その際、ノートPC・プロジェクタ・スクリーンも持参して、新たに編集しなおした6分半の予告編ビデオをその場で上映。老人たち本人に観ていただきました。

「ほー！」

「おー！」

皆さん、食い入るように画面を見つめ、「こらぁ、たいしたもんや！」と、充分ご満足いただけたご様子。

「このプロジェクトはアサヒ・アート・フェスティバルにも採用されましたし、完成したら全国で上映されますよ！」と鼓舞すると、

「ほらぁ、最後までしゃんとがんばらんなぁ！」

「Yさん、東映にスカウトされるかも分からねえ！」

「アッハッハー！」

....これで、本番へ向けてますますモチベーションを高めてくださることでしょう!!

posted by ひょうKOMA at 22:00 | [Comment\(0\)](#) | [TrackBack\(1\)](#) | [本榎松明復活プロジェクト](#)

2007年01月11日

1 / 11ひょうKOMA新春ミーティング

守山コミュニティホールで2007年一回目のミーティングを開催。

Nさん、Tさんとは久しぶり。
とくにTさんは何ヶ月ぶりだろうか…。

とにかく、Mさん以外のメンバーが久々に揃ったなかで、ほんがら松明復活プロジェクトの概要を改めて共有し、今後の計画と役割分担について話し合いました。

posted by ひょうKOMA at 23:00 | [Comment\(0\)](#) | [TrackBack\(0\)](#) | [本穀松明復活プロジェクト](#)

2007年01月05日

正月の権現山登山

あけましておめでとうございます！

年明け早々、1月2日に地元のT爺が権現さんへ詣るといので、その後を追って、NとHの2人で、カメラやマイクを構えながら山頂まで登山。

T爺は老人とは思えない足取りでスタスタと進み、Hさんは落ち葉の積もった急斜面で三脚とマイクを抱え、何度も転倒しながらもなんとか追隨。

山頂付近の巨岩の上に立って下を見下ろすと、島町の集落や田んぼから西の湖・琵琶湖に至るまでが一望できます。なかなかの絶景。

Nさん曰く、なかなかの映像が撮れたようです♪
苦勞して山登りした甲斐がありました。

posted by ひょうKOMA at 09:00 | [Comment\(0\)](#) | [TrackBack\(0\)](#) | [本穀松明復活プロジェクト](#)

2006年12月18日

ゲートボールクラブ忘年会

今日は島町ゲートボールクラブの忘年会。

老人クラブ総会とそんなに変わらないメンバーでしたが、普段からゲートボールで気心が知れた間柄だからか、雰囲気は総会の時よりぐっとやわらかく、酒が入ると自慢の歌も飛び出し、撮りたかった自然な「一体感」が感じられる一幕でした。

圧巻だったのは、Iさんの江州音頭。
島学区の名所・見所を余すことなく盛り込んだ歌詞に思わず聞き惚れてしまいました。

そして、昼食には地元の山で捕れたというイノシシ肉のバーベキューも振舞われました。臭みもほとんどなく美味！添えられていたキャベツの甘みもまた格別！
べんりな夜でした！！

posted by ひょうKOMA at 21:00 | [Comment\(0\)](#) | [TrackBack\(2\)](#) | [本殻松明復活プロジェクト](#)

2006年12月16日

老人クラブ総会

今日は島町老人クラブの総会があり、老人(40人ぐらい?)が集まりました。

総会が始まる前には、お宮さん(大嶋奥津嶋神社+若宮神社)の掃除をするのが慣わし。

朝早くからボツボツと集まってくる老人たちは、皆まず神さんへのお参りをすませ、特に役割分担を割り振るでもなく、ごく自然にあらゆる場所の掃除が卒なく行われていきます。

さて、お宮さんもきれいになり、一同着替えてから自治会館に集合。
役員改選の審議中、KO-MAとして改めて今回の映像づくり活動の目的・ねらいと今後のスケジュールを説明。

その甲斐あってか、総会終了後、何人かから電話番号を覚えていただいたり、「何かあったらいつでも声かけてや～」と言っていたり。

これからは、全体に協力的な雰囲気の中で、今まで以上に自由に動き回れそうです♪

posted by ひょうKOMA at 21:00 | [Comment\(0\)](#) | [TrackBack\(0\)](#) | [本殻松明復活プロジェクト](#)

2006年12月11日

AAF(アサヒアートフェスティバル)2007の公開プレゼンに行ってきました!!

来年度の映像づくりのための資金調達と、中学生による映像づくり体験ワークショップの開催、そしてさらなるネットワークづくりのために応募していた「アサヒ・アート・フェスティバル」。

一次選考(書類審査)の結果、東京まで招かれ、公開プレゼンに臨みました。実質2日ほどで突貫で作った5分間のプレゼン映像を引っさげ、朝の新幹線の中でリハーサル。

地下鉄マップ片手にウロウロしながらも、何とか東京浅草のアサヒスクエア(写真)に到着。

とにかく楽しんでこよう!と、審査員の皆さんとのコミュニケーションを満喫してきました。
アートという独特の世界で、私たちの活動がどのように評価されるのか楽しみです。

そうそう、帰りに買った浅草名物「芋きん」は絶品でしたヨ♪



posted by ひょうKOMA at 23:00 | [Comment\(0\)](#) | [TrackBack\(0\)](#) | [本榎松明復活プロジェクト](#)

2006年11月30日

インタビュー進行中

松明復活作業に関わっておられる老人たちに、一人ずつインタビューを続けています。

本榎松明のことはもちろん、若い頃の地域の様子や青年団のこと、戦争のこと、小学校が郷土教育に力を入れていて全国から視察が絶えず、映画会社も映画を撮りにきていたことなど、貴重な面白い話がいくつも出て来ています。

Tさん、MSさん、YSさん、YRさん、FEさん、FYさん、MTさん…。

インタビューはまだまだ続きます。

posted by ひょうKOMA at 20:00 | [Comment\(0\)](#) | [TrackBack\(0\)](#) | [本榎松明復活プロジェクト](#)

2006年10月20日

ムベ、むべ、郁子

島地域には、ムベというアケビによく似た果実がたくさん自生していて、地元では長寿の霊果として知られており、これを天智天皇の時代から天皇家へ毎年献上しておられるそうです。

献上は、一旦中断していたのを、大嶋奥津嶋神社の宮司さんが復活させたのだとか。

<http://www.page.sannet.ne.jp/mahekawa/mubenarukana.htm>

今日は、献上のためのムベの収穫作業(氏子総代)をカメラに収めました。

明日は献上の儀式があるそうです。

posted by ひょうKOMA at 15:00 | [Comment\(0\)](#) | [TrackBack\(1\)](#) | [本榎松明復活プロジェクト](#)

2006年10月12日

松明に使う竹を刈り取る作業を撮影しました。

島町は田んぼと山との境目に集落があり、家のすぐウラに竹やぶがあるうちも多い。竹は貴重な生活資源として利用されていたが、ガスや石油製品の普及で竹の利用価値はなくなり、人の手が入らなくなって荒れ放題の竹やぶも少なくない。近年は、竹林が里山を侵食して、山の景観や生態系にも影響をもたらしている。

せめて、祭りで竹を使いつづけることが、里山に生きる上でとても大切なことかもしれない。

ところで、竹材や木材を山から切り出すのは秋(10～11月頃)がベストらしい。それ以外の時期に切ると、長持ちしなかったり、すぐ虫がついたりするのだとか。

しかも、新月に近い日に切る方がいいとの説も。果たして???

posted by ひょうKOMA at 17:00 | [Comment\(0\)](#) | [TrackBack\(0\)](#) | [本穀松明復活プロジェクト](#)

2006年09月26日

菜種の間引きと稲刈り

朝早くから、おじい、おばあ達がポツポツ菜種の育苗畑に集まってきて、ワイワイおしゃべりしながらぎっしり育っている苗の間引き作業に精を出しました。

そのあと、続けて自治会館前のYSさんの田んぼでもち米の稲刈り。
松明に使うワラを確保するため、カマで手刈りし、ハサにかけていきます。

今はみんなコンバインで刈り取り、ワラはその場で粉碎されてしまうので、こうして総出で手刈り作業をしないと、大量のワラが手に入らないのです。

稲刈りには、地元島小学校から子供たちも駆けつけて参加。

ハサかけが終わった田んぼは、なんだかちょっと懐かしい風景に。

Tさんから昔の田んぼの写真も見せてもらいました。往時は見渡す限り一面ハサがずらりとならんで、それはそれは壮大な美しい農村風景でした。
こんな風景は二度と見られないだろうなぁ。

posted by ひょうKOMA at 19:00 | [Comment\(0\)](#) | [TrackBack\(0\)](#) | [本穀松明復活プロジェクト](#)

2006年09月18日

慰霊祭

今日は老人クラブ主催の慰霊祭と懇親会が自治会館でありました。
我々もカメラを持って参加してきました。

posted by ひょうKOMA at 18:00 | [Comment\(0\)](#) | [TrackBack\(0\)](#) | [本穀松明復活プロジェクト](#)

2006年09月01日

菜種のタネまき

8月26日(土)の午前中、菜種のタネまきが行われました。

この菜種が来年実り、それを収穫したあとの菜種殻が、再来年の松明に使われます。

この菜種栽培は地元自治会の仕事ですが、松明の製法だけでなく、菜種栽培のノウハウも次世代へ伝授するため、老人クラブの古老たちも作業に参加されました。



今回苗代に使用する田んぼ。3m×25m程度の場所です。



肥料としては石灰と元肥です。



トラクターで土を耕し、草を取ります



周囲に畝をつくります。



まず石灰を撒き、次に元肥を撒きます。



今回使用する種です。
7月の種蒔作業の時に確保していたものです。



肥料を撒いたあと、鍬で耕し草の根や石などを除きます。



周囲を掘って畝の完成。柔らかいところは足で固めていきます。



いよいよ種まきです。少しずつ、万遍なく撒いていきます。
この際、土は被せません。

posted by ひょうKOMA at 00:37 | [Comment\(0\)](#) | [TrackBack\(1\)](#) | [本穀松明復活プロジェクト](#)

2006年08月27日

悲しいお知らせ

菜種刈り、菜種初作業に参加しておられた最高齢のDさんが亡くなられた、との計

今日、葬儀が行われるとのこと。

Dさんは、本殻松明復活の発案者の一人。
来年の本殻松明、何としても成功させなければ。

Dさんのご冥福を、心よりお祈りいたします。

posted by ひょうKOMA at 09:00 | [Comment\(0\)](#) | [TrackBack\(0\)](#) | [本殻松明復活プロジェクト](#)

2006年07月28日

種籾作業をしました

7月28日(金)の午前中、長梅雨のため待ちに待った種籾作業がようやく行われました。



乾燥させるために積み上げてあった菜種殻を一束ずつ手に取り、地面に広げたブルーシートの上で叩いたり踏んづけたりすることで、ブルーシートの上に種を落とし、種と殻とを分離させています。



これは「唐箕(とうみ)」といって、種とクズを選り分ける装置。昭和初期に購入され、現在まで各家で保管されていた年代ものの骨董品だが、今でも現役でバッチリ使っていました。

ハンドルを回して風を送ると、実の詰まった重い種は手前の1番口から、軽い種は2番口から、その他のクズ・ゴミは風に飛ばされて横の大口からそれぞれ出てくるといふ優れもの。



唐箕を使っているところ。

....実はこの唐箕、この後片付けて持ち主の自宅へ運搬する途中、軽トラから落下して大破してしまいました。貴重な最後の映像です。



こちらも種とクズとを選り分ける道具。

四角い大きな篩(ふるい)の片方を台からひもで吊り下げることによって、一人で効率よく篩を使える、というもの。これも先人の工夫の賜物です。



こうやって使います。



結局、収穫した菜種は米袋2つ分(=約60Kg)でした。



長雨で腐ってしまった菜種殻や、その他のクズなどを掃き集め、最後には火をつけて燃やします。畑で育てた作物だけを燃やしているのでカーボンフリーです。灰は肥料にしはるのかな？

2006年07月14日

長老達へのヒアリング

7月14日(金)

予定されていた種籾作業が、前夜の大雨で突然中止に。

(今も休耕地に積み上げたままの菜種は、2～3日晴天が続いた後でないと、湿気ていて種籾作業に適さないらしい)

そこで、急きょ予定を変更して、種籾作業に来るはずだった地元老人クラブの主要メンバーのお宅を1軒ずつ訪ねて、昔のことや地域のことをヒアリングすることに。

最初に訪ねたAさんは、老人クラブに本穀松明復活の話を最初に持ちかけた発起人の1人。

当時の松明づくりのこと、松明づくりの担い手だった青年団のこと、さらには戦時中に島の上空でB29が日本の戦闘機を撃墜した生々しい記憶まで、いろいろ教えていただきました。

本穀松明づくりに向けて、大量のワラを確保するため、秋の稲刈りは3反の田んぼを全部手刈りするとか。ぜひ、若者も一緒に稲刈りして、島の農村景観づくりの一環としてハサかけも実現しましょう！とその場で提言。

次に、畑作業中のBさんに遭遇。地元では知恵袋と呼ばれ、島地域の伝承ごとや神仏信仰の系譜などを詳しく教えていただきました。北津田町の松明は男性のシンボル、島町に伝わる本穀松明は女性のシンボルであることは分かっていましたが、Bさんの解説で、大嶋奥津嶋神社の「大嶋」が男神(北津田町の松明)、「奥津嶋」が女神(島町の松明)であることが明らかになりました。また、同神社はこの辺りでも特に由緒ある神社で、古代出雲国との関わりも深いとか。

そして、島町の背後にそびえる"権現山"は「モトフジ」と呼ばれる富士山の一つで、マムシ神が祀られている、とも。...Bさんにガイドをお願いして、権現山エコツアーを企画したら、すごく面白いイベントになりそう！？

そして、いつにもこやかなCさんからは、戦前の島小学校にまつわる貴重な話が聞けました。なんと、Cさんが小学生の頃、働きながら勉学に励む島小学校の小学生達を主人公にしたドキュメンタリー映画が制作・公開され、多くの人が見学に集まってきた、ということです。横浜シネマという会社が制作していたそうですが、戦争でフィルムは全て失われてしまい、もう残っていない、とのこと。残念！！

Aさん、Bさん、Cさんはみんな昭和一桁生まれ。
ヒアリング結果は、できるだけ早めにとりまとめます。

....ヒアリング後、昼食を終えてから再び島町を訪れてみると、小学校から自転車の一団が元気よく若宮神社へ。
時折小雨がぱらつく中、「本穀」用でない、例年の松明用の菜種殻の種籾作業を、子ども達が神社の境内で付き添いの先生と一緒にやり始めました。

先生にお話を聞いてみると、どうやら菜の花エコプロジェクト関係の子ども達で、種を収穫して持ち帰り、搾油して菜種油として使うのが目的とのこと。
(我々にとっては)肝心の種を取ったあとの「菜種殻」の方は、おじいちゃんが1人で黙々とかき集めて束ねておられました。おそらく、あれが午前中ヒアリングに訪ねた時にお留守だったDさんだと思います。

か学校に持って帰ってもらい、小学校でも子ども松明を作ってもらえるようなことができるといいなぁ。

posted by ひょうKOMA at 20:00 | [Comment\(0\)](#) | [TrackBack\(0\)](#) | [本殻松明復活プロジェクト](#)

2006年06月14日

さらに、菜種が積み上げてあるのは

↓この辺。

<http://www.mapfan.com/index.cgi?>

[MAP=E136.5.18.2N35.10.17.9&ZM=12](http://www.mapfan.com/index.cgi?MAP=E136.5.18.2N35.10.17.9&ZM=12)

posted by ひょうKOMA at 20:03 | [Comment\(0\)](#) | [TrackBack\(0\)](#) | [本殻松明復活プロジェクト](#)

<< 1 [2](#) >>



ニックネーム: パスワード:

| [MyBlogトップ](#) | [Blogポータル](#) | [ブログガイド](#) | [よくある質問](#) | [サポート](#) |

ひょうたんからKO-MA

[総Blog数:59件] [[このMyBlogをブックマークする](#)] [[RSS0.91](#) [RSS1.0](#) [RSS2.0](#)] [[ATOM](#)]

[前のページ](#) | [次のページ](#)

2008/03/10のBlog

「ほんがら」完成記念上映会 満員御礼！ 無事終了！ 速報レポート

[06:00] [[ほんがら松明復活プロジェクト](#)]

[[スライドショウ](#)]

2008年3月8日。

午前中は冷やかな曇り空だったが、午後にはお日様も顔を覗かせ、風もなく、春の訪れを感じさせるのどかな昼下がり。

午後1時半。

現地・[近江八幡市立島小学校](#)体育館での準備作業が始まると、地元消防団の青年達が実に手際よく、体育館にシートとゴザを敷き、座布団とイスを並べていく。

[NPO法人滋賀県映画センター](#)からお借りした巨大スクリーンをステージのバトンに設置し、PAとプロジェクターも設営。

ほどなく、「島町の宝探し探検ツアー」参加者がぼつぼつと集まりだす。

午後3時。

ツアー、開始。

なんと、想定していた定員(20人)を大きく上回る30人(うち13人は子ども)が参加してくれて、随分にぎやかな「大名行列」が、しずかな島町内を練り歩いた。

島小学校の郷土教育／風水の龍穴地形／古い家並みと石垣／由緒ある神社とむべ伝説／清浄な池にすむホトケドジョウ／人知れずお地蔵様の世話をする老人／山々の巨岩信仰とご神木／放置竹林と獣害問題／北山田再生プロジェクト／6世紀の古墳群

たった60世帯の箱庭のようにコンパクトな農村集落のなかに、うずもれた「お宝」が実にたくさんある。

「お宝」をめくりながら、映画『ほんがら』のみどころや撮影時のエピソードなどもたくさん話した。100分間もの映画にでてくる全てのシーンが、この小さな空間の中だけで構成されていることに、改めて気づく。

とちゅう、地元の老人が、自分の家に代々伝わる伝説を熱く語ってくださった。

「口から口へ伝え聞くだけで、この在所には記録が何も残ってないんや。」

彼らの語りが、口伝えの伝説が、文字にならない貴重な「記録」なのだ。

プロフィール [[詳細](#)]



その他任意団体

ひょうたんからKO-MA

【地区】 滋賀県

【分野】

まちづくり

学術・文化・芸術・スポーツ

環境保全

【概要】

おうみ未来塾から生まれた個性派地域プロデューサー集団。

【連絡先】

<http://hyotan.sblo.jp/>

コラボレーション

[AAF2006-2007](#)

[～さざなみから、うねりへ](#)

www.asahi-artfes.net

カレンダー

[2008年3月](#)

S	M	T	W	T	F	S
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

-2008年

1月 [2月](#) 3月

+2007年

午後5時。

ツアー一行様が体育館に帰ってくると、中庭に TENT を張っていた地元有志が、待ちかねたように手づくりのおにぎりや豚汁をふるまった。地元の夏祭りや文化祭で、この手のサービスはお手の物だ。

よそからのお客さんと地元住民が、顔をあわせ、声を交わし、交流することができる。
お客さんにとっては、手のぬくもりが残るおにぎりや愛情たっぷりの豚汁は最高のご馳走。

地元有志にとっては、島町に足を運んでくださった方々の喜ぶ顔を見られるほかに、小遣い程度の現金収入も得られる。(もっとも、1食200円ぽっきりだったので原価すれすれにしかならなかっただろうが…。)

これぞ、コミュニティビジネスの原点ではなかろうか。

午後5時30分。

ぼちぼち観客が集まりだす。
顔なじみのおじいちゃん、おばあちゃん達も、いかにも楽しみな様子だ。

体育館後方に展示した写真や関連資料を熱心に見入る人もいる。
この日のためにわざわざ作っていただいた「ほんがら」の模型が誇らしげだ。

午後6時。

いよいよ開演！！
広い体育館の会場は、ほぼ目標通りの300人近いお客さんで埋まった。

司会は、もうすっかりお馴染みの [O](#) 氏。

実は、O 氏は同じ日の午後1時から滋賀県甲賀市で開催された、日本ブラジル交流100年を記念してのドキュメンタリー「PERMANENCIA～この国にとどまって～」上映会の MC を終えてから島町に駆けつけの強行軍。

主催者あいさつでは、H 氏節が炸裂。
DVD の売上が私たちひょう KOMA の活動を支えていることを PR し、理解を求めた。

来賓あいさつでは、近江八幡市長が島町にあついエールを贈ってくださった。

そして、照明が落とされ、地元島町在住のソプラノ歌手・磨谷真理さんによる童謡メドレーが始まった。のどかな農村の、暗くなった体育館に、澄み切ったソプラノが充満する。

午後6時30分。

歌が終わると同時に、映画が始まった。

思わず笑ったり、こぶしに力が入ったり。真剣に見入る300人。
松明に灯が灯ると、感嘆の聲が響いた。

長いようで、あっと言う間の100分間。

午後8時10分。

上映が終わると、[嘉田由紀子滋賀県知事](#)から届いたメッセージが朗読され、島町自治会長に手渡された。

そして、監督・長岡野亜氏のトーク。
監督が、映画に登場した老人たちを数名前に呼び出し、一言ずつ質問していく。
映画の中での生き生きとした表情とは裏腹に、大勢の観客を前にしてガチガチに緊張する老人達が、妙に愛らしかった。

[2007](#)、
[2006年](#)
[2005年](#)

ジャンル

- [全て表示](#)
- [遺言\(1\)](#)
- [ほんがら松明復活プロジェクト\(21\)](#)
- [子ども映画づくりワークショップ\(34\)](#)
- [アサヒアートフェスティバル\(1\)](#)
- [滋賀県近江八幡市\(0\)](#)
- [ひょうたんからKO-MA\(1\)](#)

MyBlog検索

検索

メニュー

- [イメージリスト](#)
- [訪問者リスト](#)

最新記事

- [『ほんがら』 完成記念上映会 満員御礼！ 無事終了！ 速報レポート](#) [03/11 07:21]
- [『遺言 YUI-GON ～未来への手紙～』 近江八幡 映像プロジェクト2008 始動!!](#) [02/29 12:18]
- [映画『ほんがら』の魅力～その2～【音楽】](#) [02/28 18:32]
- [映画『ほんがら』の魅力～その1～【監督】](#) [02/28 18:35]
- [特ダネ!! 上映会にスペシャルゲスト×2](#) [02/28 17:34]
- [『ほんがら』上映会場の下見をしました！](#) [02/28 09:17]
- [『ほんがら』上映会プレスリリース](#) [02/28 08:57]
- [ついに完成!! 「ほんがら」上映会3 / 8](#) [02/28 08:26]
- [□ □ □ 完成披露上映会 □ □ □](#) [12/06 13:47]
- [ついに最終回!! 第24回子ども映画づくりワークショップ開催](#) [12/06 11:08]

新着コメント

- [□ □ □ 完成披露上映会 □ □ □\(1\)](#)
- [おじゃもんくん](#) [12/22 11:26]
- [お徳ちゃん](#) [12/22 11:26]

長岡監督には、地元から「鮎寿司」がプレゼントされた。プレゼンターは、昨年の祭でお稚児さんをつとめたHくん。

地元の老人達が今でも毎年作っている鮎寿司のを撮影時にいただいてすっかり気に入っていた長岡監督、満面の笑み。

長岡監督の師匠・原一男氏も、愛弟子の記念上映会に駆けつけてくれ、感想を語ってくださった。自分の教え子だからひいきするわけではなく、映画として世界にも通用しうる、なかなか優れた作品だ、と。

最後に、AAFでいつもお世話になっている、アサヒビール芸術文化財団の加藤種男事務局長から、締めめのメッセージをいただいて、地域ぐるみの完成記念上映会は大成功のうちに幕を閉じた。

終了後一。

観に来てくださった友人・知人たちは、口をそろえて「感動した」「感激した」と嬉しい反応。観に来れなかった人々からは、早速「ぜひ改めて上映をしたい」との申し出も。

地元からも、

- ・正直、あそこまで出来上がっているとは思わなかった
- ・あんなに多く人が見にこられると思っていなかった
- ・毎日見ている島の風景も良いもんだな
- ・地元にながら磨谷真理さんの歌を聞くのは初めて、素晴らしい
- ・上映会の進行も良かった

といった声が聞こえてきた。映画を通じて、郷土のよさを再認識し、郷土に誇りをもってもらえたなら、こんなに嬉しいことはない。

「完成記念上映会」は終わりましたが、映画「ほんがら」は今誕生したばかり。まずは草の根レベルで上映会のネットワークを広げながら、「ほんがら」のムーブメントが滋賀に、全国に、世界に「火をつける」ことができれば、と夢は広がるばかり。

これまで関わってくださった皆様に深く感謝するとともに、これからもご支援・ご協力を賜りますよう、よろしくお願いします！！

この記事のURL：<http://www.voluntary.jp/weblog/myblog/405/1920572#1920572>

トラックバックURL：<http://www.voluntary.jp/weblog/TrackBackServlet/1920572>

[[コメントを見る・書く\(0\)](#)] [[トラックバック\(関連するBlog\)を見る\(0\)](#)] [更新日時:2008/03/11 07:21]

[[↑ ページトップ](#)]

2008/02/28のBlog

特ダネ!! 上映会にスペシャルゲスト×2

[09:17] [[ほんがら松明復活プロジェクト](#)]

[[スライドショウ](#)]

3 / 8 (土) の『ほんがら』上映会にスペシャルゲスト👉

👉👉👉 1

オープニングセレモニーで、島町が生んだソプラノ歌手・磨谷真理(とぎや まり)さんが生出演！素敵な独唱を披露していただけることになりました！！

👉👉👉 2

県内の農村地域の自然・文化・民俗にたいへん造詣が深い嘉田由紀子滋賀県知事に、上映会に先立って作品のDVDを観ていただき、とても感動した、とありがたいお言葉をいただきました！

■ [お侍にせしめました!! 「上吹雲」詳細決定!!\(2\)](#)

→ [おじゃもんくん](#) [11/23 20:59]

→ [くる未](#) [11/23 19:30]

■ [ブログ紹介 \(2\)](#)

→ [おじゃもんくん](#) [09/03 23:01]

→ [くる未](#) [09/03 11:16]

■ [ついにクランクアップ!! 第22回子ども映画づくりワークショップ開催!! \[ロケ7日目\]\(2\)](#)

→ [ひょうKOMA](#) [08/30 20:27]

→ [おじゃもんくん](#) [08/30 18:14]

■ [これがプロの演技力!! 第19回子ども映画づくりワークショップ開催!! \[ロケ4日目\]\(1\)](#)

→ [くる未](#) [08/29 23:33]

新着トラックバック

■ [大詰め!! 第21回子ども映画づくりワークショップ開催!! \[ロケ6日目\]\(1\)](#)

→ [8月25日子供映画作り](#)

[i...](#) [09/02 23:23]

■ [あと一息!! 第20回子ども映画づくりワークショップ開催!! \[ロケ5日目\]\(1\)](#)

→ [8月24日子供映画作り](#)

[i...](#) [08/30 11:19]

■ [これがプロの演技力!! 第19回子ども映画づくりワークショップ開催!! \[ロケ4日目\]\(1\)](#)

→ [8月23日子供映画作り](#)

[i...](#) [08/30 09:20]

ブックマークリスト

■ [ひょうたんからKO-MA\(ひょうKOMA\)](#)

ブックマーカーリスト

■ [ひょうたんからKO-MA\(ひょうKOMA\)](#)

■ [映像保存再生への道\(Hi-Geo\)](#)

■ [向島芸術計画2008\(向島芸術計画2007\)](#)

■ [東京・向島カレンダー\(mukoujima\)](#)

■ [仙台・定禅寺通りアート・プロジェクト「けやきに花を」\(regionalart\)](#)

リンク

■ [映画『ほんがら』オフィシャルサイト](#)

■ [権座水郷コンサート オフィシャルサイト](#)

上映会へのご来場は叶いませんでしたが、知事直筆のお手紙をいただけることになりました！！
こちらは、当日、映画上映後に披露・代読させていただく予定です。

この記事のURL:<http://www.voluntary.jp/weblog/myblog/405/1920173#1920173>
トラックバックURL:<http://www.voluntary.jp/weblog/TrackBackServlet/1920173>

[[コメントを見る・書く\(0\)](#)] [[トラックバック\(関連するBlog\)を見る\(0\)](#)] [更新日時:2008/02/28 17:34]

[[↑ ページトップ](#)]

2008/02/24のBlog

映画「ほんがら」の魅力～その2～【音楽】

[18:16] [[ほんがら松明復活プロジェクト](#)]

[[スライドショー](#)]

映画「ほんがら」のテーマ曲・挿入曲を手がけていただいたのは、東京在住の作曲家・大場陽子さん。

「GOTEN GOTENアート湯治祭」など、地方のアートイベントで「音楽のある空間づくり」をテーマに様々な活動を展開されている大場さんとは、AAFで知り合ったご縁がきっかけとなり、島町の現場も実際に訪れさせていただく機会に恵まれ、音楽をお願いすることになりました。これぞまさしく「ひょうたんから駒」！

限られた予算の中で、島町のイメージや長岡監督が描きたい世界を音楽で表現するために大場さんが選出したのは、「サクソフォン四重奏」。

長岡監督にとっても、自作映画に生音源をつけてもらうのは初の試みで、大場さんと長岡さんとで何十回もやりとりをしながら、試行錯誤の末にようやくできあがった音楽は、この映画になくてはならないすばらしいものになりました。

楽曲を演奏してくださったのは、[サクソフォン四重奏団「ストライク」](#)の皆様。
やわらかいサクスのハーモニーが、何ともいえない安心感をもたらしてくれます。

この記事のURL:<http://www.voluntary.jp/weblog/myblog/405/1920192#1920192>
トラックバックURL:<http://www.voluntary.jp/weblog/TrackBackServlet/1920192>

[[コメントを見る・書く\(0\)](#)] [[トラックバック\(関連するBlog\)を見る\(0\)](#)] [更新日時:2008/02/28 18:32]

[[↑ ページトップ](#)]

2008/02/20のBlog

映画「ほんがら」の魅力～その1～【監督】

[17:35] [[ほんがら松明復活プロジェクト](#)]

[[スライドショー](#)]

これからこのブログ上で、映画「ほんがら」の魅力を少しずつご紹介して行きたいと思います。

まずは、監督・撮影・編集の三役をひとりでこなした長岡野亜監督の＜視点＞。

長岡さんは、ドキュメンタリー映画界の鬼才・原一男氏に師事する、京都在住の若手映像作家です。

島町ならではの四季折々の美しい自然や、日常の素敵な風景が、映画の中にもふんだんに登場します。長岡監督はもともとスチール写真の出身だけに、ちょっとした風景を美しく切り取る才能がいかに発揮されています。

一方、インタビューでは、時間をかけてひとりひとりの老人たちとの人間関係を築き上げ、笑顔でホンネを語るほのぼのとした雰囲気の中にも、示唆深いメッセージを見逃さず、丹念に拾い集めていく根気強さと視点の鋭さが光っています。

撮影も中盤頃になると、長岡監督は行く先々の家で歓待され、野菜をもらって帰ったり、時には泊めもらったりしていました。これもひとえに、長岡さんの人がらと根気強さの賜物でしょう。

■ [権座水郷コンサート 報告ブログ](#)

■ [ひょうたんからKO-MAブログ](#)

■ [みるくと gokigen生活](#)

アクセス数

昨日のアクセス数:143件

今日のアクセス数:86件

総アクセス数:19198件

3 / 8 の上映会には、もちろん長岡監督本人もいらっしゃいます。
映画上映後、監督によるトークもあります。おたのしみに！！

この記事のURL : <http://www.voluntary.jp/weblog/myblog/405/1920191#1920191>

トラックバックURL : <http://www.voluntary.jp/weblog/TrackBackServlet/1920191>

[[コメントを見る・書く\(0\)](#)] [[トラックバック\(関連するBlog\)を見る\(0\)](#)] [更新日時: 2008/02/28 18:35]

[[↑ ページトップ](#)]

2008/02/18のBlog

'ほんがら'上映会場の下見をしました！

[22:01] [[ほんがら松明復活プロジェクト](#)]

[[スライドショウ](#)]

上映会場は、映画の舞台となった島町にある市立島小学校の体育館。



300人、なんとか入れそう。

床にシートを敷き、前列は座布団に座って、後列はパイプ椅子に座っていただきます。

問題は、寒さ対策....。

農業倉庫用の温風器で事前に室内を暖めておきますが、上映中は灯油ストーブ数台でガマンしていただくことになります。

当日は防寒着・カイロ・上履きなどをご持参くださいね！！

また、体育館の後方には、パネルで仕切って「ほんがら松明」や映画制作に関わる様々な特別展示を行う予定です。

「ほんがら」のミニチュアが展示される、とのウワサも？！

映像を映写するステージは、ちょっとレトロな緞帳があっていい感じ。



備え付けのスクリーンも年季が入ってこの映画にはもってこい...
なのですが、今回の作品は4:3の画面なので、この横長のスクリーンだとかなり小さくなってしまうのが難点。

そこで、急きょ[NPO法人滋賀県映画センター](#)さんをお願いして、バトンに吊るす大型スクリーンをお借りすることになりました

音響・照明もテストしました。

カーテンを閉めれば暗さはバッチリ。

音も、心配したほど残響はなく、セリフもまずまずはっきり聞き取れます。

当日が楽しみ!!

この記事のURL : <http://www.voluntary.jp/weblog/myblog/405/1920172#1920172>

トラックバックURL : <http://www.voluntary.jp/weblog/TrackBackServlet/1920172>

[[コメントを見る・書く\(0\)](#)] [[トラックバック\(関連するBlog\)を見る\(0\)](#)] [更新日時: 2008/02/28 09:17]

[[↑ ページトップ](#)]

2008/02/15のBlog

'ほんがら'上映会プレスリリース

[08:51] [[ほんがら松明復活プロジェクト](#)]

[[スライドショウ](#)]

本日付けで、滋賀県庁と近江八幡市役所の記者クラブにプレスリリースした資料を、PDFで掲載しておきます。



[プレスリリース20080215.pdf](#)

この記事のURL : <http://www.voluntary.jp/weblog/myblog/405/1920170#1920170>

トラックバックURL : <http://www.voluntary.jp/weblog/TrackBackServlet/1920170>

[[コメントを見る・書く\(0\)](#)] [[トラックバック\(関連するBlog\)を見る\(0\)](#)] [[更新日時:2008/02/28 08:57](#)]

[[↑ ページトップ](#)]

2008/02/10のBlog

『遺言 YUI-GON ～未来への手紙～』 近江八幡 映像プロジェクト2008 始動!!

[22:39] [[遺言](#)]

[[スライドショー](#)]

昨年の「子ども映画づくりワークショップ2007 in 近江八幡」に続き、原一男監督とのコラボレーション企画第2弾がはじまります!!



今年もめでたくアサヒ・アート・フェスティバル参加企画として採択されました!!

遺言メッセージ&制作スタッフ募集中です!

(以下、転送・転載歓迎!!)

● ■ ○ ▼ ● ■ ○ ▼

『遺言 YUI-GON ～未来への手紙～』 近江八幡 映像プロジェクト2008

● ■ ○ ▼ ● ■ ○ ▼

あなたの人生にひとつだけ、思い残すこと。

「死ぬ前に、あれだけはやっておきたい!!」

そんな願いがかなえられる...かもしれません!

～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～

【企画概要】

人生の数だけ、ドラマがある。年輪の数だけ、記憶がある。

ひとりひとりのお年寄りのなかにひっそりと眠っている

数々の智慧・文化・郷土・人情・喜怒哀楽の思い...

それらを丁寧に掘り起こし、次の世代に伝えていきたい。

そこで、お年寄りの「これだけはどうしてもやって(言って)

おきたいこと」などを『遺言』として募集し、寄せられた

『遺言』に書かれた願いをひとつずつ成就していく様子を

映像に収め、1本のドキュメンタリー映画を制作する

市民参加プロジェクトを、映画監督・原一男氏と一緒に

実施します。

【遺言メッセージ募集!】

近江八幡市に縁のある満70歳以上の方を対象に、ユニークな「遺言」を募集します。

やり残した事、後悔していること、もう一度会っておきたい人など、その理由や思いもそえて出来るだけ詳しくご記入ください。字数制限や様式は特にありません。ご本人の同意があれば、他薦でも結構です。

郵送・FAXまたは電子メールで、住所・氏名(ふりがな)・年齢・性別・電話番号を必ず添えて下記まで。

「遺言メッセージ」応募一次締切 3/6(木)！！

応募するとどうなるの？

3月以降、応募いただいたご本人をスタッフが取材させていただき、『遺言』に託された願いを成就するお手伝いをしながら、その様子を撮影し、映画作品として後日上映します。費用はかかりません。完成作品のDVDももれなく進呈致します。

【ボランティアスタッフ募集！】

映画「ゆきゆきて神軍」の原一男監督と一緒に、映画づくりを楽しみませんか？

『遺言』を題材に、企画～取材～撮影～編集の各プロセスを実践しながら体験できます。原監督の映画哲学を身近で学べます。地域のお年寄りとふれあい、生の声を聞くことができます。

“映画づくりに関わってみたい”という意欲がある方なら、年齢・性別・経験を問わず大歓迎!!
まずは、下記までお気軽にお問合せください。

【ご応募・お問合せ先】

〒523-0892滋賀県近江八幡市出町645-4 マルチメディアセンター宛
TEL:0748-31-0800 FAX:0748-31-0801
Mail:yuigon@gonza.xii.jp

- 主会場： マルチメディアセンター(近江八幡市出町645-4)
- 参加料： 無料
- メイン講師： 原一男監督(映画監督・大阪芸術大学教授)
- 主 催： 地域プロデューサーズひょうたんからKO-MA
- 共 催： マルチメディアセンター指定管理者CM2グループ
- 特別協賛： アサヒビール株式会社
- 助 成： 財団法人アサヒビール芸術文化財団

【 イベント情報 】

イベント名：「遺言メッセージ」と「映画制作スタッフ」募集！
[[URL](#)]
開催期間：2008年1月10日(木) ～ 2008年3月6日(木)
時 間：
場 所：滋賀県・近江八幡市
最寄り駅：JR近江八幡駅

「ゆきゆきて神軍」の原一男監督と一緒に映画をつくろう！！



[\[↑ ページトップ \]](#)

2008/02/09のBlog

ついに完成!! 「ほんがら」上映会3 / 8

「19:28」「ほんがら松明復活プロジェクト」

[スライドショー]



農村再生ドキュメンタリー映画「ほんがら」
完成記念上映会

- 「半世紀前の青年たち」が
本当につたえたかった 未来への遺言(メッセージ) -

滋賀県近江八幡市島町。琵琶湖のほとりに位置する静かな農村集落。この地域に千年以上も続く春の例大祭で、地元の老人たちが、「ほんがら松明（たいまつ）」を、約50年ぶりに復活させました。

私たちは、映画監督 長岡野亜とともに、2006年6月から1年以上かけて老人たちが一人一人に密着したドキュメンタリー映画づくりに取り組んできました。「ほんがら松明」の作りかたを憶えているのは、地元で生まれ育った70代以上の古老のみ。カメラに向かって老人たちが発する言葉からは、単なる懷古主義ではなく、島町の未来へ託すメッセージが伝わってきます。郷土へのゆるぎない誇りと愛情。そして、その思いに応えるかのように、動き始めた現代の青年たち……。

■と き:2008年3月8日(土)

開場 17:00 開演 18:00 ~ 終了 20:30

■ところ:近江八幡市立島小学校体育館

JR近江八幡駅北口から路線バス「長命寺線」で約15分、「渡合」バス停下車すぐ
県道25号線（湖周道路）「渡合橋北詰」交差点から北へ200m

【入場無料】どなたでもご覧いただけます。

同日15:00～、映画の舞台となった島町のミニ探検ツアーも同時開催
(ツアー参加者のみ要事前予約)

当日は、防寒着＆スリッパをご持参ください♪

少子化やライフスタイルの変化により、各地で祭などの伝承行事の存続が危ぶまれるなか、単に地域資源をアーカイブ化するのではなく、積極的に地域とかわかり、映像とカメラのちからを借りて老人たちの地元に対する「誇り」を若い世代にも伝え、地域住民が自ら伝統継承・地域再生の道を

- 監督・撮影・編集＝長岡野亜
- 音楽＝大場陽子／村田聡
- 出演＝近江八幡市島町の皆様
- 特別協力＝原一男
- 企画・制作＝ひょうたんからKO-MA
- 特別協賛＝アサヒビール株式会社
- 助成＝財団法人アサヒビール芸術文化財団

または、TEL (0748) 31-0800 (マルチメディアセンター) まで。

■後援:滋賀県、滋賀県教育委員会、近江八幡市、近江八幡市教育委員会、島学区自治連合会

イベント名: 「ほんがら」完成記念上映会 [[URL](#)]
開催期間: 2008年3月8日(土)
時 間: 18:00 - 20:30
場 所: 滋賀県・近江八幡市立島小学校体育館
最寄り駅: JR近江八幡駅



[\[↑ ページトップ \]](#)

□ ■ □ 完成披露上映会 □ ■ □

[スライドショー]

固定シート100席の会場は、ぎっしり立ち見が出るほどの超満員。
感無量です!!
これまで支えてくださったたくさんの皆様、本当に本当にありがとうございました!!



主催者による経緯説明、来賓挨拶(近江八幡市教育委員会教育長)に続いて、スタッフ・出演者など関係者全員が前に出てご挨拶。

そして早速、映画「タイムカプセル・アドベンチャー」の上映です!!
当初15～20分の短編、と言っていたのが、出来てみれば、40分を超える大作に。
観客の反応もよく、見ごたえ十分の40分でした。

本編の上映が終わると、子どもスタッフと原監督がステージに上がっての舞台挨拶。
原監督からの投げかけに、子ども達は堂々と受け答え。感動!!

舞台挨拶が終わると、今度は映画制作の過程をドキュメンタリーカメラが追った「メイキングビデオ・タイムカプセルアドベンチャーができるまで」を上映。こちらは大人スタッフのみによる制作ですが、20分の力作。子ども達がどのように映画に向きあい、原監督がどう子ども達と向き合っていたかなど、現場の臨場感を垣間見れる作品です。



メイキングの上映後、最後に子どもスタッフ一人ひとりから原監督へ花束の贈呈。
そして、原監督自身から、来年・再来年のおおいなる構想が語られ、上映会は大盛況のうちに幕を閉じることができました。

さて、上映会終了後、2階の部屋に会場を移してのささやかな完成祝賀パーティー。
我らが加藤種男氏も駆けつけてくださり、アサヒスーパードライで乾杯の音頭。



短時間でしたが、集まってくださった大勢の人たち同士、にぎやかな交流ができました。

さて、上映会・祝賀会も無事終わり、スタッフと家族だけが車に分乗して一路、八幡山へ!!

映画にも登場した豊臣秀次像のすぐ近くに、サクラの木を記念植樹しました。



そして、木の前には、子どもスタッフが持ち寄った10年後の自分たちへの手紙や記念の品々を入れたホンモノのタイムカプセルを埋設!!

10年後には、この木も、子ども達も、立派に成長して、また再び再会できる—。
今から楽しみです!!

そして、これがホントに最後の最後。
市内のレストランで慰労昼食会。

みんなで美味しいランチをいただきながら、別れを惜しむ最期のひととき。

ホント、皆様おつかれさまでした!!



この記事のURL : <http://www.voluntary.jp/weblog/myblog/405/1918355#1918355>

トラックバックURL : <http://www.voluntary.jp/weblog/TrackBackServlet/1918355>

[[コメントを見る](#)・[書く\(1\)](#)] [[トラックバック\(関連するBlog\)を見る\(0\)](#)] [更新日時: 2007/12/06 13:47]

[[↑ ページトップ](#)]

ついに最終回!! 第24回子ども映画づくりワークショップ開催

[22:24] [子ども映画づくりワークショップ]

[スライドショー]

長かった、本当に長かったこのワークショップも、とうとう最後の日がやってきました。

前回から随分間があき、久しぶりに再会するメンバー。
なんだか撮影の時よりひとまわり身体も成長して、たくましくなった感じ。

実はこの間、大人スタッフサイドで、細かな編集作業と音楽づくりを進めていました。

今日は、撮影でうまく音が撮れなかった箇所のアフレコと、仕上げの編集作業です。



まず、マルチメディアセンターのお隣さん、HOT!TV(近江八幡ケーブルネットワーク株式会社)さんの番組収録スタジオをお借りしてのアフレコです。

カメラ・マイクの扱いはもう手馴れたもの。見守る監督の表情も和やかです。

難しかったのは、笑い声の収録。自然な笑い声を出すのは、大人でも難しいですね。そこで、手の空いている子どもスタッフが一人ずつ知恵を絞って何とか役者を笑わそうと必至のパフォーマンス!!

続いて、マルチメディアセンターに戻って、編集と音入れの作業です。

撮影時を思い出しながら、パソコンと編集ソフトを使ってカチンコに書いてあるカットNoに従って順につないでいった映像を試写。

続いて、その映像に音楽と効果音(セミの声、太鼓の音など)を乗せて、再び試写。



本当は、さっき収録したアフレコ音声もこの場で入れていきたかったのですが、パソコンが不調で残念ながらこれは断念。後日大人たちでやることに....

さあ、あとは、泣いても笑っても上映会を残すのみ!!

この記事のURL : <http://www.voluntary.jp/weblog/myblog/405/1918328#1918328>

トラックバックURL : <http://www.voluntary.jp/weblog/TrackBackServlet/1918328>

[[コメントを見る・書く\(0\)](#)] [[トラックバック\(関連するBlog\)を見る\(0\)](#)] [更新日時:2007/12/06 11:08]

[[↑ ページトップ](#)]

2007/10/21のBlog

お待たせしました!! 「上映会」詳細決定!!

[01:01] [子ども映画づくりワークショップ]

[スライドショー]

当初の予定より随分遅くなりましたが、今回の子ども映画づくりワークショップの集大成、「完成披露上映会」の開催が、下記のとおり決定しました。

11/23 9:30 ~ 於 G-NETしが

詳しくは、[コチラ](#)をご覧ください



入場無料。
皆様、お気軽にお越しください。



【 イベント情報 】

イベント名: 子ども映画WS「タイムカプセル・アドベンチャー」
完成披露上映会 [[URL](#)]

開催期間: 2007年11月23日(金)

時 間: 09:30 - 12:00

場 所: 滋賀県・近江八幡市 (G - NETしが視聴覚室)

最寄り駅: JR近江八幡駅(南口より徒歩10分)

コメント: 「子ども映画づくりワークショップ2007 in 近江八幡」で、原一男監督による指導のもと、地元小中学生らによって制作された映画「タイムカプセル・アドベンチャー」の完成披露上映会を開催します。

この記事のURL: <http://www.voluntary.jp/weblog/myblog/405/1917178#1917178>

トラックバックURL: <http://www.voluntary.jp/weblog/TrackBackServlet/1917178>

[[コメントを見る・書く\(2\)](#)] [[トラックバック\(関連するBlog\)を見る\(0\)](#)] [更新日時: 2007/10/21 01:26]

[[↑ ページトップ](#)]

2007/09/01のBlog

エンディング収録!! 第23回子ども映画づくりワークショップ開催

[00:39] [[子ども映画づくりワークショップ](#)]

[[スライドショー](#)]

撮影ロケは何とかギリギリ夏休み中に終えることができましたが、まだ、ポストプロダクションの作業が残っています。

この日は、映画のエンディング画面で使用する一言メッセージと、メイキングで使用するインタビューをひとりずつ収録しました。

室内で撮るのは面白くないので、マルチメディアセンターの屋上に上がり、ロケ地としても使った八幡公園などがある「八幡山」をバックにしての撮影です。



ひとりずつインタビューを受けている間、ほかの子ども達は、映画のタイトルなどの決め事を話し合いました。

本番ロケと違って、撮影現場は和気あいあい。
子ども達のカメラさばき、マイクさばきは、もう手馴れたものです。

一方、映画のタイトルの方は、なかなか意見がひとつにまとまりませんでした。



...次回は、いよいよワークショップ最終回。
編集、アフレコ、音楽入れの最終ステップです。

この記事のURL: <http://www.voluntary.jp/weblog/myblog/405/1917174#1917174>

トラックバックURL: <http://www.voluntary.jp/weblog/TrackBackServlet/1917174>

[[コメントを見る・書く\(0\)](#)] [[トラックバック\(関連するBlog\)を見る\(0\)](#)] [更新日時: 2007/10/21 00:54]

[[↑ ページトップ](#)]

2007/08/28のBlog

ブログ紹介

[23:56]

[[スライドショー](#)]

「子ども映画づくりワークショップ」の撮影ロケに、ボランティアスタッフとしてご参加いただいたくる未さんとおじゃもんさんが、そのときの様子などをご自身のブログに書いてくださいましたので、ここに紹介させていただきます。くる未さん、おじゃもんさん、どうもありがとうございました！！

みるくと gokigen生活

<http://ameblo.jp/gokigenmilk/theme-10004186808.html>

おじゃもんくんのブログで、あなたもハッピー

<http://blogs.yahoo.co.jp/ojamooooon/49037689.html>

この記事のURL : <http://www.voluntary.jp/weblog/myblog/405/1915673#1915673>

トラックバックURL : <http://www.voluntary.jp/weblog/TrackBackServlet/1915673>

[[コメントを見る・書く\(2\)](#)] [[トラックバック\(関連するBlog\)を見る\(0\)](#)] [更新日時: 2007/08/30 20:30]

[[↑ ページトップ](#)]

2007/08/26のBlog

ついにクランクアップ!! 第22回子ども映画づくりワークショップ開催!!【ロケ7日目】

[22:50] [[子ども映画づくりワークショップ](#)]

[[スライドショー](#)]

いよいよロケ最終日!!

今日は、琵琶湖岸にそびえる津田山(標高424m)の山頂にあるご神岩での撮影です。

隣接する長命寺山のふもとの駐車場から、機材・お茶・ビール箱など大量の重い荷物を手分けして担ぎ、山頂まで1時間近くかけて歩いて登ります。

暑さ、湿気、荷物の重さに苦しめられながらも、みんな無事登頂。

それにしても、こんなハードなロケを敢行した映画づくりワークショップは前代未聞でしょう。



山頂に着いて一休みしたら、祠とご神岩に手を合わせて、早速セッティング開始。

腐りかけた鳥居に、用意してきた「額」を恐る恐る取り付け、ワラ縄を編んでしめなわをつくり、ごへいをつけて岩に取り付け、持って上がったブリキ缶に木の葉を詰めていぶし、雰囲気を出すための煙をたきます。

用意ができれば、早速撮影開始。



「今日中に全部撮り切れなかったら、もう一度山登りしないといけなくなるぞ!」
このひとことで、みんなが奮い立ちます。

...と、そこへ、白装束を着た2人の老女が。

月に一度、ここへお参りに来ているという。お参りには1時間ほどかかるらしい。

そこで、待っている間に弁当を食べ、少しだけ山を下りて、山道を登るシーンを先に撮りました。

そして再び山頂へ。

4人が宝物を見つけるクライマックスのシーンです。
高まる緊張感を演出するため、今までにも増して細かいカット割り。
当然、撮影にも時間がかかります。

そのうち、だんだん日が傾き、山にこだまするセミの声も、アブラゼミからヒグラシへと変わってきました。

早くしないと日が暮れてしまう！撮影ができなくなってしまう！
まさに時間との戦い。そんな状況にあっても、妥協は許さず、そのぶん今までにも増して集中力を高め、息をもつかぬ勢いで次々とカットを埋めていく作業が続きます。

そして、何とかギリギリ、暗くなる前に撮りきることができました！！

下山したのは午後6時半。
マルチメディアセンターに戻ってきたのは7時前。

もし、当初の予定通り22日にこの登山ロケをやっていたら、原監督の指摘どおり、きっと1日では撮りきれなかったでしょう…。

センターでは、撮影の無事終了を記念して、ささやかな「乾杯」をしました。

7日間ぶっ通しの過酷な撮影。
心身ともに全てを出しきった一週間。
子ども達も、原監督も、スタッフも、いやはや、皆様本当におつかれ
さまでした！！



何より、7人全員が大きなけがもなく、脱落することもなく、最後まで元気に頑張ってくれたことが嬉しいで
す。

この経験が彼らの将来にどう影響するか分かりませんが、このなかから一人でも、映画づくりの仕事に携
わって行く人が生まれたら、原監督もきっと本望でしょう！

この記事のURL : <http://www.voluntary.jp/weblog/myblog/405/1915672#1915672>

トラックバックURL : <http://www.voluntary.jp/weblog/TrackBackServlet/1915672>

[[コメントを見る・書く\(2\)](#)] [[トラックバック\(関連するBlog\)を見る\(0\)](#)] [[更新日時:2007/08/30 00:02](#)]

[[↑ページトップ](#)]

2007/08/25のBlog

大詰め!! 第21回子ども映画づくりワークショップ開催!!【ロケ6日目】

[22:40] [[子ども映画づくりワークショップ](#)]

[[スライドショー](#)]

長かった撮影も残すところあと2日。

今日は、ふたたび喜多利邸で、映画のラストシーンの撮影です。
二階の一室の窓を締め切り、照明をたいて、蒸し風呂のような暑さ
の中での撮影。

それが終わると、母親役の役者4人を子ども達が撮影。
スタッフのチームワークもよくなって、監督の怒鳴り声もあまり聞か
れなくなってきた。



イレはいふてまゐりた。

予定のシーンを全て撮り終えたあと、ワークショップに参加した7人の子供達に、一人ずつカメラの前で一言PRをしてもらいました。

さあ、明日はいよいよ最終日。
過酷な登山ロケです。

この記事のURL : <http://www.voluntary.jp/weblog/myblog/405/1915669#1915669>

トラックバックURL : <http://www.voluntary.jp/weblog/TrackBackServlet/1915669>

[[コメントを見る・書く\(0\)](#)] [[トラックバック\(関連するBlog\)を見る\(1\)](#)] [更新日時:2007/08/29 22:49]

[[↑ ページトップ](#)]

2007/08/24のBlog

あと一息!! 第20回子ども映画づくりワークショップ開催!!【ロケ5日目】

[21:37] [[子ども映画づくりワークショップ](#)]

[[スライドショー](#)]

今日は、まず朝一番に八幡旧市街の伝統的な町並みが残る伝建地区の新町通りでの撮影(7日の撮り直し)、次にOさんの自宅にて大人夫婦役の撮影(8日の撮り直し)、さらにそのあと、八幡公園の取り残しのシーンの撮影、というハードスケジュールでした。



撮り直しのシーンは、みんな一度やっているだけあってセッティングもすばやくでき、かなり時間を有効に使えるようになってきました。

とはいえ、ちょっとでも気が緩んだり、当然用意すべきことができてなかったりすると、原監督のゲキが飛びます。

「現場は時間との勝負。一分一秒も無駄にするな。」

「映画づくりは1割のセンスと9割の体力が勝負。体力がないと映画なんかつくれない。」

その言葉どおり、汗だくになりながら、全身と頭脳をフル動員して、現場を組み立て、次々と指示を出す原監督。還暦を過ぎているとはとても思えない、若々しいパワーとエネルギーが常に全身からあふれ出しています。

たかが(失礼)子ども相手のワークショップに、ここまで全力投球してくださる原監督の映画人魂に、ただただ敬服。

子ども達も、そんな原監督の姿から、きっと何物にも代え難い何かを学んでくれていることでしょう。

今日で、タイムリミット内での撮影完了に、何とか目処がたちました。
ゴールはもうすぐだ!!

この記事のURL : <http://www.voluntary.jp/weblog/myblog/405/1915667#1915667>

トラックバックURL : <http://www.voluntary.jp/weblog/TrackBackServlet/1915667>

[[コメントを見る・書く\(0\)](#)] [[トラックバック\(関連するBlog\)を見る\(1\)](#)] [更新日時:2007/08/29 22:40]

[[↑ ページトップ](#)]

2007/08/23のBlog

これがプロの演技力!! 第19回子ども映画づくりワークショップ開催!!【ロケ4日目】

[21:17] [子ども映画づくりワークショップ]

[スライドショウ]

今日のロケ地は、八幡堀に面する近江商人屋敷のひとつ、喜多利邸。

現在は、アートNPOのエナジーフィールドさんが事務所として利用しておられるのを、お願いして使わせていただきました。



今日の目玉は、劇団から参加して下さった役者さんたちの演技力。

原監督が、子ども達に「いいか、これからこの人がプロの俳優さんっていうのはどういうものか見せてくれるからな、しっかり見とけよ!」と前振りをした上で、かなり複雑なアドリブの演技を要求。それに対し、役者さんは苦笑いしながらも、即座に監督の要求に応えていく。それも、すごく楽しそうに演技をしている。

やはり、ホンモノを目の前で見る、という体験は、特に子どもにとっては、新鮮で、強烈で、清々しい、重要な成長のプロセスなんだろうな、と直感しました。

それにつけても、近江八幡はロケーションがいいですね。

ホフマン窯といい、喜多利邸といい、これだけのロケーションが身近なところにあるのは、本当に幸せなことだと、改めて感じました。

右の写真は、八幡堀で弁当を食べながら和んでいるひとコマ。



この記事のURL : <http://www.voluntary.jp/weblog/myblog/405/1915663#1915663>

トラックバックURL : <http://www.voluntary.jp/weblog/TrackBackServlet/1915663>

[[コメントを見る・書く\(1\)](#)] [[トラックバック\(関連するBlog\)を見る\(1\)](#)] [更新日時:2007/11/17 09:45]

[[↑ ページトップ](#)]

2007/08/22のBlog

みんなガンバレ!! 第18回子ども映画づくりワークショップ開催!!【ロケ3日目】

[20:59] [子ども映画づくりワークショップ]

[スライドショウ]

今日で撮影は3日目。

早朝から日暮れまで、猛暑の中での連日の撮影に、子ども達にも大人にも、顔に疲れが見え始めてきました。

今日は、本当は山頂ロケの予定でしたが、以下の理由で、予定を変更して、20日に撮りきれなかった八幡公園での撮影の続きをやったほうがいい、と原監督からアドバイスが。



・午後から天候がぐずれそう(山の上で雨に降られたらひとたまりもない)

・経験の浅い子ども達やスタッフばかりでの撮影なので、できる限り「順撮り」するのがベター

・山頂ロケは子ども達の演技力が要求されるクライマックスのシーンでもあり、1日で撮りきってしまわないといけないタイトな現場でもあることから、子ども達がもっと撮影に慣れる撮影終盤に回した方がいい

今日はみんな山登りの用意をしてきていましたが、キャスティングのミスで大失敗をしているだけに、ここは絶対に経験豊富な原監督の判断を尊重して、八幡公園の撮影に切り替えることに。

しかして、原監督のこの判断は極めて正しかったことが、後々証明されることに...



前回、1 / 3 で終わっていた八幡公園でのシーン、2 / 3 ほど撮り終えたあたりで、雲行きが怪しくなり、雷も鳴り出したので、急いで撤収。センターに帰ってきた途端、ものすごい大雨。もし、山に登っていたら、今頃...

とはいえ、またしても完了しなかった八幡公園ロケ。
だんだんお尻に火がついてきました。

この記事のURL : <http://www.voluntary.jp/weblog/myblog/405/1915661#1915661>

トラックバックURL : <http://www.voluntary.jp/weblog/TrackBackServlet/1915661>

[[コメントを見る・書く\(0\)](#)] [[トラックバック\(関連するBlog\)を見る\(0\)](#)] [更新日時: 2007/08/29 22:39]

[[↑ ページトップ](#)]

2007/08/21のBlog

またまた事件発生!! 第17回子ども映画づくりワークショップ開催!!【ロケ2日目】

[20:36] [[子ども映画づくりワークショップ](#)]

[[スライドショー](#)]

今日のロケ地は、旧中川煉瓦製造所跡地にある「ホフマン窯」。
「ホフマン窯」とは、連続的・効率的な煉瓦の焼成を可能とするためドイツで開発された巨大な窯で、現在日本には4基しか残っていない貴重な近代化遺産。



持ち主の許可と協力を得て、ここを「秘密のトンネル」に見立てた撮影をするのが今日の目的。今日は、主に大人役が演じることになります。....が!! ここでまたしても問題が。

大人役をやってくれると言っていた学生のうち1人が、いつまで待っても来ない。連絡も取れない。おーい!!! (大汗)

セティングも打合せも終わってるのに、役者待ちで貴重な時間が過ぎていく...

「このままでは今日の撮影ができなくなる！」

しかし、今から頼んですぐすっ飛んで来てくれる役者なんているはずもない。

最終手段。もう、他に選択肢はない。
この企画の主催者で、マネジメントも現場での小間使いもやらなきゃいけない私が、急きょ出演することに。
これだけは避けたかった～。

役者経験ゼロ。声は小さいし度胸も小さい私に、果たしてこの大役が務まるのか? !



...というわけで、以後、私が出演する時は、ほとんど写真撮れてません。ごめんなさい。

さて、今日の撮影で面白かったのは、「発煙筒」。

「不思議なトンネル」の演出効果を出すために不可欠な「ケムリ」を出すため、気密試験や防災訓練などで使われる無害無臭の発煙筒を購入。

ホフマン窯の中で発煙筒を焚き、モウモウと煙るトンネルの中での一発勝負の撮影。
演出効果だけでなく、撮影のオモシロさを子ども達に印象づけるツールとしても、強烈なインパクトのある撮影現場でした。

ホントいろいろありましたが、この日は、予定していたシーンを何とか全て撮り終えることができました。よかった～

この記事のURL : <http://www.voluntary.jp/weblog/myblog/405/1915660#1915660>

トラックバックURL : <http://www.voluntary.jp/weblog/TrackBackServlet/1915660>

[[コメントを見る・書く\(0\)](#)] [[トラックバック\(関連するBlog\)を見る\(0\)](#)] [[更新日時:2007/08/29 22:39](#)]

[[↑ページトップ](#)]

2007/08/20のBlog

心機一転!! 第16回子ども映画づくりワークショップ開催!!【ロケ1日目】

[20:17] [[子ども映画づくりワークショップ](#)]

[[スライドショウ](#)]

お盆休みも終わり、撮影も仕切りなおし。改めて、今日が初日の撮影です。
8/7～8の2日間は、いい実践練習になった、と前向きに考えて。

さて、今日は八幡山のふもとにある八幡公園での撮影です。
今日の出演者はワークショップの子ども達。子ども達が出演するときは、人手が足りないのでマイクやレフなどは大人も手伝います。



近江八幡のまちを拓いた豊臣秀次公の銅像に見守られながら、ひとつひとつのカットを丁寧に撮影していきます。

冒険もののストーリーなので、映画を面白く魅せるためにはどうしても細かいカット割りが必須。

子ども達が考えたシナリオをベースに、原監督が、その場で緻密に計算された人の動きやカメラアングルを細かく指導します。たった数秒のカットを撮るのにも、ものすごく時間がかかります。



「まあ、こんなもんでいいや」とちょっとでも妥協してしまうと、それが実際に映像になったとき、「あの時ももう少し頑張っておけばよかった」と必ず後悔する。だから、絶対に安易な妥協はしない。その場でできる限りのことを精一杯やって、後悔を残さないようにしよう。」

原監督は何度もそう繰り返し、子ども達がベストを尽くすよう何度も盛り立て、納得がいけないと何度でも撮り直します。

そんななか、役者も、カチンコ係も、カメラ係も、「よいい、ハイ!」の掛け声をかける監督役も、最初はぎこちなかったのが、徐々に慣れてきたのか、いちいち言われなくても少しずつ自主的に動けるようになってきたし、動きも少しずつサマになってきました。



ーと、時間は無様に過ぎ、午後の光が木々の間を透る。

...でも、時間は無情に過ぎ、気がつけばもう宵の口。

まだ、八幡公園で撮る予定のシーンの1 / 3ほどしか撮れていません。



この調子で、果たしてクランクアップできるのでしょうか？！

この記事のURL:<http://www.voluntary.jp/weblog/myblog/405/1915659#1915659>

トラックバックURL:<http://www.voluntary.jp/weblog/TrackBackServlet/1915659>

[[コメントを見る・書く\(0\)](#)] [[トラックバック\(関連するBlog\)を見る\(0\)](#)] [[更新日時:2007/08/29 22:38](#)]

[[↑ ページトップ](#)]

[前のページ](#) | [次のページ](#)

Copyright © 2005-2007 NTT DATA CORPORATION

シナリオメモ 20070305 改定 0322[1]

(製作者側の意図を伝えるための演出)

著名人の言葉を挿入する？

■ テーマ (誰に何をどう伝える？)

- ・ 誰に？ 農村や商店街などで、「地域」に行き詰まりを感じている人
現代社会の 疑問を感じている人
都会で普通に暮らしているが、 人
地元住民 (それぞれの世代) で、祭や共同体への意識が低い人
(子どもを祭に参加させない母親 + 外に出てしまった島町出身者)
- ・ 何を？ 地域の自然や信仰と日常生活とがつながっていない
青年世代が地域とつながる場がない
行き過ぎた個人主義で、地域コミュニティが希薄化している

・ どう？

「共同体」の大切さ・価値 → 郷土愛、地域への誇り

→ どう聞き出すか？

(例：よその有名な祭を見るより、地元の祭に参加するのが楽しい、
田んぼのある風景が好き、住宅街にはなってほしくない、
神社は地域でまもってきた、みんなで守るものがあるからいい、)

→ どう表現するか？

(例：子ども達に「わたしの島町」を聞く < 郷土教育 > ?、
50 年前、現在、50 年後の島町を比較する)

住む = 地域を好きになる → 地域に誇りを持つ → 住むことを楽しむ

■ オープニング

- ・ 田谷さんの権現山登山
- ・ 江州音頭 (イサムさん) → 島町 & ほんがら松明バージョンを唄ってもらう？
- ・ 滋賀県、近江八幡
- ・ 火祭り

- ・ 島町

- ・ オープニングの最後にタイトル表示

■ 第一幕

- ・ いきなり菜種刈りの映像（老人クラブの説明をナレーションで入れる）

- ・ 昭二さん・栄吉さんの話（ほんがら松明復活の経緯）

- ・ トヨシさんにも聞く

（老人クラブ役員会で松明復活が決まって正直どう思ったか、
準備が大変、調整が大変...ということはどう考えたか、
誰に聞いてどう段取りしたか、
菜種が大量に必要→みんなを菜種刈りに動員した）

- ・ 菜種運び&積み作業の映像

■ 第二幕

- ・ 梅雨の風景

- ・ ほんがら松明ってどんなん？（数人の老人の語りで、謎解き風に小出しにしていく）（ ）

- 穴が空いている（女性のシンボル）
- 子どものときにくぐって遊んだ
- ほんがらは島町だけしかない
- 50年ぶり
- 奇数じゃないと
- 男結び
- お燈明の形
- レンゲの花畑の中に立っていた
- 下から日を入れて「ドンドン」すると上から「ポッ」と火が出る
失敗して横っちょから出てしまうことも
- 高さや美しさを競い合っていた

- ・ 梅雨明けの風景

- ・ 菜種揉み作業～倉庫へ収納の映像

- 昭二さんに語ってもらう（なぜ菜種殻なのか→白くてきれい、燃えやすい、昔は田んぼで栽培していた）

・夏の田んぼ（青田）の風景

■ 第三幕

・福居さん地藏盆？

・菜種まきの作業風景

- 田谷さんに語ってもらう（昔の田んぼの風景は菜種や蓮華で箱庭のように美しかった、菜種油は昔は日常生活に利用していた。自給自足）

・秋の稲穂の風景

・稲刈り作業の映像

- ワラの説明（なぜもちワラがいいのか、今は農作業が機械化されてワラや縄が手に入らなくなった）

・稲刈りの続き、ハサかけ作業の映像（小学生も参加）

・田谷さんの語り（映画「村の学校」の記憶（スチール）→郷土教育のこと→小学生時代からの農業体験の大切さ）

・昔の田んぼ（昔の田んぼの写真）

- 昭二さんの語り（子どもの頃の思い出、魚つかみ、汁田のこと...）

- 良治さんの語り（昔は田んぼが地域コミュニティのつなぎの場として機能していたこと）

- 自然との共生、自給自足（共同作業の場、自給持続の暮らしは共同体を強く結束させるが、貧しく苦しくもあった）

・田んぼの現状

- 関目親子に語ってもらう（国の農業政策と現場とのあつれき、その中で農業を継ぐということ）

- 田んぼを継ぐということ（昭二さん、寿一さん、三郎さん、良治さん？）

- 島町にとっての「田んぼ」の意味が変わっていく→農村の都市社会化→コミュニティの存続に関わる（ナレーション、第三の声？）＜どう表現するか？保留＞

■ 第四幕

・ 秋の風景

・ 竹刈り作業

- 昔は刈った竹はまずハサカケ用に使い、古くなった枯れ竹を松明に使った（乾燥して
いて燃えやすい）が、今回はそれがないので10月に刈ったものを使う。（寿一さん）
- 輪に使う竹は編むので青竹がいい。→2月にもう一度刈る
- 島町にとっての竹文化（生活の様々な場面で竹を活用していた。堂川さん？）

< 竹に関するコンテンツ不足！保留 >

・ 里山文化

- 田谷さん木の切り出し→薪割り→井戸水で薪風呂沸かす：自然の恵みに感謝
- 水脈：竹やぶから若宮神社まで、水脈がつながる（寿一）
- 豊かな山水で育つ米はおいしい
- 生活水としての利用（カワト？井戸？）

・ むべの収穫風景

- むべとは？（里山に自生）
- むべの昔話

・ 古墳、出土した土器の話（田谷さんに案内してもらう）

- 先人への思い

・ お墓参りの風景 → 語り（先祖への思い、家を継ぐということ）

- それぞれのお家事情（養子、跡継ぎ...）：三崎、芳郎、良治、
- 「個」と「共同体」のバランスが崩れている

・ 女性と共同体

- 姑から受け継いだこと
- 村の風習の中での女性の役割

■ 第五幕

・ 神（神社）は共同体に守られ、村も神社によって維持されてきた。

・ 幻想的に、音楽挿入、ナレーションのみで展開。

・権現山（４／３）に始まり、白山で終わる（３／２０）...神事（年中行事）と農業（＝生活）はリンクしていた

虫送り、秋の例祭（百々神社）、新嘗祭、しめ縄づくり、神社掃除、大晦日
五穀豊穡を願う

・大嶋神社にある宝物の映像（宮司さん）？

・勝さんの宗教観、世界観のセリフをテロップで流す？

■ 第六幕

・ヨシ刈り風景

・シイタケの菌打ち（福居さん）

・日待ち（カメラが家の中に入る、個人で長年獅子舞の宿を続ける福居さんの姿、マージャンしている姿）

→ 祭＝コミュニティが集まる場

→ 奥組では日待ちが一度途絶えたが、有志で復活した...ほんがら松明復活への伏線

・獅子舞

・自治会集会（神輿担ぎの担い手となる若者が祭に参加してくれない現状を何とかするため、若者の有志が集められた）

- 自治会長の語り（土下座してお願いに廻った）

- 動きだす若者たち

・若者と共同体とのかかわり → 『ほんがら松明消滅の真相』を探る必要あり！！ → 勝さん、勇さん世代

- 昔は青年団や敬神会が祭の受け皿になっていた。→ 青年団とは？ 青年団の役割（語り： ）

- 生活・仕事のスタイルが変化 → 青年団の弱体化 → 組ごとに松明を作るようになり「ほんがら」がなくなった → 青年が地域で果たす役割がなくなった

・輪づくり・真づくり作業

- 若者が参加

- ワザ（竹割り、輪づくり、男結び）

- 幼稚園児が輪をくぐりに来た（昔話：子どものときくぐって遊んだ）
- 藤蔓採り
- できあがり、神社に運ぶ

・初春の風景（梅の花？）

・自治会集会 2（地域の若者全員が集まる）

- 若者の本音、対話、実行委員の船出
- 若者の祭への参加姿勢、中年世代が伝えてこなかったこと、自治会に役割委譲してしまったこと → 「多様な世代が集う場」としての祭の機能の消失 → 地域コミュニティの希薄化

・テツヤさんの話

- 青年団の組織について（16歳～25歳、男女とも、奥さんとの出会い）
- 青年団という縦社会の信頼性、年上への憧れ、かっこよさ、しつけ・厳しさ
- 青年団・消防団を通じたヨコのつながり（若い子の出会いの場、集まる場が今はない）
- 青年団：運動会での役割。運動会の機材づくりをしていた
- 「祭」の地域における意味→今は単に祭を続けるためだけにやっていると
- 「母親」の価値観（地域とつながった暮らしをしていない、祭をしらない、祭の悪いイメージが先行している、用事を作れば出なくていいという風潮、発言力の強さ（2世帯別居も母親の意見））
- 祭の神輿（今は上下関係がない、仕切る人が居ない→自治会が人を集めているのが原因）
- 祭に対する若者の意識の変化（昔は楽しみだった）
- 外へ出た島町出身者が、特に祭や地元への帰属意識が低い
- 外から入ってきた人の方がマジメに祭に関わってくれる。関わってくれることがうれしい。
- よその祭を見てもおもしろくない。自分のところの祭に参加するのが一番楽しい。
- 今でも田んぼをやっている家の人は、祭にも積極的に関わっている傾向。

・奥西カズタカさんの話

- 青年団がなくなった前後の様子（神輿のかきて集めは青年団の仕事だった。青年団解散後も一人でかきて集めをしていた、
- 「祭の担い手」という役割があったから、学区青年団解散後も島町青年団は続いていた）
- 当時の青年団の役割、若者の思い

- ・桜井夫婦の話

- 外から来たものとして、祭や農村固有の文化をどう思うか

- 島町に住むことを決めたいきさつ（自然・風景・人柄、奥さん＝自給自足・食の安全に関心、家も無垢の木と土壁、壁は自分で塗った）

- 祭があってよかった（地域と関われるきっかけ）

- 「田舎は近所づきあいが大変」と周りの人は言ったが、それは逆。近所づきあいがあるから住みやすい

- 松明を作るのは楽しいが、まだまだ戦力外。だから、ものも言えない。

- いつか子ども松明をつくってやりたい。

- ・実行委員三役が神輿の担ぎ手をお願いに廻る（ 3 / 2 4 ）

■ 終幕

- ・ヨシ焼き風景

- ・ヨシを円山へ買いに行く（自治会長）

- 琵琶湖（西の湖）とつながっていることが見えるシーンにしたい

- 語り（なぜヨシなのか）

（以下、祭の準備が着々と進んでいく様子をテンポよく切り替えていく）

- ・サクラ咲く風景

- ・老人クラブ会議（松明へ向けて！）

- ・ほんがら松明化粧作業、立ち上げ作業

- 藤のつるを大嶋神社の池から引き上げ、皮をはぐ様子を撮る

- 穴を撮る！

- 若者のかかわり、伝承

- 作業後、その場で宴会をしてもらう → 松明を囲んで江州音頭？

- ・太鼓化粧直し（ 4 / 1 5 ）

- ・太鼓練習

- ・子ども松明づくり

- 島町の子どもを集める？

・自治会の松明づくり（４／１５）

- 「どんがら」の特徴が分かる写真を撮影し、インタビューに挿入する
- 各組でどんがら松明が作られ、若宮神社に運ばれ、６本並ぶ様子を撮影（宮組を追う。桜井さん、関目シンヤさんが関わっている姿を撮る）

・６本並んだ松明の前で、ほんがらとどんがらの違いや、昔は田んぼに立てていた、祭の興奮・憧れ・楽しみ、昔の青年団のことを説明してもらう

- 昭二さん、栄吉さん

・親戚、兄弟が祭のために帰省（良治さんの大阪の孫夫婦、田谷さんの弟家族）

・祭本番に向け、高まる緊張感。

・祭本番

- 天高く燃ゆる松明、見つめる人たち（照明？）

・祭のあと

- 後片付け（芳郎さん）
- 本宮祭
- 達成感

・島町全員で集合写真を撮ろう！

- ぞろぞろと神社に集う町民たち

■終幕

・いつもと変わらない老人たちの生活風景ダイジェスト（エンドロール風、音楽に乗せて）

- 田植え
- 漬物、フナ寿司、チマキ
- お地蔵さんのお世話をする芳郎さん
- ゲートボール
- 畑作業
- 井戸端会議
- 小学校で子どもたちに教える田谷さん
- かん句発表（いい作品があれば各幕の合間に使用する？）

・新しい動きの芽（コミュニティが集う、未来に向かう）

- 宮組しいたけパーティー

・決め台詞

- 老人から次世代への遺言

- 若者から未来へ向かう決意 → 若者が宮司さんに話を聞きに行く → 松明の型は自由で構わない → 若者が自ら創意工夫できるところに楽しみを見出していこう（左義長のように）

【大正生まれ】



■ 門野忠三（８０代）

息子と一緒に造園業を営む。
ゲートボールでもカラオケでもとにかくお元気。
戦争体験の記憶が強い。



■ 中川吉太郎（８０代）

博識。郵便局で働いていた。配達をしてきたので地元では顔が広い。奥さんも気さくでよく動く面白い人。
昭和初期に島小学校でつくられた「郷土読本」を持っておられた。
今年夏に亡くなった。



■ 堂川さん（８０代）

ほんがら松明復活作業に参加する老人クラブのメンバー最高齢だったが、昨夏に亡くなった。
ほんがら松明復活発案者のひとり。

【昭和１ケタ生まれ】



■ 松村昭二（８０代）

優しい笑顔が印象的。
兄が戦死して家と農業を継いだ。
取材にとっても協力的。
ほんがら松明復活発案者のひとり。



■ 福井栄吉（８０代）

菊の栽培が趣味。
シルバー人材センターで働いていたが、現在は体調を崩し検査入院を繰り返している。
ほんがら松明復活発案者のひとり。



■ 田谷猛司 (70代)

博識。若い頃は土地改良技師として大中干拓や地元の農地改良にも携わった。

自然への畏敬の念が強い。毎年正月に権現山に登る。時折裏山に入って薪を割り、今でも風呂焚きに使っている。取材にはとても協力的。



■ 雪吹良治 (70代)

明るく朗らかな印象。郷土教育の先進地として有名だった頃の島小学校在校中の体験を克明に記憶している。

早くから農業を捨て、保険会社勤務で大阪・富山などを転々としたが、やはり島が一番。大阪在住の孫夫婦にも、必ず帰ってきて家を継ぐよう念を押している。

奥さんも町内出身で元同級生。



■ 福井芳郎 (70代)

小学生の時、白王町から養子として来た。松明が奉納される若宮神社のすぐ裏に住んでいる。燃えたあとの松明の後片付けはいつも芳郎さんの仕事。

隣にある大きなお地蔵様の世話を、先代から毎日欠かさずしている。

男児に恵まれず、娘も独身で、跡継ぎに悩んでいる。



■ 福井寿一 (70代)

生え抜きの長男で、地元の伝統ごとには人一倍詳しく、ご意見番的存在。

それゆえ、みんなが集まる場に自分が出て行くとどうしても場を仕切ってしまうので、ほんがら松明づくりの現場には自ら自重して出てこないこともしばしば。

不便な棚田での農業を続けていたが、足を痛めて今年限りで引退。棚田は耕作放棄地に...



■ 三崎さん (70代)

家も田んぼも継いでくれようとしていた長男が職場の事故で亡くなった。長男の嫁は実家に帰り、娘は外へ嫁ぎ、跡継ぎで悩んでいる。

足が悪いためゲートボールには参加していない。

島町にあまり特別な思い出はなさそう。松明づくりも付き合いで時々参加する程度。

【昭和2ケタ生まれ】



■雪吹 勝さん（70代）

島町の歴史に造詣が深く、自然・農業・寺社・地域文化の関係性について持論を持っている。

自分の意見をはっきり言うため、地元ではやや異端視されていて、そのことを強く自覚しており、結局インタビュー撮影には応じてもらえず。

【若手】



■松村藤代司さん（60代）

今年度島町老人クラブ会長。島学区公民館長。

もしこの人が今年度の会長じゃなかったら、ほんがら松明復活は実現しなかっただろう。

きっちり仕事をこなし、人望が厚い。

ただ、あまり表には出たがらない。



■雪吹三郎さん（60代）

ほんがら松明に使うもち米の田んぼの持ち主。

老人クラブの中ではもっとも若い。

氏子総代。

取材にとっても協力的。



■奥西さん（60代）

民生委員。いつも笑顔。



■門野 明さん（60代）

父の忠三氏とともに造園業を営む。

自宅の裏の竹林で松明用の竹を切った。



■ 松村勉さん（60代）

12月の総会で、次期老人クラブ会長に決定した。



■ 勇さん（60代）

滋賀名物「江州音頭」の歌い手。酒が入ると得意の喉がうなるが、普段はいたっておとなしい。



■ 関目さん（60代）

< 参与観察データ及び筆者考察メモ >

松明祭りまでの撮影

【1月29日】

近江八幡の山に入って、松明用の竹取りの撮影であった。主に荷物（三脚）持ちである。おじいさん達は慣れた様子で山に入っていた。竹を、大きなチェーンソーで切っていく。竹林の中にはイノシシ用の罠が設置してある。獣害に悩んでいる地域なのだ。本来は青竹を切って、ハサカケに数年使用して乾燥した竹を松明に使うものらしい。しかし今回は、ハサカケをしているところがないので仕方なく直接林から調達した。

竹を刈りに行くという行為は、筆者や撮影者である長岡氏からすると、非日常的で特殊な行為に思えた。しかし、老人たちは慣れた手つきで竹を選別し、切り倒していた。先人の知恵が生かされる場であり、若者はただ見ているだけという図は、こういう状況でしかあまり見かけなくなつたように思う。急に「80 前後のおじいちゃん」が、たくましく頼れる存在に感じた。

次に、葦切りの撮影を行った。島町ではなく、湖岸道路をはさんで隣接する白王町の葦屋を訪ねた。三脚を用意し、葦切りの様子を撮影した。頻繁に取材や撮影に人が来るそうで、撮影慣れされていた。どのポイントから、こういう風に撮るといいよ、というアドバイスまでしていただいた。切った後の葦は、斜めですどくなっている。普通の運動靴なら貫通することもあるそうだ。

スリッポンで行った間抜けな私は、まんまと足首を切ってしまった。痛い。撮影時は、動きやすいようにパンツスタイルで、靴は運動靴である。しかし、家を訪問するときは、機材を車から屋内に何度も運び込んだり片付けもあるので、履きやすいスリッポンと使い分けるようにしていた。葦切りの風景は、全体の構成としてごく一部のカットであるが、この日1時間程度、夕陽が山に隠れるまで葦切りの風景を撮影していた。

長岡氏がアングルを変えながら撮影している間、AD である筆者は出来ることが少ない。雑音が入ってはいけないため、離れて待機していることがほとんどである。葦切り以外でも、「それ以上撮らなくていいのではないか」と何度も思ったことがある。しかし、このこだわりの違いが「ドキュメンタリー映画」と「ホームビデオ」の差の一つになっていることを身をもって感じた。長岡氏が「適当に」撮らないから、島町住民にも熱意が伝わり、協力してくれているのだらうと思った。

ちなみに、毎年刈られている葦原は、葦がキレイなクリーム色をしている。しかし放置された葦はよどんだ、黒っぽい色になっている。葦切りの撮影に行かなければ、気づかない発見であった。





【2月17日】

KO-MA メンバーの根木山氏と長岡氏と、3人で撮影現場に向かった。獅子舞を撮影させてもらいに、福居さん宅へ向かった。

獅子舞を見せてもらった家（福居さん宅）は、権現山がきれいに見えるロケーションであった。「日待ち」の余興が獅子舞である。この日は「おやまの道中」・「まんざい」・「曲芸」が行われた。「撮影があるから」ということで、有志でお金を出し合ったそうだ。

福居さん方では、獅子舞をする人たちのために食事の用意がされていた。過去にはどこの集落でも見られた光景だそうだが、島町では福居さん方が代々受け継いでいる。しかし、跡継ぎがいらないため「出来るまで続けたいけど」と福居さんは仰っていた。

カメラが来るから普段より気合を入れるということが気になった。しかし、ドキュメンタリーの理論的には問題はないようだ。「ありのままを写す」ことが目的ではない。

後継者がおらず、養子をとったそうだ。視線をカメラにもってきてもらうため、出来るだけ長岡氏のそばにより、視線が分散しないようにした。福居さんの奥さんには「あんまりうつさんといてー」と避けられてしまった。島派と山口派に分かれる。福居さんの「居」は井伊の「い」を使わないようにと配慮したものというエピソードも聞いた。家での撮影後、山にしいたけを取りに行くことになった。通常より大きな品種で、農協でもよく売れるそうだ。おみやげにと、長岡氏と筆者の分を戴いた。

撮影をする際、ADはおじいさんやおばあさんの話に対して相槌を打てない。「マイク」として存在していなければ、話している人の視線がこちらに向いてしまい、カメラから

目線が外れるためだ。興味深い話でもリアクションが取れないのは思いのほか辛かった。また、ガンマイクは話している人の少し上<図示する>、喋っている方向に合わせて構え続けなければならない。更に、カメラの傍にいるときは動くと雑音が入るため身動きが取れない。

本来取材したいこと以外の内容もおじいさん達は多く語る。しかし、長岡氏は話している最中は話をさえぎることはなかった。

長岡氏も同じように、被写体となる人の話をさえぎることなく話を引き出していた。一回のインタビューには2時間程度かかるのが普通で、マイクをずっと持ち続けるのは骨が折れる作業だった。

インタビュー撮影に関して根木山氏は、「(撮影は)一種の外部刺激になるのではないかな。例えば、夫婦並んで昔のことを話すなんて普段あまりないことだから。」と仰っていた。夫婦の会話以外でも、「昨日うちのところに撮影がきた」「いつ完成するん」といった会話が島町内できかれるようになったと中川氏が言っていた。農作業や祭礼以外でのつながりを作ることに、ドキュメンタリー撮影は一役買っているように感じた。

長岡氏は「(島町の人に)受け入れてもらいながら撮影をすすめるから、時間はかかる。でも、他の地域と同じように見えて違う、というところを撮りたいし、逆に違うように見えて同じ部分も出して行きたい。住んでいる人は特別な人ではないから、こちらから魅力を引き出すには、まず仲良くなれないといけない。」と語っておられた。他にも、

- ・ 「ドキュメンタリーは待つことが基本」
- ・ 「『相手が主役』である」
- ・ 「ききたいことはその場できく」

ということを長岡氏から教えていただいた。また、カメラを向けることによって、記憶を言葉にしてもらうという作業も、普段思いつきを改めてすることがない老人には刺激になると仰っていた。よって、長岡氏の質問からすぐ脱線してしまっても、根気強く話をきき、質問を繰り返すよう長岡氏は配慮していた。

「同じ質問を繰り返す」という行為に対し、筆者は疑問を抱いていた。なぜ同じ質問がなされるかというと、一度目の質問では「想定している返答」が得られないからである。長岡氏が思い描くシナリオに合う言葉が得られるまで、形を変えて質問される。これはドキュメンタリー撮影の上で、捏造とまではいかないにしても、事実を歪めてしまうのではという思いが少なからず筆者にはあった。

しかし、ドキュメンタリー映画を作るからにはストーリーが成り立っていないといけない。映画を観ることにより「KO-MAの意図(長岡氏の意図)」が観客に伝わらないと意味がなく、更にこの映画を観たいと思わないような単調な話にはいけないのである。KO-MAの意図として、一つは島町の住民に自分たちの地域のすばらしさに気づいてもらうということがある。これはカメラ(長岡氏)という他者を仲介することにより、ある程

度客観的に自分たちの生活や文化を見直す機会になることが期待できる。身内がスクリーンに映し出されるということも面白みの一つとなる。

では、全く島町と関わりのない地域の人が島町におけるドキュメンタリーを見ることを想定する。「島町と同じような悩みを抱える地域に対するアプローチの一つになる」ということが、KO-MAのドキュメンタリー映画制作目的の一つである。

中川氏曰く、「(老人クラブの人は)最初は何でインタビューをするのか疑問を持っていた」そうだ。「でも、(ダイジェスト版を)見せたら納得してもらえた」とのことであった。



【3月11日】

松村努さん、福居芳郎さんへのインタビュー撮影。松村さんは釣りが大好きで、フナ釣りを4~5月下旬にする。朝7時から出かけて、夕方まで大中湖でしている。芳郎さんは、宵宮が終わる21時以降くらいから、自警団の人と松明の後片付けをしている。翌朝の8時~10時までには、奥さんと二人で片付けてしまう。これは昔から福居家がやっていることだが、後継者がいない。自分の体が動くまでやると仰っていた。送り松明の話や、太鼓化粧が今年は松村トヨシさんの組が担当すること、今年のお稚児さんは奥西さんの孫が当たっていることなどを教えてもらう。

その後、桜井さんの家に取材に行く。桜井さんは、「外部から島町へ越してきた。自給自足の生活が理想で、現在の家は、会社帰りに一人で壁を塗ったりして仕上げた。近所づきあいが大変とも言われたが、年配の人から学ぶことは多い。祭りがあることで、地元の人と仲良くなれた。去年初めて祭りに参加したが、細かい指示はなかった。紙媒体でのマニュアルがないのがすごい」と語っておられた。

【3月12日】

村松さんの奥さん(S14生)父は1歳のころ戦死している。祖母・母・自分の女だらけの一家なので祭りには参加せず。母の姉の子供→だんなさん。田はほっといてもいい。畑は手をかけないといけない。(ホンガラ松明を見ることが)初めてのことで喜んでいる。

奥西さん(71):「40才前後のときは、カシラをした。土地改良が、46年から行われたことははっきり覚えている。島は景観法の対象外で、白王のあたりのみである。農業には昔、若宮神社の湧き水を使っていた。水泥棒がないよう、昼寝をして番をしていた。親が「水で争いをしてはいけない」と言っていた。雨が降ったら解決してしまうし、後に遺恨だけ

が残るからだ．水への感謝を忘れてはならない」ということを仰っていた．

また，ホンガラ松明を来年からも作り続けて欲しいかという長岡氏の問いに対し，「1 年だけだから盛り上がるということもあるだろう．人に見に来なければつまらない．老人クラブも見に行くべきだ．息子はいつも「あほみたい．人に見に来ていない．」と言っている．見に行かないほうも悪い」とのことであった．「自分のとこの林の木で（家が）建ててある．先祖に感謝している．築 50 年．100 年，200 年と続いて欲しい」

老人クラブ会長さん：村松さんは「（島町の長老に対し）大将ばかり，自分が言ったことはカットして欲しい...」と若干遠慮気味であった．噂として，何でも広まってしまうから気を遣うそうだ．最初，話すことはないと言っていたが，話がどんどん出てきた．

堂川さんの奥さん昭和 4 年生まれ．結婚式の写真を見せて欲しいと頼むが，「恥ずかしい」と断られる．長岡氏が何度も「（家に写真を）撮りに行かせてくださいね」とアポをとりつけていた．

【3 月 13 日】

門野さんの家に写真を見せてもらいに行く．ホンガラ松明と一緒に撮った写真があるとのことだった．写真を撮るのが好きだったそうだ．



【4 月 3 日】

権現山にて、山登りを行った。北津田のほうの山登りは3月20日に長岡氏と藤田氏とで行われていた。長岡氏曰く「寒かった、道に迷いそうになった」。

筆者の役目は脚立を持って登ることであった。権現山は官山、つまり営林省のものであったそう。大きい杉に御参りをする。そこから先は神様の場所なのだそう。岩が多い。岩の祠があり、大きな岩に注連縄が巻いてあった。岩がご神体なのだそう。お参りをして、お神酒を飲む。祠のそばの木には、昔彫られた名前（女性）のものがあつた。

老人たちは山をどんどんと進んでいく。長岡さんはカメラでぜんまいの芽や山椿を途中とりながら進んでいた。菜の花も撮影を行った。これら、編集時に季節の移り変わりを表す要素として必要になる。

山を降り、「稚児託宣祭」が行われた。島町在住の男子の中から稚児を決めるためのものである。稚児に選ばれた家は、神主から稚児の証であるヒモロギ（榊）を貰い受ける。神社から、今年のお稚児さんの家まで行き、ヒモロギを渡す儀式が行われた。長岡氏の、「お稚児さんは昔特別だったのか」という問いに対し、「お稚児さんは昔、あたったらとても喜んだ。昔は子どもが多かったから、そうそうあたるものではなかった。今は子どもが、しかも男児というと少ないので、(あたっても)有り難みがない。」という答えが返ってきた。



【4月4日】

午前中、ゲートボールをしておられる老人クラブの方に話をおききした。次の老人クラブ会長に話をきいた。「(撮影は)少し恥ずかしい。松明自体は昔からやっていることである(だから特別な感じはしない)。若い人はやらない。農業の生活に合わせた祭りだから、今の人の生活にあわないということもある。農閑期でも、むしろ会社の仕事は忙しくなり、休めないから。」とのことであった。

田谷猛さんと門野忠三さんがゲートボール中に話をしてくださった。田谷さんは、「島は歴史が古く、いいところで、自分はその歴史を伝承している」と仰っていた。門野さんは、この日寒かったので燃やしてあった、焚き火にくべた木を取り出し、水をかけていた。これを磨くと綺麗な木目が出て、花器などを作る素材になるそうだ。「こんなつまらんことして楽しんでるよ」と笑っておられた。

ゲートボールの休憩小屋の行事予定を書き込み黒板に「ホンガラ松明」の文字があった。「誰が書いたんや」と老人達が笑っていた。ゲートボール場として使用される広場は、子どもたちの遊び場にもなるが、ホンガラ松明に関しては子どもたちはよく知らされていないはずである。老人の誰かが書いたのだ。まるで、文化祭や体育祭を心待ちにする学生のような書き方であったので、思わず見た人は笑顔になったのだろう。照れくさいような、楽しみにしているような笑顔を見せる島町の人達を見て、撮影者としてだけでなく松明が成功してほしいという思いが強くなった。

その後、老人クラブ会長と共に葦を買いに行く。白王町に葦屋があり、松明の時期になるとそこに松明用の葦を買いに行くそうだ。



その後、近江八幡の他の地域の松明撮影を行った。松明が立っていそうなところを車でまわる。運転手、小雨が降ったりやんだりの状況。立っていないところは近所の人に直接ききにいく。もう祭りが終わっていたり、まだ立っていなかったりした。





【4月12日】

田谷さん(78)宅にてインタビュー：縁側に座ってもらい、長岡氏が様々な質問を投げかける。写真をたくさん見せてくれる。「ホンガラ松明についてどうおもうか」という長岡氏の問いに対し、「別に、以前はホンガラ松明が普通だったから、特別何かを感じるということはないな」とのことだった。また、「家を継いでもらおうという気持ちはあるか」という問いに対しては、「子ども達は東京にいて、孫がよく遊びに来てくれる。先日も車できよった。すぐに継いでもらおうとは思ってないけど、(島町は)素晴らしい場所だから、老後にちょっとでも住もうかなと思ってくれたらいい。後世にいろいろ望みすぎるのは野暮だ。もう何十年も(自分自身が)生きられないから、特に言いたいこともない。花を毎日世話をしているのが楽しい。」ということだった。筆者の、「カメラで撮られることについてどう思うか」という問いに対し、「カメラがあっても、シナリオや台詞が決まっているわけではないから特に緊張はしないよ。話していると、ふと昔のことを思い出したりする。」とおっしゃっていた。帰り際、長岡氏は田谷さんの奥さんが近所の方と談笑しておられるのを見て、カメラを回した。それに気付いた奥さんは、「とらんといて、恥ずかしい」と洗濯物の後ろに隠れてしまった。

長岡氏は、咲いている花やしゃべっているおばあちゃんたちを撮っていた。季節感を出したり、ほのぼのとした島町の雰囲気演出するカットとして使用するのだろう。また、ホンガラ松明をさまざまな角度から撮っていた。4,5月 は天候も良いので、女性が外に出る

機会が増える。6月以降は暑くてあまり日中は出てこなくなるので、それまでに女性が畑などで作業している姿を撮ってしまおう、と長岡氏は言っていた。夏の撮影はスタッフ側も大変になってしまうからである。たまたま見つけたテントウムシもじっくりと撮った。



【4月15日】

ドンガラ松明組み立ての日。長岡さんは黙々とアングルを変えながら作業風景を撮る。神社の草むしりと松明たてが半日で行われた。ホンガラ松明が立っていても、町の人は普通にしている。堂川さんの奥さん「あんばよう撮ってなー」と笑いかけてくださった。3年前事故にあう。注射を打ってきてから掃除に参加したそうである。畑仕事とってある。駅の近くから嫁いできた。「島流しだ」と言われた。今年喜寿。掃除は出るのが当然。今は出ない家の方が多い。子ども達（男の子と女の子、きょうだい？）はホンガラ松明自体知らなかった。長老達が頑張って作り上げたものなのに、知られていないのは少し寂しく感じた。北津田の松明は14日に立ててあった。

宮組では、「ホンガラよりも高い松明を立てようか」と笑いながら作っていた。基本的に宮組はのんびり。2時くらいまでかけた。お茶の休憩。他の組は午前に一気に作ってしまう。八幡の方の祭りは丸太を水につけておく。それを何年も使い回す。丸太の方が楽。

桜井さんの家にインタビューに行く。桜井さんは3年程前に、島町に越してきた外部の人である。「小学校も近く、田舎に住みたいと島町に来た。周りからは『田舎は付き合いが

大変だ』と言われたけど，むしろ付き合いを大事にしないといけないと思う．祭りなどのための集まりがあるから，周りの人と仲良くなれる．よく気にかけてもらっている」とのことだった．







午後 4 時頃から、日牟礼八幡宮の祭りを撮りにいく。周辺道路が通行止めなので、拠点であるマルチメディアセンターから歩いて 15 分くらいなので、機材を持って歩いていくことになった。

撮影していて、テープがあと 10 分で無くなりそうというトラブルが発生した。しかも長岡さんも、手持ちのスペアがなかった。マルチメディアセンターまで走る。AD らしい行動だと少し感動。

【4 月 17 日】

松明が全て揃う。この日は松村昭二さんと福居栄吉さんにインタビュー撮影を行った。二人は、亡くなられた堂川さんを含めホンガラ松明再生の発案者だった。島町の若宮神社において、完成したホンガラ松明を見ながら語るシーンである。完成したホンガラ松明を見て、「なかなか立派や」「島の松明は笠の部分大きい。下部より少し大きいくらいがいい。今回のホンガラ松明ももう一回り切っても良かった。」ともお話しされていた。松村さんは、「何気に（ホンガラ松明を）思い出して、みんながやろうと賛同してくれたことはよかった。やると決めてから、大変な手間がかかった。よくやってこられたと思う。松明に上手く火が付くといいが、多分何力所か火が出そうな所がある。見ていて分かる。」と仰っていた。

トラクターの音が邪魔で撮影がしづらい。ガンマイクを寄せる。福井さんが、「堂川さん

が早くに亡くなってしまったから、見せたかった。自分達も入退院を繰り返しているし、いつ死ぬかわからないから、完成したところが見られて嬉しい。本番上手く行くと良いけど。」と仰っていた。長岡氏が、「来年からもずっと続いて欲しいですか」という問いかけをした。筆者としては、「出来ることなら、ずっとホンガラ松明を後世に伝えて行って欲しい」とった返答を期待していた。長老の秘めたる思いは、島町ドキュメンタリーに込めるべき重要なメッセージだ。筆者の頭の中には涙ながらに後世への思いを語るシーンが美しく描き出されていた。しかし、両氏の返答は「若い人達に教えるのは大変。今年で最後ではないかな。」「覚える気がない人に松明作りを教えるのもしんどいけど、やる気がある人は返って口を挟みにくく、教えることは大変やった。来年やりたいと言ってくれる人もおるけど、(ホンガラ松明は、手間がかかりすぎて)時代の流れに合わない松明やから(どうなるかわからない).」と、想像していたよりも寂しい返事だった。筆者はガンマイクを構えながら、

また、「昔は松明を作って貰えることが楽しみで、今日子ども松明作ったる、と親が言った日は、学校に行ってる間中楽しみで、授業中ずっと尻がういていた。」

撮影状況としては、小雨が降ったりやんだりしていて冷たい風が吹いていた状態であった。長岡氏は、二人の表情をアップで撮ったり、松明を見上げる後ろ姿をおさえていた。また、終始トラクターの音がしていた。これは実際映像になると、見ていて大変気になるそう。二人のインタビュー撮影後、トラクターで耕しておられるところも撮っておられた。元から撮る予定もあったそうだが、実際にトラクターのカットを挟むことによって、インタビュー中の騒音がトラクターの音と分かり、気にならなくなるという効果があるそう。

松村さんは、「ニトロ」という薬を常備している。「ニトログリセリン」にかけて「爆弾」と呼んでいるのだそう。「自分の心臓もバクダンみたいなもんやから」と冗談めかして笑っておられた。

なかなか「堂川さんにも見せてやりたいな」といったような、映画としてぐっとくる台詞が引き出せない。「堂川さんがいたらなんと言うでしょうね」「堂川さんに言いたいことはありますか」など、質問を変えて聞く。少し寒い日だったので、相手の体を気遣うことも忘れない。(二人とも高齢なので)

【4月20日】10:30に駅に集合、島町へ向かう。関目さん(島町にて唯一専業農家をしている。親子で。他の人の田なども預かる)に田植えなどの予定をきく。おばちゃんの話聞きため、おばちゃん探し。南さん(ともう1人)が畑で喋っているところをつかまえる。菜の花をバックに良い感じで撮影が進んだ。最後に若宮神社に立っている松明を改めて撮影する。

【4月21日】

松明祭り当日．

<14:00> 島町自治会館に KO-MA スタッフと撮影スタッフ集合．カメラクルー8人，カメラ8台，AD6人（内2人は夕方から参加）の計14人である．天気が心配されたが，うす曇でなんとか雨は降らずに済みそうだった．

まず，島町内でロケハンを行い，どこでどういうショットを狙うか，照明はどうするか確認をする．藤田氏と長岡氏がメインとなり，原氏がアドバイスをを行いながら確認が進められた．

カメラクルーには映像学校の生徒が参加していた．原氏が「撮り方」をレクチャーする．



<18:30> ナオライが島町自治会館にて行われる．太鼓の担ぎ手（高校生男子～40代半ばの男性）が集まり，宴会を行う．自治会長の挨拶があるため，撮影スタッフが集合し，ナオライの様子を撮影した．

筆者は原氏の指示に従いガンマイク持ちを行った．それまでの取材に使っていたガンマイクよりも少し大きく，持つ手が痺れた．原氏は人々の表情を様々な角度から捉えていく．クローズ・ショットをたくさん撮っておられた．全体を写すようなミドル・ショットは他の撮影スタッフが行っていた．原氏は画面に自分が映りこんでもあまり違和感がないよう，法被を着用していた．インタビューはせず，ナオライの様子を撮っただけであった．

ある程度撮影が済むと，原氏は島町の人にお酒を勧められ，飲んでいた．お酒の席ということもあるが，スムーズにコミュニケーションが出来るということは，人々の気持ちを汲んで表情を捉えることが上手いということなのかと感じた．

ナオライには，地元のケーブルテレビである HOTTV も撮影に来ていた．自分たち以外のカメラがあることに少し驚いておられるようだった．HOTTV のカメラは，全体の様子と，数人の島町住民にインタビューを撮影していた．

<19:00> 若宮神社に稚児が到着し，神事が行われた．御祓いを受け，社殿から御神灯の火



太鼓出發後の時刻は大まかな目安です。

[illegible]

若宮神社側と、太鼓側で撮影チームは分かれていた。筆者は太鼓側であった。太鼓が担がれる様子を撮るのはもちろん、それを見守る住民の表情を押さえなければいけなかった。祭りとは、その非日常性と、「見られる」ことによって盛り上がるものである。

太鼓の担ぎ手となる若い男衆の中には、ナオライの時までカメラで撮影を行うことを

よく知らなかった人も多かったようである。「カメラで撮ってはるさかい。」と長老たちが声をかけると、緊張した面持ちで太鼓をかついでいた。カメラがあるからか、シュウシと呼ばれる太鼓を上下に大きく動かす動作を、大げさに行っていた。



若宮神社から太鼓が見える位置に来ると、若宮神社にいる自警団は最初の松明に奉火する。これ以降、一つの松明が燃え落ちると二本目の松明を燃やしていく。基本的に境内の奥の方の松明から燃やしていくが、特に決まりはないようだ。ホンガラ松明は奥から三つ目だったので、三番目に奉火されることとなった。境内に集まったカメラは、ロング、ミドルショットで松明の様子をカメラに収めていく。松明を見守る人々の顔を撮ることも忘れない。

松明が一基燃え落ちる頃、太鼓が境内に入ってきた。太鼓は社殿の前でシュウシを2、3度行った。社殿での神事が終わり、松明が残り2基ほどになると、再びシュウシを行い、若宮神社を出発することになる。筆者はマイク持ちをしていたが、途中からマイクは不要となり、離れて見守るのみとなった。

二本目の松明に奉火され、松明が燃え上がった。松明が立てられてからほとんど雨が降らなかったため、勢いよく燃え上がる。激しく火の粉が舞い、隣のホンガラ松明に火が付きそうになる。通常のドンガラ松明ならば、外から火がついても全く問題はない。しかし、ホンガラ松明は中から火を入れるため、外から燃えて穴が開いたりすれば成功しない。それどころか、もし全てが燃えてしまえば一年近くかけて準備してきたことが台無しになってしまう。

そして、ついに恐れていたことが起こった。なんと、火の粉がホンガラ松明に降りかかったのである。「消防団水を持って来い！」「水をかけろ！」「あかん、はよ消せ！」「水はかけるな！」...ホンガラ松明のそばにいた長老たちは口々に叫ぶ。若い衆は、誰の指示に従っていいかわからずおろおろしている。観客からも、「はよ消して」「もうあかんわ」と小さな悲鳴のような声上がる。カメラは、混乱の最中に入り、人々の表情、緊張感を撮影している。筆者はというと、祭りを見に来ていた小さな女の子と一緒に「消えて！」と叫んでいた。緊張の只中にも関わらず、見ず知らずの人と同じ感情を共有していることに高揚感を覚えた。このような気持ちになったのは、サッカーの試合を観戦したとき以来であろう。「祭りは、共同体を一つにまとめるために重要な役割を果たす」という

意味が分かった気がした瞬間であった。

怒号が飛び交う中、一人の青年が松明によじ登りだした。「やめとけ」「あむない、落ちるぞ」「何してんねん、水かけろ」「消せ」四方八方から叫び声が聞こえる。火の粉がついたのは地上から 4 メートル程度の位置である。青年はペットボトルを取り出し、火の粉がかかった部分に水をかけた。少し菜種殻を焦がしただけで、火は消えた。

この出来事は、ドキュメンタリー映画のシナリオとして重要な部分になると感じた。なぜなら、ホンガラ松明を作ったことがある長老の話において、「(ホンガラ)松明に燃え移った火を消すのに必死になって松明を上った。松明から落ちて、骨折したやつもいた。」「手で叩いて消しにいった。熱いとかはもう分からない状態になってるから」というエピソードを聞いていたのだ。今回の事件も、骨折こそなかったものの、「今まで長老たちが時間をかけて作った松明を、台無しにしてはいけない」ととっさに体が動いたようである。話できいていたイメージと現実が起こっていることが相まって、感動を覚えた。

緊張が覚めやらぬ間に、ホンガラ松明に奉火されるときがきた。火種を松明の中に入れるには、まずホンガラ松明を大きく倒さねばならない。実際に倒す作業をする若者たちは初めてのことで、どこまで倒していいか分からない。「大丈夫や、もっと倒せ」という指示が長老たちから下る。カメラは、指示を出す長老達の様子と、それに素直に従う(しかない)若者達の姿、息を呑んで見守る観客を撮影している。



火を下から押し込み、松明を立て直す。ここから、ジツキを行い、火を天辺まで持っていく。ジツキとは、ホンガラ松明を持ち上げて落とすことにより、煙突状の内部に空気を送り込む作業のことである。流石に老人達だけでは骨が折れる作業なので、若者も戸惑いながら加わる。誰が「せーの」と音頭を取るかで揉める。一回目はあまりあがらず、空気も入っていないようであった。2回目から、「せーの!」という掛け声とともにどずん、と松明が降ろされる。中々火があがる気配がない。3度、4度とジツキを行うと、ホンガラ松明の頭の部分から煙が出てきた。「おお」と観客から声上がる。しかし炎は見えない。

時間が経ちすぎると、内部が先に焼け焦げてしまい、松明の途中から炎が出てしまう。これでは成功とはいえない。焦りが生まれる。

もう一度、火の中に入れることになった。今度は問題なく松明を傾け、火を投げ入れる。「せーの、よいしょお!」という掛け声に合わせてジツキをする。カメラはジツキをし

ている人々を近くで撮っている。



数度ジツキをするが、煙が出るばかりで炎は一向に上がらない。ホンガラ松明の内部からぱちぱちと燃える音がしていた。「もうええ、ようやった」「外から火いつけい」という諦めの声があがった。「あほか、まだいける」「もっかいや」と怒鳴り返す声がある。観客は煙が出る松明を見つめたまま動かない。筆者も成功するよう手を合わせて祈るばかりだった。「たいまつ、がんばれ!」と筆者と共に見ていた少女が叫んでいた。

もう一度火が入れられ、若者たちはコツをつかんできたのか今度はずどん、とジツキの息がぴったりあった。その次の瞬間、ごうと、笠の部分から炎が吹き、人々の歓声が上がった。若者たちは万歳と叫んだ。長老達は、笑顔で握手を交わしていた。



2006 年 6 月から，10 ヶ月という時間をかけて作り上げられてきた松明は，10 分としないうちに燃え落ちた．後から消防団をやっていた関目さんに話をきくと，「この一週間雨がほとんど降らず松明が乾燥していたということも相まって，とてもきれいに燃えた．燃え残りがなくて，後始末が楽だった．全部この松明なら（後始末が楽で）いいね」と仰っていた．

「松明」というシンボルは，外部から介入している筆者達にとっては特異なものであったが，近江八幡に住んでいる人は松明というシンボルに対し特別関心を持っていなかったように筆者は撮影当初から感じていた．しかし，「ホンガラ松明」という「特殊なシンボル」の出現と「カメラ」という異物の存在により，「失敗できない特別な松明」になったのだと思う．「撮影がなかったらここまでこれなかったかもしれない」という老人の言葉を思い出した．今年限りの特別な松明は，例えるならば学園祭に近い感覚が芽生えたように思う．地域の祭りと違い，学園祭は毎年変化し，同じ内容の祭りはない．今回限りという緊張感が，成功したとき大きな感動を呼ぶ．ホンガラ松明もそうである．今いるメンバーは，10 年先も揃っているとは考えにくい．来年があるかも分からない．失敗はしたくないしゆるされない．この緊張感が，ホンガラ松明を成功へ導いたのであろう．

森田三郎によると，「人は，自己のアイデンティティを確認するために，さまざまなシンボルを，一定のルールに従って使用する」という論を著書で説明しているが，島町の松明祭に置き換えると，ホンガラ松明は島町の長老達のアイデンティティである．そのアイデンティティは，「松明祭」という「公の場」で確認され，更に「カメラ」で撮影されることにより「世間」においても確認されようとしているのである．

【4 月 22 日】

< 8:00 > 島町自治会館前に集合する．目的は自治会館の側にあるグラウンドに，島町の人達が集まって記念写真を撮るところを撮影するためである．KO - MA が企画し，予め島町の人にその旨を知らせるチラシを配布しておいたものである．9:30 に写真撮影を行った．総勢 40 人ほどである．法被を着て来る人もいた．スタッフも記念撮影をした．

住民が集まって写真を撮る機会など，通常では考えられない．「せっかくだから」と KO - MA 内で提案されたことである．ホンガラ松明再生プロジェクトにおいて，この「せっかくだから」は非常に重要な言葉である．

神事を撮影．北津田の人が少し驚いていた．巫女さんの舞いなどを撮る．音声として手伝うが寒く，手がしびれる．原監督は静かに素早く動いてショットを決めていく．始まる前に手を合わせる．「神様のことだから，きちんとしないと」とのことであった．

「競馬」が行われるということで，カメラを配置しかまえていた．一般的にイメージされる競馬ではなく，二頭の馬が神社の横にある馬場を走り抜けるというものだそうだ．騎手が私服で，数度二頭の馬が駆けただけで，カットとしては使えないことになった．

[illegible]

福井栄吉さん「肩の荷が下りた。」栄吉さんの奥さんはホンガラ松明を見に行かなかったという。親戚が来ていたからだそうだ。ずっと島町にいるのだが、あまり松明は見たことが無いとおっしゃっていたので、見てほしかった。

【5月15日】

ツバメが入って来られるよう穴があけてあるおうちだった。「巢の下に糞を落とすからかなんわぁー」と言いながらも、そのままにしてある。私たちが取材に訪れても、とても歓迎してもらえる。そのような気質が表れているような気がした。

その後他の人にアポをとってインタビュー撮影は終了した。

【5月30日】朝から撮影を行った。

【6月5日】

畑で作業をしているおじいさんとおばあさんに話をききにいく。おじいさんは途中で帰ってしまい、別のおばあさん二人が合流して話した。桶風呂など、昔の生活の話をたくさん聞いた。倉庫に吊るしてあったタマネギを、お土産としてたくさんもらった。

長岡氏に、ドキュメンタリーが他のアートと違うことをAAFで評価されたという話をしてくださった。「自分達は外からアイデアを持ち込むだけ。通常のアートは、アイデアを持ち込んだ人がメインになってしまうから、町の人にはくっついて何かをすることがあっても自分たちで考えて動くことがない。でも、撮影では町の人为主役であり、町の人が考えて動く様子を撮るだけ」だと仰っていた。アートを持ち込むと、アーティストが主役で、持ち込まれた土地やその土地の住民はアートを取り巻く背景になってしまうが、ドキュメンタリーでは被写体为主役になるので、島町ドキュメンタリーでは島町という土地や住民が主役になるということが評価できるということであった。

炎天下での撮影。話をきく。キクオさんがよく知っているとのことでアポをとる。

【6月8日】撮影を申し込んでいた人の都合が悪くなり、天候も悪く撮影中止となる。

【6月10日】

福居さんの家で草餅を作るというので撮影に行く。ちまきも作っていた。婦人会ではないが、奥様方も集まってどのように作るか習いながらやっていた。おじさんたちも集まる。餅とちまきをいただく。

【6月13日】

門野さん（息子さん）に撮影をお願いしていたはずが、時間になっても帰って来られない。急遽お父さんの方にインタビュー（元々近いうちに撮影させてもらう予定だった）。危うく何のために来たか分からなくなることだった。蚊がいっぱいいて、噛まれる。ホンガラ松明の感想や、昔の島町の話などを伺った。

< 撮影に参加して・・・考察 >

ドキュメンタリー映画の撮影だけでなく、何かの撮影に参加すること自体が初めてであった。初めて撮影についていったときは何をしていたか分からず、とにかくカメラにノイズが入らないよう静かにしていることと、カメラがどちらを向いても自分が映りこまないようにすることに必死であった。

その後、長岡氏の指示に従ってガンマイクを持つ仕事をした。ただしゃべっている人にマイクを向けるだ



けの作業である。しかし、話している人の斜め上の辺りにマイクの先が来るよう構え、撮影対象となっているおじいさん達の視線が自分に来ないようにするのが大変であった。出来るだけ長岡氏と同じ方向からマイクを伸ばすか、全く違う方向からマイクを差し出して、カメラから視線が外れないよう配慮せねばならないことを教わった。室内であれば、ライトの光を遮らないようにすることも必要だった。



自分に対して注意が向かないよう、興味深い話が聴けても相槌を打ったりリアクションが取れない。そして長岡氏は、同じような質問を織り交ぜながら相手から言葉を引き出していく。何度か睡魔に襲われ、もう少しで撮影対象であるおじいさんにマイクをぶつけそうになったこともあった。外でのインタビューでは、撮影対象が動くのに合わせてマイクの先も調整せねばならない。重くは無いが、ずっと同じ体勢で持ち続けるのは（特に寒い時期）大変なことだと実感した。

撮影に参加していった感じたのは、島町の住民、とりわけ老人達がカメラを前にとても饒舌になることへの驚きであった。中川氏は「HOTTV（地元のケーブルテレビ）がよく撮りに来るから、老人達はカメラになれてるのかもしれない」ということをおっしゃっていた。また、「台本があるわけじゃないから、気楽にしゃべれる」と福井さんはおっしゃっていた。

しかし、普段島町内でもあまり顔を見ず、活発に話すイメージはないという人まで、カメラの前では多くの思いを生き生きした表情で語っておられたのである。中川氏が「あんな表情、初めて見た」と何度も言っておられたことを思い出す。中川氏は、地元の顔見知りがいると、返って本音が出ないかもしれないということで、出来るだけインタビュー撮影の場にいることを避けておられた。そのことも、気楽にしゃべれた一因ではないかと思う。

カメラの前で自分を「演じる」ことによって、普段の自分では話さないことも話しているような雰囲気があった。カメラに言わされている、誰にともなくカメラに語っているという実感が筆者にはあった。撮影されるということは、「自分を表現できる場」という意味では、写真を撮って展覧会に応募したり、絵を描いたり、歌を歌ったりすることと同じようである。ただ、それが自分の意思で始めるのか、カメラの来訪によって強制的に表現させられるのかという違いがある。

長岡氏は一度のインタビューに二時間以上の時間をかけていた。一人の人間が二時間語り続けるということは、日常生活では考えられない。実際、インタビュー撮影に同行するまで、インタビューというものは「カメラとマイクを向けて、一言もらう」作業だと認識していた。

単純に、筆者が撮影に参加して感じた、記録映画と今回の島町ドキュメンタリーの違いは、「人にかかる時間」である。ホンガラ松明を取り巻く人々の思いを、じっくりと話を聴

きながらカメラで受け止めるという作業が特筆すべきことである。もし KO - MA が「カメラ」という媒体なくホンガラ松明再生プロジェクトに参加していたら、一人ひとりの思いをここまで深く聴くことはなかったはずである。単に松明を復元させるだけなら、老人たちの思いを改めて聴く必要がないからである。

「カメラ」によって人々が動き、その思いを「カメラ」で受け止める。「カメラ」という触媒があるからこそ、人々の思いとホンガラ松明復活が繋がったと、撮影に参加することで実感できた。

近江八幡市も、左義長の映像を作っている。映像を作った目的は、「左義長・松明祭りを保存するため」である。目的が「保存」だけであり、行政側から「左義長を残すために撮りなさい」と言われて撮影するという、いわば「トップダウン形式」で映像が作成されているのである。一部の住民には「祭りの様子を撮る」ということは伝わったとしても、住民にとって「では何か特別なことをしよう」という発想にはならない。

また、作成後の用途に関しても、積極的に上映会が開かれているわけではない。元々の目的が「残すこと」だけなので、アート性を重視してシナリオは作成されていない。近江八幡市内の各小中学校や市立図書館に寄付された後も、著作権の関係で利用し切れていない（上映会を開く等）のが現状である。そもそも存在自体を知っている人が少なく、宣伝を目的としていないので当然と言えば当然のことである。

島町ドキュメンタリーに関しては、ホンガラ松明の製法をアーカイブとして残すこと以上に「島町の人達に自分たちが持っている宝物に気付いて欲しい」「島町と同様の悩みを抱える地域や人達に対して解決のきっかけになって欲しい」という思いがある。その思いは「様々な人が見て分かりやすく、見やすい」シナリオ作りに繋がる。

淡々と松明を作る手順を示すだけでは、見る人の心に響かない。長岡氏は「島町の問題を並べたい訳ではない。視点を絞らず、全体を描こうとするとただ単なる社会科の授業になる。」とヒアリングで述べている。「事実の羅列ではなく、ホンガラ松明を伝えたいなぁという思いを、老人達の遺言のようなものを撮りたかった。」なので、話の流れを壊すようなシーンや、やたらと暗い内容は省くようにしたそうである。基本的に、流れに合わない言葉は全て省いてしまい、印象的な言葉や胸に響く言葉なら考えて入れることもあるそうだ。

<ヒアリング内容>

□長岡氏へのヒアリング

質問：島町ドキュメンタリーのシナリオのイメージはどのようなものですか。

回答：なぜホンガラ松明が無くなったか、というところから話が始まって、じゃあホンガラ松明はどんなのかということを明らかにしていって、島町独特の作り方がある、ということを知るように撮ることかな。

質問：シナリオの案はどのようなものですか。欠かせないものはありますか。

回答：何を描くか...遺言のようなもの。老人達の、「ホンガラ松明を伝えたいなあ」という思いが伝わるようにしたいな。老人達の思いをメインにしたい。だから、今回のドキュメンタリーでは喧嘩のようなものは省いたりする。それも事実やけど、それも入れてしまうと話が広がってしまって、何が言いたいかわからなくなるから。結果として、若者が男結びとかを知らないということも入れるようになったけど、島町の問題を並べたいっていう訳でもないし。単に事実の羅列じゃないねんな。それでは伝わらへんから。

質問：では島町ドキュメンタリーで省くものは何ですか。

回答：悪口とか、流れを壊すようなシーンは省いてある。これ（流れを壊すようなシーン）はどの映画とかでもそう。基本的に流れに沿わない言葉などはいくらでも省く。よっぽど胸に響いたり、印象的な言葉が出たときは入れられるように考えたりもするけど...。島町のに限っていうと、無駄に暗いことは入れない。村が元気になるようなことを入れないといけないから、流れにあわへんってことやね。（「では例えば、ホンガラ松明再生を快く思っていない人がいたとしても、映画の中には出てこないんですね」という筆者の問いに対し）カメラで描ききれないことがあることは、見れば分かるんよな。だから全部を入れる必要はないねん。どの立場からものを言うかっていうことは大切。「島町には何も（良いところが）無い」って言う人も、当然いはるやろうけど、それよりは「島町をもっとこうしたい！」って思っている人を撮りたいから。

質問：ドキュメンタリーの撮影方法として、今回の島町での撮影は特殊なものですか。

回答：撮影の手法に関してもテーマにしても、ドキュメンタリーとしては基本中の基本の撮影方法。取材をして情報を集めて、インタビューしに行く、そして編集する、と特別なことは一切ないなあ。

質問：観光ビデオとの違いはありますか。

回答：観光ビデオ...と言えなくもないか。外に、撮影対象の良さを伝えるっていうことだけをとると観光ビデオにもなるかも。でも、観光ビデオは説明的なものが多いから。今回の（島町ドキュメンタリー）は、もっと「気持ち」寄りで、老人の思いに作業の工程を

プラスしたもんやから。「日本人はこう暮らしてきた」ということを、メインは島町の人達に見てもらうことやんね。それと、それ（島町住民）以外の人にも気付いてもらいたいっていう。本当は、権座のイベントを撮ろうかという意見も出たんやけど、権座はただのイベントの記録になるなあって。実はイベントの記録は、身内以外が見てもあんまり面白くない。よっぽどの問題が起きて、それを乗り越えとかならともかく、普通のイベントでは映画とまでは成りづらいよね。映画として成立させることが大事やから。きちっと落としどころがないと。観光ビデオとの違いはそこじゃないかな。

質問：島町ドキュメンタリー撮影をしたことで「良かった」と思った点はありますか。

回答：中川さんが、「普段あまり話さない人が、カメラの前だと生き生きしている」と言ってくれはったときかな。人とたくさん交流できるし。また作品が完成したら、いろいろ思うことが増えると思う。

質問：個人的な製作と島町ドキュメンタリーは別のものですか。

回答：それは分けてる。製作者側の意図を押し付けてしまうと、地元の人は受け入れづらいから。

□中川氏へのヒアリング

質問：なぜ KO-MA の会議でホンガラ松明のことを提案されたのですか。

回答：まず、老人クラブの総会でホンガラ松明を復活させようという話が出て、老人クラブの会長さん（05 当時松村さん）が、「せっかくやから資料として残したい」と相談してきはって、それをちょうど KO-MA で、各地域のフィールド調査をしたから提案してみたのが最初やな。松明の製法を残すために、最初は写真を撮って手順を紹介するから、カメラマンを探して欲しいということやった。

質問：最初からホンガラ松明に特別な思いがあったのですか。

回答：いや、当初はそんな大したことやないと認識してたから。自分たちにとっては松明は特別なもんやなくて、あって当然のもんやったし。権座のことが先にあったから、松明のことを詰めるのが遅れた。僕（中川氏）としては、「（ホンガラ）松明のことだけ記録するだけでええやん」と思ってたからね。それで、藤田さんや長岡さんさん、他の（KO-MA）メンバーから「ホンガラ松明は島町の宝」「歴史・思いを映像にこめる」ということで話が進んでって。歴史とかを入れるために最初はインタビューから始めてった。

質問：いつごろから、どのように撮影が進められていったのですか。

回答：6 月から撮影はしてたんやけど、情報集めは 7 月くらいからやったかな。うちの親父（中川氏のお父さん）が（昔の）郷土教育の冊子を持ってて、島町の郷土教育の話を洗

いなおそうってなった。ドキュメンタリーの下地作りっていう意味ではこの時点からようやく始まったっていう感じやな。8月くらい。

地元の人（島町の老人クラブの人）は、ホンガラ松明を記録に残すことやった。写真から映像、ドキュメンタリーと状況によって変わっていった。

最初カメラもって撮影に行ったときは、完全に HOTTV（近江八幡市のケーブルテレビ）やと思われてたから、（撮影の）次の日くらいにちょろっと放送されるだけやと思われてた。まあ、それは取材が長なっていくにつれ「何かちゃうぞ」ってなったと思うねんけど。

質問：撮影中に心がけていたことや気をつけていたことはありますか。

回答：ほとんど長岡さんにお任せ。プロやから。ただ、僕（中川氏）がいると本音でしゃべりにくいことも出てくると思うねん。同じ村にすんでるから、顔見知りやから言いづらいみたいなことがあるやろしな。それやとドキュメンタリーとして本音が出せへんようになってしまう。世間話というか地元話になってしまうし。せやから、あんまり僕がそばにおらんようにした。どうしてもマイク持ちがおらんってときはやったけど。

質問：撮影中に不安に思ったことはありますか。

回答：シナリオ作成は長岡さんがプロやし任せてたけど、KO-MA の会議で話し合ったのは映画の「落としどころ」やな。ずーっと「結」が見えない状態。ホンガラ松明が、果たして（ドキュメンタリー映画）作品としての価値をもつのかということが今の時点（2007年9月）でもまだちょっと心配やな。

質問：では、最初からしっかりとしたシナリオや、明確な作品のイメージは無いまま撮影がスタートしたということですか。

回答：もやもやした状態から趣旨が出来上がったから。小学生との絡みを入れることを提案されたときも、じゃあ老人クラブと小学生をどう結びつけようとか。松村さんが（老人クラブの）会長をしてへんかったら、ここまでスムーズにこられへんかったんちゃうかな。全く違うシナリオになってたと思う。

質問：島町ドキュメンタリーの特徴、他と違うところはなんですか。

質問：うーん、近江八幡市が作った左義長の映像なんかは、上（行政）が言って作らせたんやから、いわゆるトップダウンというか、言われたことをやるだけやから「作業」でしかないわな。今回の撮影は「偶然」というか、例えば稲刈りを撮影するのに、「じゃあおにぎりでも作っていこう」とかなってどんどん輪が広がって、作品になっていってるからボトムアップになるんちゃうかな。だから、もう一回ドキュメンタリー撮れてって言われても、全く中身が違うもんが撮れると思うわ。

□藤田氏ヒアリング

質問：島町でドキュメンタリー映画をとる目的は何ですか。

回答：近江八幡の島町，典型的な農村の問題を抱えている地域で，メンバーの一人に島町の人（中川氏）がいて，そのつながりで，目的は，一つめは（ホンガラ）松明の姿，記憶を（記録として）残すこと．二つめは，KO-MA としてはこっちがメインになるんやけども，島町も活性化につなげることが目的です．

資料的価値としては，語られることのなかった（老人達の）記憶が，カメラに記録されることになったこと．例えば，（現在 75～80 歳くらいの人達が）小学校のときに，島町が地元教育，郷土教育が先進的だと注目されたということとか．これは，今回撮影に入らなければ出てこなかったことやと思うし．

質問：「後世に遺すこと」が目的ですか．

回答：あくまで目的の一つで，KO-MA の目的は，この映像を見ることによって，島町の良さに気づいたりして，次の世代へ（ホンガラ）松明作りとかが受け継いでいってもらえたり，似たような問題を抱える地域の参考になったりきっかけになったりするの（KO-MA の）目的です．

質問：撮影中，人との交流で苦労したことはありますか，

回答：自治会の方は，1 年ごとに人が入れ替わるので，イベントを頼むには適さないということがあって．次の人（次年度の自治会の人）に仕事を増やして渡せないとか，1 年だけやから特に決定権がないこととかがあるから．だから，何かイベントとかをしたいときは，老人会や消防団とかの，あまり入れ替わりがない団体を選ばないと，うまく行きづらいかもしれない．

質問：島町という地域に入っていく上で，気をつけたことはありますか．

回答：中川さんがいろいろ話してくれそうな人をピックアップして紹介してくれたので，スムーズに地域に入って行けた方だと思う．そう言っても，いきなりカメラをまわしての取材はしない．本当は 2，3 年は下調べが必要らしいけど，時間の都合でそれが出来ないから，情報をたくさん持っている人にたくさん聞けるというのは良かった．あと，KO-MA のメンバーは役割分担をしっかりと自覚していたから上手く動いていると思う．

質問：ドキュメンタリーを撮る上で重要だと思うことはありますか．

回答：キーパーソンが一人でも欠けると厳しいと思う．今回は，中川さんとか老人クラブ会長の村松さんとかが，人望がある人やったから地域が動いたっていうのもあると思うから．もし誰かが欠けたら今と全然違う話になっていたと思う．

あと，主人公が作るドキュメンタリーは，本人達が思いをしっかりと持っていることが大

事になってくるので、あくまで「アート」として成立させなければたくさんの人にも見てもらいづらいと思うし、外にも内にも見ごたえがあるようにしないといけないから、

質問：プリズム TV といった地域ディレクター、一般市民が撮影した映像との違いはあると思いますか、

回答：目指してるところは似ていると思う、自分達の地域に対して興味を持ったり見直したり、ただ、TV 受けするのは「おもしろいこと、おかしいこと」で、役に立つブログに似ている感じかな、必要な人が選んで見るみたいに、島町のドキュメンタリーには「プロ」と「キーパーソン」がいるというのがまず違いやと思う、妥協がないというか、アートとしての完成度が高い、あと、一過性のものではないというのも違うところかもしれない、